

徳万頼成遺跡発掘調査報告 I EXCAVATION REPORT OF TOKUMAN-RANJO SITE 1

- 東大寺領荘園と徳大寺家領般若野荘の比定地における集落遺跡の調査-

2009年3月 富山県砺波市教育委員会

徳万頼成遺跡発掘調査報告 I EXCAVATION REPORT OF TOKUMAN-RANJO SITE I

2009年3月 富山県砺波市教育委員会





上:般若野荘にある徳万頼成遺跡(北より) 下:道路跡と溝が東西にのびる(西より)

徳万頼成遺跡は、砺波平野東部の芹谷野段丘のふもとにある遺跡です。 周囲は、古く奈良時代に東大寺領荘園が開田された場所として知られ、中世に至っては今も「般若」の地名が残るように、徳大寺家領般若野荘が経営されていた土地です。

このたび建設される国道 359 号砺波東バイパスは、富山市と金沢市を結ぶ大動脈として完成が待ち望まれている路線です。本来ならば国民共有の財産である埋蔵文化財を保護すべきところですが、発掘調査をもって記録保存する運びとなりました。

結果的に遺跡は破壊されてしまいましたが、我々に多くの情報をもたら してくれました。

まず平安時代、つまり東大寺領荘園の時代の杭列と道路遺構が検出されました。南北方向に整然と並ぶもので、荘園との関連を示唆します。中世では、掘立柱建物3棟を検出しました。東西に走る道路とその沿道に建物が正方位に配置されていました。その状況は、あたかも古代の条里制地割の痕跡を留めているかのように感じられます。また、古代の道路はこのたび建設されるバイパスと重複する位置に検出されたことは、荘園時代から現代に送られたメッセージのようにも感じられます。

このような成果を本書にまとめましたが、地域の歴史資料として活用いただければ幸いに存じます。最後になりましたが、般若地区自治振興会をはじめ、調査にご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成 21 年 3 月

砺波市教育委員会 教育長 **舘 俊博**

例

- 1. 本書は、平成19・20年度に実施した富山県砺波市頼成地内に所在する徳万頼成遺跡の発掘調査報告である。
- 2. 調査は、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所の委託を受けて、砺波市教育委員会が実施した。発掘 調査は、砺波市頼成地内の一般国道 359 号砺波東バイパス建設工事に先立ち、砺波市教育委員会が主体となり、 下記に業務委託し実施した。2ヵ年かけて本調査を行ない、平成20年度に整理作業を実施し、報告書を作成した。

〔平成19年度〕 株式会社アーキジオ (富山県高岡市西藤平蔵581)

現場代理人:田中昌樹

〔平成20年度〕 株式会社太陽測地社(石川県石川郡野々市町中林1丁目301) 現場代理人:藤井秀明

3. 調査面積及び調査期間は、下記のとおりである。

〔平成 19 年度〕 面積: 2,308 m 現地調査期間: 2007 年 7 月 12 日~ 2007 年 12 月 25 日

[平成 20 年度] 面積: 293 m 現地調査期間: 2008 年 7 月 29 日~ 2008 年 9 月 12 日

- 4. 調査に関するすべての資料は砺波市教育委員会で保管している。なお、遺跡の略記号は、市名と遺跡名の頭文 字(Tonamisi Tokuman-Ranjo)と末尾に各年度を付し「TTR-19」・「TTR-20」とした。
- 5. 調査事務局は砺波市教育委員会内に置き、事務は学芸員野原大輔が担当し、教育事務局長戸田保が総括した。
- 6. 調査事務局および調査担当者は以下のとおりである。

〔平成 19 年度〕 砺波市教育委員会

戸田 保

生涯学習課課長 清澤 康夫

文化芸術係長 鍋田 忠夫

学芸員

教育次長

野原 大輔 *調查担当

〔平成 20 年度〕 砺波市教育委員会

教育事務局長

戸田 保

文化財室長

清澤康夫

文化財係長

竹村和敏 (9月30日まで)

平木宏和 (10月1日から)

学芸員(主任) 野原大輔 *調查担当

- 7. 本書の編集は野原と藤井が行い、執筆及び図版作成は野原と藤井と下濱聡が担当し執筆分担は各文末に記した。 遺構写真は野原・田中・藤井、遺物写真は野原が撮影した。
- 8. 遺物撮影では、高岡市教育委員会の撮影スタジオをお借りすることができた。記して謝意を表したい。
- 9. 本書で使用している遺構の略記号は以下のとおりである。ただし、現地調査の遺構検出時点で略記号を付した ため、本文中では略記号と遺構の性格がことなる場合があることを断っておく。

掘立柱建物 - SB、溝 - SD、土坑 - SK、ピット - SP、性格不明遺構 - SX

- 10. また、本書で使用している方位は真北で、標高は海抜高である。
- 11. 土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(2001年前期版) に準拠している。
- 12. 本文中の遺構アイコンは、考古学 solution 遺構アイコン標準化委員会が作成したものを使用している。
- 13. 調査期間や整理作業期間を通じて、下記の方々から多大なるご教示・ご協力を得た。記して衷心より謝意を表 する。

金田章裕(人間文化研究機構),佐伯安一(砺波市文化財保護審議会委員),酒井英男(富山大学) 栗山 雅夫(高岡市教育委員会), 戸谷邦隆(津幡町教育委員会), 西井龍儀(富山考古学会)

以上、五十音順·敬称略

目 次

序		文										
例		言										
目		次										
序		章		調査と	経過				•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		1
			1		至る経							
			2	試掘調	査の結	果						3
			3	調査の	方法	•••••						7
			4	調査日	誌抄							8
第	2	章		地理と	歷史							. 9
			1	地理的	環境							. 9
			$\overline{2}$	歴史的								· 12
第	3	章		発掘調	査の	成身	₹					·· 21
			1	基本層	序の解	説.		, 				21
			2		た遺構							
			3	=	た遺物							40
第	4	章		理化学	的分	折り)成	果		•••••	•••••	·· 55
			1	木製品	の自然	科学	产分析	沂				55
			2	放射性	炭素年	代》	则定			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		64
第	5	章		総	括							67
報行	士言	 事抄	绿	·								

図版目次	7
Fig.1.1.1 Fig.1.1.2	下層遺構面の SX07-120
	事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地 試掘トレンチ配置図
Fig.1.2.1 Fig.1.2.2	
	試掘調査出土遺物実測図 徳万頼成遺跡の位置
Fig.2.1.1 Fig.2.1.2	砺波平野周辺の地形
Fig.2.1.3	が仮半野周辺の地形 芹谷野段丘の模式図
Fig.2.1.3 Fig.2.1.4	庁台野校正の模式図 庄川扇状地を中心とした地形分類図
Fig.2.1.4 Fig.2.2.1	だ川扇状地を中心とした地形が類図 芹谷遺跡の石器
Fig.2.2.2	
Fig.2.2.3	横田八年遺跡の石橋 厳照寺遺跡の竪穴住居跡と土器
Fig.2.2.4	松原遺跡の04 号竪穴建物
Fig.2.2.4 Fig.2.2.5	松原遺跡出土の縄文土器
Fig.2.2.6	松原遺跡出土の土製品
Fig.2.2.7	
Fig.2.2.7 Fig.2.2.8	高沢島Ⅱ遺跡の墨書土器
Fig.2.2.9	同代島 II 園跡の墨青工品 久泉遺跡の大溝と建物群
Fig.2.2.9 Fig.3.1.1	基本層序模式図
Fig.3.2.1	上層遺構面全体図
Fig.3.2.1 Fig.3.2.2	上層遺構全体図の概略
Fig.3.2.2 Fig.3.2.3	
Fig.3.2.3 Fig.3.2.4	遺構実測図 SB07-01
Fig.3.2.5	遺構実測図 SB07-02 (1)
Fig.3.2.6	遺構実測図 SB07-02 (1)
Fig.3.2.7	遺構実測図 SB07-03
Fig.3.2.8	
Fig.3.2.9	道路遺構の位置
Fig.3.2.10	
Fig.3.2.11	遺構実測図 波板状遺構
Fig.3.2.12	遺構実測図 柵列状遺構 SA01
Fig.3.2.13	遺構実測図 柵列状遺構 SA02
Fig.3.2.14	遺構実測図 柵列状遺構
116.0.2.11	SA04 · SA05 · SA06 · SA07
Fig.3.2.15	遺構実測図 溝 SX07-92
Fig.3.2.16	遺構実測図 土坑 SK08-37
Fig.3.2.17	遺構実測図 不明遺構 SX07-120
Fig.3.3.1	遺物実測図(1)
Fig.3.3.2	遺物実測図(2)
Fig.3.3.3	遺物実測図(3)
Fig.3.3.4	遺物実測図(4)
Fig.3.3.5	遺物実測図(5)
Fig.3.3.6	遺物実測図(6)
Fig.4.1.1	木材拡大写真(1)
- +o	

Fig.4.1.2 木材拡大写真(2)

木材拡大写真(3)

各図の位置関係

条里坪付と坪地割呼称図

石粟村・伊加流伎(伊加留岐村)・井山村

Fig.4.1.3

Fig.5.1.1

Fig.5.1.2

表目次

Tab.2.2.1 栴檀野窯跡群一覧 Tab.3.2.1 波板状遺構の規模 Tab.3.2.2 杭列の構成 Tab.3.2.3 土坑 (SKO8-37) 出土炭化材の分析結果 Tab.3.3.1 遺物観察表 陶磁器類 (1) Tab.3.3.2 遺物観察表 陶磁器類 (2) Tab.3.3.3 遺物観察表 陶磁器類 (3) Tab.3.3.4 遺物観察表 陶磁器類 (4) Tab.3.3.5 遺物観察表 石製品 Tab.3.3.6 遺物観察表 金属製品 Tab.3.3.7 遺物観察表 木製品 Tab.4.1.1 樹種同定結果 Tab.4.1.2 放射性炭素年代測定結果 (1) Tab.4.1.3 放射性炭素年代測定結果(2) Tab.4.2.1 放射性炭素年代測定結果 Tab.4.2.2 曆年較正結果

Tab.1.2.1 試掘調査出土遺物観察表

写真図版目次

PL.1 空中写真(1)

PL.2 空中写真(2) PL.3 空中写真(3) PL.4 遺構全景 PL.5 SB07-01 PL.6 SB07-02 PL.7 SB07-03 PL.8 SB08-01 PL.9 SK08-37 PL.10 柱列·柵列 PL.11 SD07 • 08 PL.12 波板状遺構 PL.13 出土遺物(1) PL.14 出土遺物 (2) PL.15 出土遺物 (3) PL.16 出土遺物(4) PL.17 出土遺物 (5) PL.18 出土遺物 (6) PL.19 出土遺物 (7) PL.20 出土遺物(8)

序 章 調査と経過

1 調査に至る経緯

平成 14 年に国道 359 号砺波東バイパスの計画路線がほぼ確定した段階で路線測量が完了したため、国土交通省北陸地方整備局富山工事事務所(以下、国土交通省という。)と砺波市教育委員会は埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行なった。庄川以西の砺波市矢木から柳瀬までの事業予定地における埋蔵文化財包蔵地の分布調査は、平成 11 年度に砺波市教育委員会が主体となり、富山県埋蔵文化財センターの協力を得てすでに完了していた。そのため、庄川以東(頼成・徳万・三合新・芹谷)の未踏査区間における分布調査を平成 14 年に実施した。調査は、砺波市教育委員会が主体となり、富山県埋蔵文化財センターから職員の派遣を得、国土交通省立ち会いのもとに実施された。その結果、埋蔵文化財包蔵地を 5 箇所(頼成川原遺跡、徳万頼成遺跡、三合新遺跡、三合新芹谷遺跡、栴檀野神社東遺跡)確認している。

徳万頼成遺跡の本調査に至るまでの間、平成 15 年度から 17 年度までの期間で太田地区に 所在する久泉遺跡の発掘調査を実施した。久泉遺跡の調査では、奈良・平安期の大規模用水 跡と「溝所」と考えられる施設跡を検出し、荘園研究に一石を投じる成果を挙げた。

平成19年4月、徳万頼成遺跡と頼成川原遺跡の試掘調査を実施した。その結果、頼成川原遺跡では河川運搬物である砂礫層しか検出しなかったが、徳万頼成遺跡の一部において遺構・遺物を検出した。試掘調査を受けて国土交通省、市土木課、市教育委員会の3者によって協議を行ない、保護措置が必要な2,273 ㎡について記録保存のための発掘調査を行なうことで合意した。以上の経緯により、徳万頼成遺跡において本発掘調査を実施する運びとなった。(野原大輔)

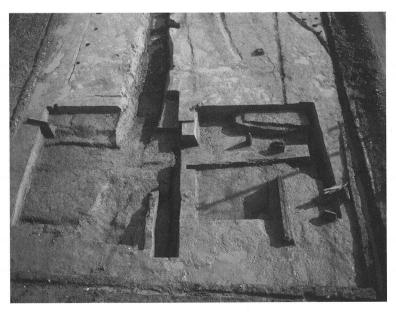


Fig.1.1.1 下層遺構面の SX07-120

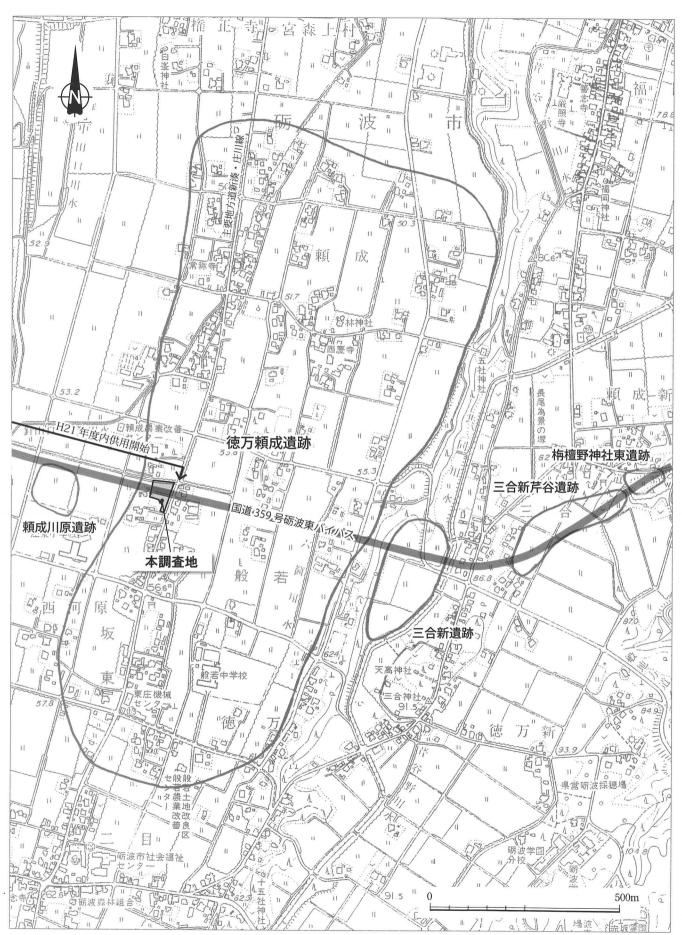


Fig.1.1.2 事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地

2 試掘調査の結果

調査の概要 一般国道 359 号砺波東バイパス建設に先立ち、頼成川原遺跡と徳万頼成遺跡の保護措置の資料とするため、砺波市教育委員会が主体となり、試掘調査を実施した。

○調査対象地 砺波市頼成 583 · 572 · 548 · 546 · 542 · 541

○調査対象面積 12,641.9 m²

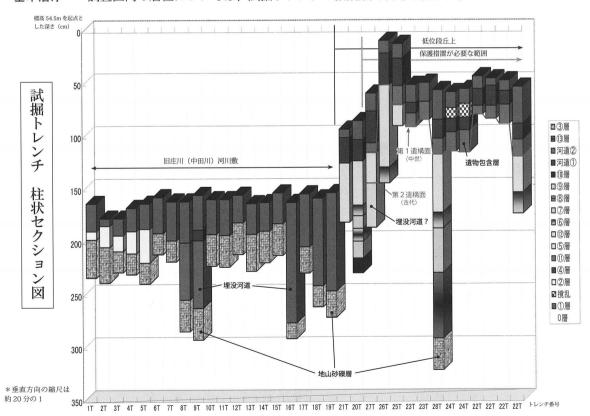
○発掘面積 717 ㎡

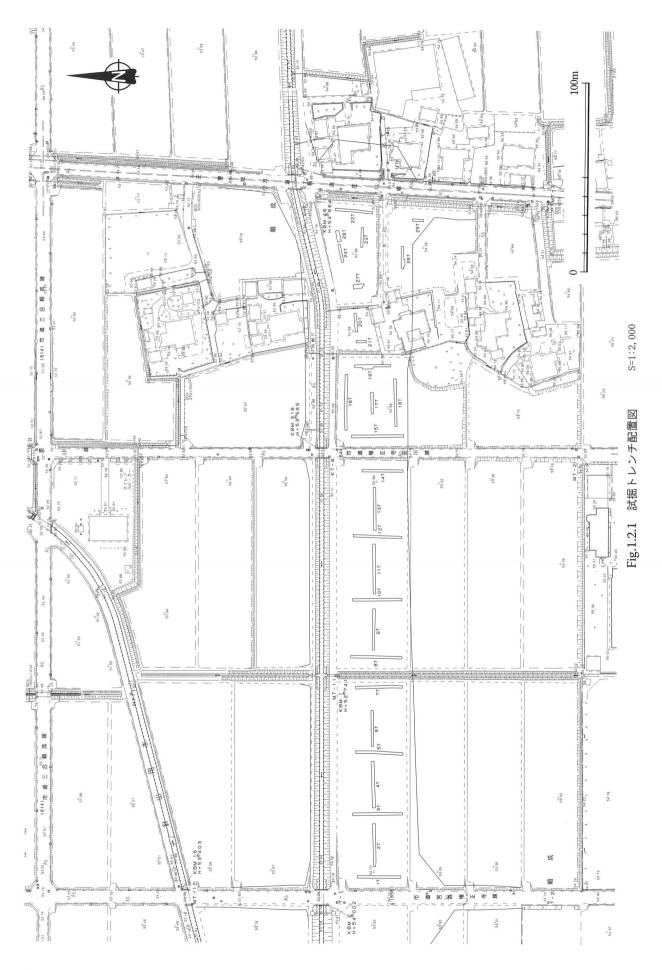
○調査期間 2007年4月25日~5月11日(実働5日間)

調査の方法 調査はバックホウによって地表面から地山である扇状地砂礫層または黄褐色シルト層まで掘り下げ、遺構・遺物の遺存状況を確認した。地形状況や遺構・遺物の検出状況を勘案し、合計 28 本の試掘トレンチを掘削した。

調査の結果 $1 \sim 21$ Tまでは旧庄川(中田川)の河川敷にあたるため、埋蔵文化財は存在していなかった。しかし、東側の低位段丘は西側と堆積状況が全く異なり、粘性の強いシルト層が累々と堆積していた。また、中世期の遺物包含層からは中世土師器をはじめとする遺物が検出され、その直下では遺構面を確認した。平野部では珍しい木製遺物(箸、板)を検出した。古代では、縄文土器、須恵器、土師器をはじめとした遺物を多く含む旧河道を検出した。よって、遺構・遺物が良好に検出された 2,273 ㎡に限り、記録保存のための発掘調査を実施することとする。

基本層序 調査区内の層位については、試掘トレンチの掘削順で番号を振った。1~19T





までは旧庄川(中田川)の河川敷にあたり、堆積状況はほぼ 同じである。表土(水田耕土)である①層、その下に混層で ある②層があり、③層の地山砂礫層が堆積する。20T以東 から庄川扇状地の低位段丘となり、堆積状況が異なる。地山 砂礫層は 28T では地表から 2.8 mの深度を測る。表土下に は性格不明の④層、中世の遺物包含層である⑪層が続く。⑪ 層には木質遺物も含まれる。①層下面・⑤層上面が第1遺構 面(中世)となる。しかし、⑪層と⑤層との層界は平坦画然 であり、両層の堆積には時間的断絶・堆積環境の変化が看取 できる。印層の形成過程が不明である。印層は 27T で確認 したが、20Tでの⑥・⑦層に相当すると考えられる。堆積 順序は変わらないが 27T だけ⑤層やその他の土層が色相が 異なっていること、古代遺物を含むことなどから、旧河道堆 積層と捉え、新たに

②層を設定した。

⑥~

⑩層までは水成堆 積層であるグライ土とピート土の互層である。鉄分の集積が 少なく、地下水位が高いことを示す。基本的には遺物は含ま ない。

河川敷では表土から比較的浅い位置から 検出した遺構 扇状地特有の砂礫層が堆積しており、遺構らしきものは確認 できなかった。しかし、9T・16Tなどからは埋没河道らし き砂礫層の落ち込みを検出した。埋没河道はいずれも北東方 向に流下している。遺構は、低位段丘上で検出した。ただし、 遺構は 22T・23T・24T・27T で比較的濃密に分布しており、 宅道南側の 25T・26T からはほとんど遺構を検出できなかっ た。宅道を挟んで南側は、圃場整備前に一段高かったという 地元住民の証言から、遺構は本来存在したが削平された可能 性も考慮される。22Tでは柱穴を確認している。特に残り の良いものは柱根痕跡の位置に炭化物を多く含んでいた。い くつか同規模の遺構があるため、掘立柱建物を構成する可能 性をもつ。溝遺構も検出したが、これは建物に伴う区画溝か もしれない。23Tで検出した円形の遺構は、形状・規模な どから素掘りの井戸の可能性が高い。これら遺構は第1遺構 面に属し、中世期に帰属すると考えられる。第2遺構面では 古代遺物を多く含む旧河道を 27T で検出したが、幅や深さ は確認できていない。

出土した遺物 $1\sim 21T$ までは遺物がきわめて散発的な状況であり、表土からの出土がほとんどであるため、混入品と考えられる。低位段丘上では、(1)層から中世遺物が出土



バックホウによる掘削



12T の土層断面(南から)



22T の土層断面(南から)



25T の土層断面(南から)



27T の土層断面(南西から)

したが、遺物量は少ない。遺物の種類は、 中世土師器、珠洲、青磁、木製品がある。 中世土師器は小片のため断定できないが、 12世紀後半から13世紀前半頃の製品が 多く、中世後期は少ない。珠洲は、甕胴部 片と片口鉢の口縁部が残る。青磁の椀は、 釉薬が厚く施されているので中国の竜泉 窯(浙江省)か同安窯(福建省)の製品と 推定する。また、木製品は箸や板が検出さ れたが、水分を多く含み粘性の高い遺物包 含層にはまだ多くの木製遺物が包含され ていると考えられる。27Tの旧河道からは、 縄文土器、須恵器、古代の土師器が出土し た。主体は古代であり、8世紀後半から9 世紀前半と思われる。縄文土器は晩期頃と 考えられる。

(野原大輔)

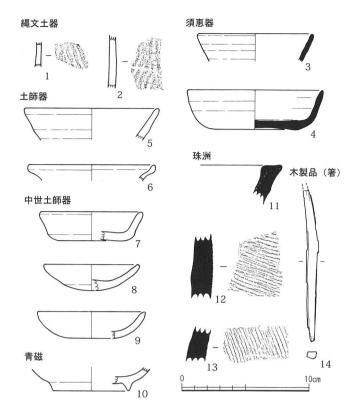


Fig.1.2.2 試掘調査出土遺物実測図 S=1:3

Tab.1.2.1 試掘調査出土遺物観察表

番号	出土	種類	口径	/F+ + + \	底径	/Th	器高					
番号	トレンチ	器種	(cm)	(残存率)	(cm)	(残存率)	(cm)	調整	焼成	色調	胎土	備考
1	27T	縄文土器	-	-	_	_	_	外:縄文(RL) 内:撫で	やや不良	外:7.5YR4/2 内:N2/0	やや粗	内面に黒漆塗りか。2mm以下の 細砂礫含む。
2	27T	縄文土器	, 	_	_	—	-	外:縄文 内:撫で	やや不良	外:10YR6/2 内:N2/0	やや粗	内面に黒漆塗りか。3mm以下の 細砂礫含む。
3	27T	須恵器 杯身	9.0	(1.4/12)	_	-	-	外:回転撫で 内:回転撫で	良	外:5Y6/1 内:5Y6/1	密	1mm以下の細砂礫含む。
4	27T	須恵器 杯身	10.8	(3/12)	6.9	(12/12)	3.1	外:回転撫で 底部回箆切り 後撫でか 内:回転撫で	やや不良	外:5Y7/1 内:5Y7/1	やや密	白色細砂粒含む。器壁は溶けて 薄くなっている。
5	27T	土師器 碗	10.6	(1.2/12)	_	_	_	外:回転撫で 内:摩滅	良	外:5YR6/6 内:5YR6/6	普通	外面に煤付着。
6	27T	土師器 甕	10.0(推 定)	(1/12)以下	_	_	_	外:回転撫で 内:回転撫で	良	外:7.5YR6/4 内:7.5YR6/4	やや粗	外面の一部に煤付着。1.5mm以 下の細砂礫含む。
7	22T	中世土師 器皿	8.0	(1.3/12)	6.0	(1.3/12)	2.3	外:撫で 内:摩滅	良	外:10YR7/2 内:10YR7/2	普通	
8	23T	中世土師 器皿	7.4	(1/12)	4.3	(1/12)	2.1	外:摩滅 内:撫で	やや不良	外:2.5Y8/2 :内:2.5Y8/2 断面:5Y6/1	普通	1mm以下の細砂粒、赤色細砂粒 含む。
9	26T	中世土師 器皿	8.4	(1/12)	4.8	(1/12)	2.1	外:摩滅 内:摩滅	不良	外:10YR8/2 内:10YR8/2 断面:2.5Y4/1	普通	1mm以下の細砂礫含む。
10	26T	青磁 碗			6.0 (推定)	(1/12)以下	_	外:施釉 内:施釉	良	釉:5Y5/3 胎土:7.5Y8/1	緻密	釉は非常に厚い。
,11	22T	珠洲 鉢	_	(1/12)以下	-	-	_	外:回転撫で 内:回転撫で	良	外:5Y5/1 内:5Y5/1 断面:5Y6/1	普通	1mm以下の白色細砂粒含む。
12	24T	珠洲 甕か壺	_	_	-	- ,	_	外:平行叩き 目 内:当て具痕	良	外: N5.5/0 内: N5.5/0 断面: N7/0	密	
13	23T	珠洲 甕か壺	_	_	_	_	_	外:平行叩き 目 内:撫で	良	外: N5.5/0 内: N5.5/0 断面: N7/0	密	粘土接合痕有り。
14	24T	木製品 箸	残存長1	2.0				1 2 · mm C		мідц.1 1 77/0		断面多角形。

3 調査の方法

調査の経過 本報告に関する現地調査は、平成19・20年の2カ年に渡って実施している。

平成19年度 現地調査は7月12日に着手し、12月25日に完了した。期間は5.5ヶ月を要した。調査区は、2箇所に分かれる。また一部下層の調査を実施した。下層を含む2箇所の調査区は、総面積2,662 ㎡(上層: 2.308 ㎡、下層:354 ㎡)を測る。

上層調査 道路によって南北に分断される。それぞれ北地区、南地区と呼称する。調査は両地区並行して実施した。

下層調査 北地区の西側である。上層の調査終了後に、実施した。

平成 20 年度 現地調査は 7月 15 日に着手し、9月 9日に完了した。期間は 2 ヶ月を要した。19 年度調査の北地区と南地区の間の部分であり、面積は 293 ㎡を測る。また、調査区内の 3 ヶ所で、下層堆積状況の確認調査を実施した。

調査方法 現地調査は、富山県埋蔵文化財本発掘調査積算基準記載の、発掘作業の工程に基づき、平成 19・20 年度に実施した。試掘調査成果並びに過年度調査成果に基づき、調査員立ち会いの下、重機による表土・盛り土を除去した。排出した土砂は、19 年度は調査区西側の残土置き場に仮置きし、調査終了後に埋め戻している。20 年度は調査区北側、19 年度の北地区に仮置きした。20 年度については、埋め戻しは実施していない。作業員による遺物包含層掘削後、遺構検出とともに遺構概略図を作成した。概略図を元に遺構の構成等を検討・確認後、半割・土層断面の記録・完掘・写真撮影の順で作業を進めた。全体図の作成については、19 年度は空中写真測量で、20 年度はオフセット測量で作成した。出土遺物の整理作業は、19 年度分は同年に洗浄・記名作業を実施し、分類・接合・実測作業は 20 年度に実施した。20 年度分は、すべて 20 年度に実施した。報告書作成及び理化学的分析は 20 年度に実施した。理化学的分析については、第 4 章に記述する。

調査参加者 調査には、以下の方々の協力を賜った。記して謝意を表したい。

発掘作業 2007年 [作業員] 加藤福蔵、田嶋 博、室田清二、仙道孝俊、村上良雄、安念一正、河原義夫、斉藤武平、島田一郎、坂口茂男 (以上、役) 砺波市シルバー人材センター)、中山政義、河合仁志、棚田賢進、斉藤寛、清水外志夫、湯浅三郎、大田賢一、湯浅 雅、上田義雄、沢田正夫、寺脇健治、今川孝司、中川敏正、武部才治、吉井房子、野原 勉、大畠重隆 (以上、役) 南砺市シルバー人材センター)、青山森明、松井きくい、内山由雄、内山澄子、野村保弘、小沢秀雄(以上、役) 富山市シルバー人材センター)、石田哲雄、笠谷 晃、林 憲彦、林恵美子、佐々木一男、前田明子、中山秀二、西川 精、鏡 武夫、船木藤夫 (㈱アーキジオ)

[調査補助員] 松永千春、舘宏則、福田恵子(㈱アーキジオ) 2008年 [作業員] 安念一正、折橋 清、加藤福蔵、河原義夫、坂口茂男、柴田信行、島田一郎、中島 忍、平岡輝幸、村上良雄、室田清二(以上、社) 砺波市シルバー人材センター)

整理作業 2007年 橋真理子、高橋英吏子、渡辺賀世子、真田恭子、新田三喜子、新保利恵、北川泰子、畑シノブ、水巻麻里、宮口美香、佐野睦美(以上、㈱アーキジオ) 2008年 下濱 聡、徳田澄子、加藤真紀(以上、㈱太陽測地社)



調査参加者



調査風景(柱穴の断ち割り)

4 調査日誌抄

2007年7月12日~12月26日 (平成19年度)

- 7.12 初回打合せ
- 7.20 地元説明会(般若自治振興会館)
- 7.23 事前測量作業開始 (~25)
- 7.31 現況高検査、事前確認及び工事看板設置
- 8.02 事務所用地造成 (~04)
- 8.04 地質調査 (~20)
- 8.09 事務所棟設置・機材・備品搬入 (~16)
- 8.23 重機掘削開始 (~28)
- 8.27 グリッド杭復旧作業 (~28)
- 9.03 北地区の調査区内排水溝掘削
- 9.06 両地区の包含層掘削
- 9.27 南地区は包含層掘削終了 遺構検出開始
- 10.04 南地区遺構検出終了
- 10.09 南地区遺構概略図作成 (~11)
- 10.10 南地区遺構検出状況撮影 (~11)
- 10.11 南地区基本土層記録写真 (~12)
- 10.12 北地区の包含層掘削終了 南地区基本土層記録図面 (~13)
- 10.13 北地区遺構検出開始 (~15)
- 10.15 南地区遺構調査開始
- 10.16 北地区遺構調査開始、基本土層記録写真
- 10.22 南地区全面清掃
- 10.23 南地区遺構検出状況·遺構完掘状況撮影
- 10.24 北地区写真撮影、インターンシップ受入 (~26)
- 10.25 南地区写真撮影
- 10.26 現地説明会準備、空中写真測量準備
- 10.29 空中写真測量実施
- 10.30 北地区下層確認開始 南地区遺構断ち割り 記録作業開始 (~11.09)
- 11. 8 報道発表
- 11.11 現地説明会(約120名参加)
- 11.19 北地区遺構断ち割り開始
- 11.30 南地区下層確認開始
- 12.12 北地区空中写真測量実施
- 12.13 北地区補測開始 (~19)
- 12.19 南地区補測 現地調査終了
- 12.20 埋め戻し開始 (~24)
- 12.22 現場事務所撤去終了
- 12.25 看板・資機材撤去 周辺環境整備
- 12.26 現地完了検査

2008年7月15日~9月9日 (平成20年度)

- 7.15 現況確認 初回打合せ
- 7.23 事務所棟設置、備品·機材搬入 (~ 24)
- 7.26 現況図作成測量 (~28)
- 7.28 グリッド杭復元、仮設道路幅杭設置
- 7.29 仮設道路工事開始 (~31)
- 8.01 作業員安全教育、作業説明実施
- 8.04 調査区内既設設備移設、重機掘削開始 (~05)
- 8.05 人力による調査区内排水溝掘削 (~06)
- 8.06 東半部包含層掘削開始 (~08)
- 8.07 東半部遺構検出開始 (~12)
- 8.08 遺構概略図作成開始
- 8.12 東半部遺構検出状況撮影、遺構調查開始
- 8.13 西半部包含層掘削、遺構検出開始 (~20)
- 8.18 西半部遺構概略図作成開始 (~20)
- 8.26 遺構調査終了
- 8.27 完掘状況撮影、個別遺構写真撮影、作業員雇用解除
- 8.28 全体図作成開始 (~9.01)
- 9.02 下層確認調査(深掘り)
- 9.03 補測作業開始 (~05)
- 9.09 備品・機資材撤収開始 (~10)
- 9.11 現場事務所撤収開始 (~12)

砺 波 の 徳万頼成遺跡 見つかった。 と並んでいることなどか 世 など中世期の土器も多数 須恵器などの遺物のほ 扇状 荘 などの遺構を発 地 0 0 住 大型荘 の東部のほぼ全域にわた 町三谷までの庄川扇状に ルの立つ場所が掘っ立て る規模で知られる。 住居跡と見ている。 来ともなった般若野荘の の越中国守・徳大寺家が 居 闌



|道軍が京方を破った| 11日午後2時から現地||承久の乱で鎌倉方の||般若野の合戦の舞台。

〔2007年11月9日付け 朝日新聞

第2章 地理と歴史

1 地理的環境

徳万頼成遺跡の所在する砺波市は、富山県の西部中央にある。面積は 126.96 k ㎡、人口 49,237 人 (平成 19 年 2 月末現在) であり、東経 136 度 54 分~ 137 度 04 分、北緯 36 度 33 分~ 36 度 41 分に位置している。

砺波市は、地形的に3つに大別できる。(1) 庄川の堆積作用によって形成された硫波平野 地 形 三 態 (住川富状地)、(2) 平野と山地の間に南北に細長く存在する河岸段丘・芹谷野段丘と庄川左岸段丘、(3) 東部に射水丘陵から続く丘陵性の庄東山地で構成される。

砺波平野は、その大部分が東部を北流する庄川により形成された扇状地である。庄川扇状 砺 波 平 野地は県内の三大扇状地 (庄川・神通川・常願寺川) に数えられ、そのなかでも最大の規模を誇る。 庄川扇状地扇頂部である庄川町青島から扇端部である高岡市南部の湧水帯までの距離は 13~15km、面積は 146 k ㎡に及ぶ。源を岐阜県荘川村に発し、高岡市を経由して日本海に注ぐ。流路延長115km、流域面積 1180k ㎡、平均河床勾配 1/120~1/800 の規模をもつ。庄川扇状地の勢いに押されるようにして小矢部川は平野西端部を流れ、庄川の排水河川の役目を果たしている。庄川扇状地には、地理学上著名な散村 (Dispersed Settlement) が広がっており、点在する孤立荘宅とそれを囲む耕地が調和し、長閑な田園空間を形成している。

庄川は現在扇状地東部を北流しているが、かつて西にあった流れが時代とともに東に移動してきたという、いわゆる「庄川の東遷」説がある。もっとも古い主流と考えられるのは野尻川 $^{\dot{\rm E}}$ 川で、中村川、新又川と移り、天正 13 年(1585)の大洪水で千保川・中田川(庄川)に移り、寛永 7 年(1630)の洪水で現在の流れとなったとみるのが定説化している。

庄川の右岸には台地がひろがり、河川作用によって形成された河成 (河岸) 段丘が存在して

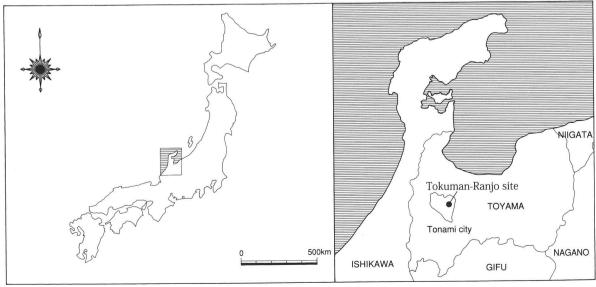


Fig.2.1.1 徳万頼成遺跡の位置

第2章 地理と歴史

いる。それらは低位段丘、中位段丘、 高位段丘として分類することができる。 庄川町庄から宮森までには低位段丘が 存在しており、隆起扇状地堆積物が形 成されている。頼成・権正寺・東保では、 庄川右岸に沿う帯状の自然堤防の微高 地上に集落が発達している。

芹谷野段丘

高位段丘にあたる芹谷野段丘(福岡 段丘)は、旧扇状地の右扇の一部が残 存し段丘となったものである。南は安 川付近から北は大門町串田付近まで 約10kmに広がり、福岡周辺では海 抜80m、段丘崖約30mを測る。段丘 南部の福山の山麓丘陵地はこの段丘地 形面と同時期もしくは前後に形成され た扇状地性の堆積層である。寛文3年 (1663) に庄川から芹谷野用水が引かれ、 段丘上に集落が展開した。

和田川流域 段丘帯

芹谷野の旧扇状地の東側と庄東山地 の縫合部の凹地に和田川が発達し、両 岸を侵食して低い段丘帯を形成してお り、和田川流域段丘帯と呼ばれる。和 田川は、牛岳の北西側山中に源を発し、 庄東山地と芹谷野段丘の間を大きく蛇 行し、池原付近で坪野川が合流する。 流路延長 23.5km、庄川の支流である。 昭和43年、和田川総合開発事業によ

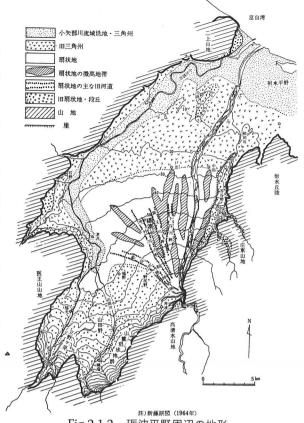


Fig.2.1.2 砺波平野周辺の地形

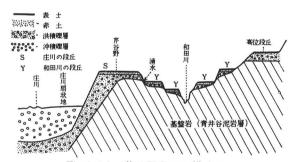


Fig.2.1.3 芹谷野段丘の模式図 (砺波市史 1984 より転載)

り和田川ダムが竣工、川が堰き止められて増山湖ができた。

庄東山地

牛嶽山麓以北の丘陵性の山々は、富山県を東西に分断する射水丘陵帯の一枝群を成し、一般 に庄東山地と呼ばれる。概して谷内川・和田川の流域に含まれる地域をさす。この山地は起伏 量が少ない丘陵性小起伏山地であり、地質的には青井谷シルト質泥岩層が基盤となる。この山 地の西北に位置する天狗山(標高 192m)の北斜面、県民公園頼成の森の緩斜面丘陵は、南側山 地からのかつての扇状地性堆積層で構成されている。表層地質としては、砂岩を主体とする下 部と無層理青灰色泥岩を主体とする上部から成る。

マッド (Mud)

扇状地上には微高地が島状に点在し、その間を縫うように旧河道が蛇行する。そこにはマッ ドという植土や壌土が分布し、黒土層の堆積がみられる。黒土層は、①黒ボク層で自然堤防・ 中州状微高地から縁辺部に分布するもの、②湿地帯で生成される有機質層、③埋没微高地から 縁辺部で生成された黒土層で、畠地土壌化・水田土壌化したもの、の3種に分類される。(野原)

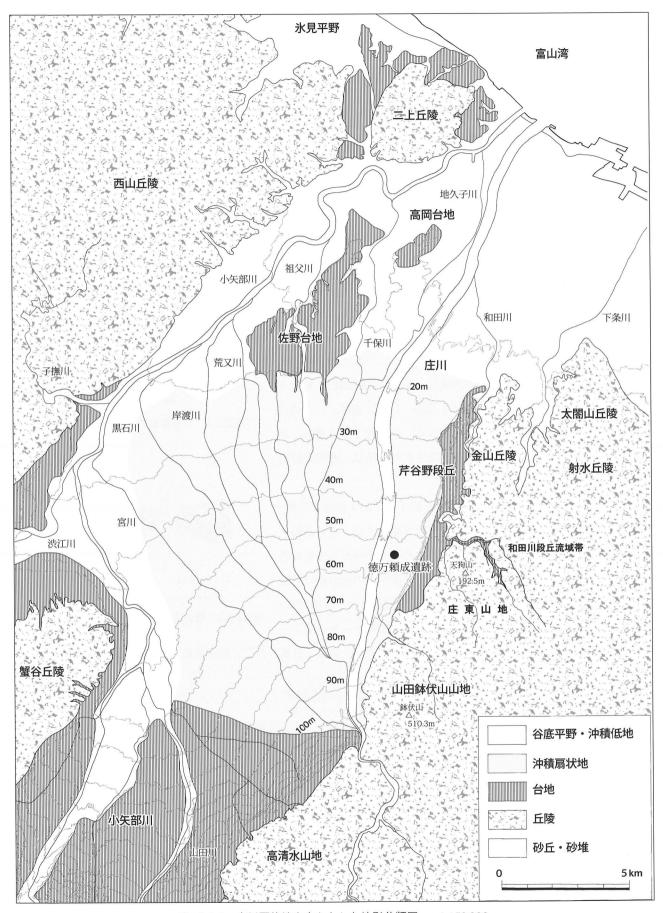


Fig.2.1.4 庄川扇状地を中心とした地形分類図 1:150,000

歷史的環境 2

本遺跡を理解するために市内の歴史的環境について概観する。

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は庄川右岸の庄東山地や芹 谷野段丘に分布し、庄東山地の芹谷遺跡・池原遺跡・増山外貝喰山 遺跡・頼成D遺跡、芹谷野段丘の高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡などがある。旧 石器が注意されたのは、昭和48年頃の芹谷遺跡が初めてであり、 住蔵久雄氏の業績による。氏の発見以来、これまで100点以上の 石器が表面採集された。それらは「立野ヶ原型ナイフ形石器」と呼 ばれる鉄石英・玉髄でできた小形剥片と、濃飛流紋岩類・溶結凝灰 岩によるナイフ形石器や彫器で構成され、姶良丹沢 (AT) 降灰期に 相当する。

芹谷野段丘以東を中心として縄文遺跡が濃密 縄文時代 に分布する。高位段丘である芹谷野段丘では、上和田遺跡、厳照寺 遺跡、宮森新天池遺跡、宮森新北島Ⅰ遺跡、頼成新遺跡、三合遺跡 があり、中位段丘の和田川流域段丘帯には、高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡、増 山遺跡などがある。福山大堤遺跡で表採された石槍は、濃飛流紋岩 類の半月形石槍で草創期に属する。

前期は宮森新北島I遺跡、増山遺跡でわずかに出土例があるが、 県内の遺跡動態と同じく中期段階で遺跡数が増加する。芹谷野段丘 縁辺の厳照寺遺跡は、松原遺跡と並び市内の縄文遺跡として最も著 名である。名越仁風氏ら地元研究家や富山考古学会の働きかけで周 知されるようになり、栴檀野地区圃場整備事業に先立ち昭和50・ 51年に試掘調査、昭和51年に富山県埋蔵文化財センターによっ て本調査が実施された。出土土器群は、「厳照寺Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式」として中期前葉の標式であったが、現

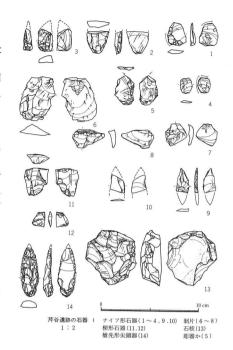


Fig.2.2.1 芹谷遺跡の石器 S=1:4 (砺波市史 1984 より転載)

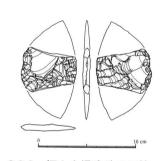
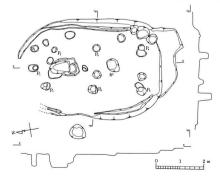


Fig.2.2.2 福山大堤遺跡の石槍 S=1:4 (砺波市史 1984 より転載)

ii 砺波市教育委員会 1977 『栴檀野遺跡群予備調査概要』(富山県埋蔵文化財センター編)



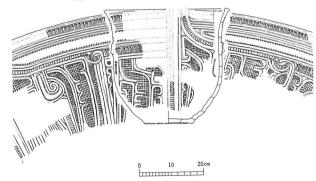


Fig.2.2.3 厳照寺遺跡の竪穴住居跡と土器 (左図) S=1:160, (右図) S=1:12

(砺波市史 1984 より転載)

i 奥村吉信 1987「立野ヶ原石器群と米ヶ森技法」『大境』第11号 富山考古学会

在は新保・新崎式に包括され扱われている。遺構では、竪穴建物跡 11 棟・埋甕 1 箇所・穴などが検出され、典型的な弧状集落であることが判明した。近接する宮森新北島 I 遺跡では、厳照寺 I 式土器群と中期の竪穴建物跡 1 棟を確認している。

低地では平野東部の低位段丘上に宮森遺跡、徳万遺跡、東保石坂遺跡、東保遺跡(東保高池遺跡)など芹谷野段丘を抉る谷口付近に存在する。扇状地扇央部で発見された久泉遺跡は打製石斧を主体的に出土する遺跡である。低地における集落は未発見であり、縄文期の遺跡動態を把握できていない。

扇状地扇頂部には中期前葉から中葉の大規模集落、松原遺跡がある。庄川左岸の最下位段丘上にあり、遺物・遺構の質・量ともに豊富である。竪穴建物は、方形石組炉を伴う建物や長軸11mを測る大型建物(04号)など10数棟が検出されている。04号竪穴建物からは、多くと土器とともに打製石斧、磨製石斧、石錘、擦石、石鏃が出土している。松原遺跡は土器が多く出土し、中期前葉から中葉(新崎式~上山田・天神山式)が主体を占める。庄川での漁労活動で生計をなしえたこと、そして五箇山、飛騨に抜ける交通の要衝に位置したことが大集落を形成できた要因と考えられる。

大正 13 年頃、孫子の上原地内において県内でも稀少なバナナ形石器が出土している。中尾遺跡から出土した御物石器は、市指定文化財となり福岡の厳照寺で保管されている。

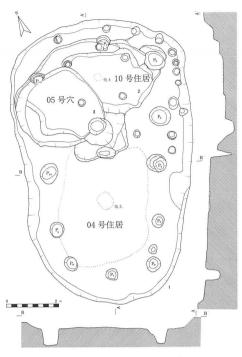
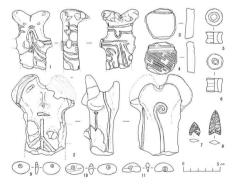


Fig.2.2.4 松原遺跡の 04 号竪穴建物 S=1:150



Fig.2.2.5 松原遺跡出土の縄文土器 S=1:10

弥生時代と古墳時代 弥生から古墳時代にかけては空白の時代である。社会基盤の稲作経営移行に連動し、生活圏が湧水帯 (扇端部) に移動したのであろう。わずかな資料として福山大堤遺跡や安川野武士 A 遺跡 B 地点、増山城跡出土の弥生土器がある。婦負郡や射水郡に連なる丘陵地帯や低位段丘上、扇状地に点在するマッド上などに未発見の遺跡が存在する可能性がある。古墳時代資料としては、高沢島Ⅲ遺跡がある。古墳時代後半の土師器の甕や高杯の一部が出土している。増山城跡内の又兵衛清



水付近から内面に刷毛目調整を施した土師器片が出土している。 Fig.2.2.6 松原遺跡出土の土製品 S=1.5 池原には"丸山古墳"やかつて県指定史跡であった"狐塚古墳"があるが、現在古墳と見る研究者は少ない。周辺では小矢部川左岸流域から扇端部、佐野台地に遺跡が分布する傾向にある。 平野東部は閑地である。

i 富山県教育委員会 1977 『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』

ii 富山県教育委員会 1978 『富山県砺波市宮森新北島 I 遺跡緊急発掘調査概要』

iii 庄川町教育委員会 1975『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』

奈良・平安時代 考古学的な + X21 Y48 空白期間ののち、市域では扇状地から段 丘上にかけて古代の遺跡が出現しはじめ る。いずれの遺跡も8世紀後半以降であ るのは天平 15 年 (743) に発布された墾 +* 田永年私財法に端を発し、庄川扇状地東 部に展開した四荘の東大寺領荘園(石栗 荘・伊加流伎荘・井山荘・杵名蛭荘)の成立 に連動したものと考えられる。

芹谷野段丘縁辺の宮森新北島 I 遺跡で Y40 は、桁行3間×梁間2間、面積32㎡の 掘立柱建物が検出されている。周辺遺物 Y38 から8世紀後半頃と見られる。須恵器窯 跡群内には、増山遺跡、高沢島Ⅱ遺跡、 高沢島Ⅲ遺跡、宮新遺跡がある。平野部 において久泉遺跡以外では建物遺構を伴

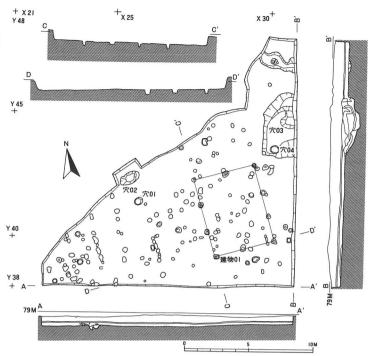
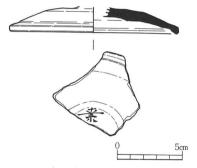


Fig.2.2.7 宮森新北島 I 遺跡の掘立柱建物 S=1:300

う集落遺跡は未確認だが、高道向島遺跡、安川野武士遺跡、安川 山下遺跡、薬勝寺遺跡、徳万遺跡、太田遺跡、秋元窪田島遺跡、 宮村遺跡、千代遺跡、油田大坪遺跡、小杉遺跡がいずれも微高地 のマッド上に存在する。

久泉遺跡では、長大な大溝と建物遺構群が検出されている。 帰 属時期は8世紀後半から9世紀前半と短い。建物は規則的に配置 された掘立柱建物 4 棟と大小さまざまな規模の竪穴建物 14 棟で 構成される。桁行 10 mを超える掘立柱建物の規模や配置には官 Fig.2.2.8 高沢島Ⅱ遺跡の墨書土器 S=1:3



ii 金田章裕 2007 「久泉遺跡における大溝・建物遺構の性格」『久泉遺跡発掘調査報告Ⅲ』砺波市教育委員会

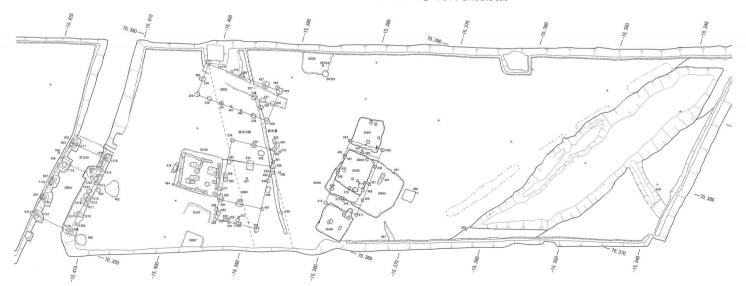


Fig.2.2.9 久泉遺跡の大溝と建物群 S=1:500

i 富山県教育委員会 1978『富山県砺波市宮森新北島I遺跡緊急発掘調査概要』

衙的色彩も強く、竪穴建物には鍛冶工房と思われる建物も含まれ、単なる一般的な集落と評価 することはできない。大溝は、溝底から8世紀第Ⅲ四半期に帰属する須恵器の有台杯が出土 8世紀第Ⅲ四半期 しており、開削時期を示すと考えられる。幅 $6.9\sim10~\mathrm{m}$ 、最深部 $1.55~\mathrm{m}$ 、発掘により延長 120 mを検出したが、地中レーダ探査により約 2.0 kmを確認している。久泉遺跡は、東大寺領 伊加流伎荘の比定地の南西に位置しており、大溝は荘園方向に流れている。当時の水系から考 慮すると、千保川から取水し、荘園へ導水する用水路もしくは運河の可能性が考えられる。ま た、大溝に付帯する建物遺構群は、東大寺開田絵図『神護景雲元年越中国射水郡鹿田村墾田地 図』に記載のある溝管理施設「溝前」に相当する遺跡と想定される。

所

荘園成立と期を同じくして芹谷野段丘上で大規模に須恵器生産を行っている。窯跡群は、射 水郡・婦負郡に隣接する芹谷野段丘から庄東山地にかけて分布し、総称して栴檀野窯跡群とい 栴檀野窯跡群 う。これまで計 16 遺跡で窯が確認されており、多くは平野に面する丘陵西側斜面に立地して いる。もっとも早く操業されたのは8世紀第Ⅱ四半期といわれる宮森窯で、8世紀後半から9 世紀にかけて生産が盛行し、10世紀頃に衰退期を迎えるとされる。

窯跡群は南北の二つの支群により成り、増山支群と福山支群で構成される。増山支群は、段 増山支群と 丘縁辺に数基存在するが、大半が山地に立地し、射水丘陵窯跡群域にまで食い込むように存在 福 山 支 群 する。福山支群には著名な福山窯跡をはじめ、福山小堤窯、福山大堤窯、安川天皇窯で構成さ れる。増山支群に比べ発見された窯跡数は少ない。

芹谷野段丘裾にある宮森窯を除いて丘陵斜面地に立地している。良質の粘土と薪木の獲得が 可能であることから、築窯条件の良い芹谷野丘陵一帯に須恵器生産地が選定されたものと思わ れる。窒跡群内には炭焼窯も多数発見されており、燃料材となる山林資源の用役問題と密接な 関係を指摘することができる。

増山支群の宮森窯と福山支群の安川天皇窯がもっとも古く8世紀第Ⅱ四半期に位置づけら 安川天皇窯

れ、8世紀第III四半期から第IV四半期にかけて増山支群の増山亀田窯、増山団子地窯、増山妙

覚寺坂窯が操業を始め、同時期には福山支群で福山窯、福 山小堤窯、福山大堤窯が操業している。9世紀前半に入る と、小丸山一・二号窯が操業され、9世紀後半から10世 紀にかけて正権寺後島窯、増山外貝喰山窯、増山笹山窯、 東笹鎌野窯が操業をし、以後栴檀野窯跡群では須恵器生産 が衰退する。

栴檀野窯跡群が成立した8世紀後半は、「一郡一窯的」 体制ともいうべき律令的土器生産体制、つまり須恵器と土 師器の一体生産が確立する時期にあたる。この窯業上の画 期は、律令国家の経済政策と連動するものであり、古代前 半期(7世紀初頭から9世紀初頭)の手工業生産政策は行政単 位ごとの集約的な手工業センターを作ることを目指した。 砺波郡では、小矢部川左岸の安居・岩木窯跡群において 7 世紀前半から須恵器生産を始めており 、その後7世紀後 半から窯場が増加し、8世紀代には小矢部川左岸や芹谷野 .

Tab.2.2.1 栴檀野窯跡群一覧

支群	遺跡名	種 別	時代	編年		
福山支	安川天皇窯	窯	奈良	8c2/4		
	福山号窯	窯・製鉄	奈良	8c3/4		
	福山2号窯	窯	奈良	8c3/4		
群	福山小堤窯	窯	奈良	8c3/4		
	福山大農窯	窯	奈良	8c3/4		
anem 111501111; 20	宮森窯	窯	奈良	8c2/4		
	増山団子地窯	窯	奈良·平安	8c3/4		
	增山妙覚寺坂窯	窯	奈良·平安	804/4		
	増止亀田窯	窯	奈良·平安	804/4		
	増上池ノ平等窯	窯	奈良·平安	_		
増	小丸山1号窯	窯	平安	9c1/4~2/4		
山	小丸山2号窯	窯	平安	9c1/4~2/4		
支	增山外貝喰山窯	窯	奈良·平安	8c4/4~9c1/4		
群	增山赤坂窯	窯	平安	9c2/4~3/4		
	增山外法連山窯	窯	平安	904/4		
	増止笹山窯	窯	平安	9c4/4~10c1/4		
	正権寺後島窯	窯	平安	9c4/4~10c1/4		
	東笹雞羽号窯	窯	平安	9c4/4~10c1/4		
	東笹鉾裡記号窯	窯	平安	9c4/4~10c1/4		
	計19基(福山支群、	増山支群(4)				

第2章 地理と歴史

段丘上に窯跡群が展開する。それまで小矢部川左岸に生産域が集中していたが、突如として砺 波平野東部に窯場が作られる。

- 福 山 窯 昭和37年7月に砺波市史編纂委員会が中心となり、福山窯跡の発掘調査を実施した。出土 品には水煙・屋蓋・軸・基檀など瓦塔の一部や円面硯、土馬など特記すべき遺物があり、市指 定文化財となっている。
- 般 若 野 荘 鎌 **鎌 倉 時 代** 徳大寺家領般若野荘は平野東部に広く展開し、現庄川両岸に沿って南は三 谷地区から北は中田地区に及ぶ広大な荘域であり、奈良時代に成立した東大寺領荘園 (伊加流伎・ 石栗・井山荘) 三荘を包括する。
- 徳 大 寺 家 徳大寺家は藤原北家の流れを継ぐ閑院流の出であるが、般若野荘がどのような機縁で家領となったのか、またいつごろ成立したか確証となる史料はない。知行国制が一般化し、縁故関係や成功によって国守が選任され、私的人脈によって国政が普遍化していった院政期にあって、徳大寺実能・公能父子が越中国の政務に深く関わっていることを考慮すれば、公能が越中国守となった大治元年(1126)頃に般若野荘の成立をみるのが妥当であろう。
- 治承・寿永の争乱 中世において般若野荘では幾度かの合戦が繰り広げられた。治承・寿永の源平争乱では、寿 永2年(1183)、般若野荘に布陣していた平盛俊は源軍の今井兼平を迎え戦ったが敗れ、退き 小矢部川原で戦ったが劣勢となり倶利伽羅峠を越えて加賀に引き上げている。後鳥羽上皇が執
- 承 久 の 乱 権北条義時と敵対したことに端を発した承久の乱 では、承久3年(1221)鎌倉方である名越(北条)朝時らの北陸道軍が般若野荘まで侵攻し、京方(後鳥羽上皇方)との合戦となった。京方はこの合戦で敗れ、軍陣に降っている。
- 産園経営不振 嘉吉元年(1441)の「薩戒記」によると徳大寺公有が越中の荘園経営の不振に陥っている。 庚永元年(1342)に般若野荘の南にある三谷寺が鎌倉覚園寺塔頭蓮華院領となっていることや、 武家方の地頭方により押領が起こりやむなく領地を折半する(下地中分)という事態に起因する。 明応3年(1494)にあっては越中国の徳大寺家領荘園が不知行となっている。天文14年(1545)、 越中に下向した徳大寺実通は、知行分にて殺害される。雄神荘の庄城(壇城、壇ノ城)に拠る 石黒氏や神保氏、在地荘民のいずれの手によるものか不明であるが、家領荘園での混乱状況を
- 公卿九人塚 うかがうことができる。安川の般若山薬勝寺の南にある公卿九人塚と呼ばれる五輪塔の墓地は、 実通に関係があるのかもしれない。

荘域にある遺跡としては、東保遺跡(東保高池遺跡)、久泉遺跡、秋元窪田島遺跡、正権寺遺跡、狐塚遺跡などが存在する。12世紀後半から13世紀前半の東保遺跡(東保高池遺跡)では土師器が多量に出土し、墓地もしくは祭祀跡と考えられる集石状遺構が検出されている。秋元窪田島遺跡、正権寺遺跡は、ともに15世紀に位置付けられる。

- 南北朝時代 観応元年(1350)、室町幕府将軍足利尊氏と弟の直義の対立が激化、い 観応の擾乱 わゆる観応の擾乱が起こる。越中守護桃井直常は反幕府勢力として各地で幕府方と抗戦し、これを鎮圧するために斯波高経が派遣された。二宮次郎左衛門入道円阿(貞光)は、越中守護職にあった斯波高経・義将父子に従い、各地で南朝方と戦っている。貞治2年(1363)の二宮円
- 和 田 城 阿軍忠状に「和田城」を警固した記されている。和田城は、増山城の前身とみる説や増山城に 先立ち構築された亀山城という説がある。現在の亀山城は、戦国時代前期に修築された可能性

が高いが、郭が同心円状に配置していることや全体的な規模などから増山城より古い構造をも つと考えられている。応安2年(1369)、桃井直常が能登・加賀に攻め入り、桃井方が籠城す る一乗寺城を幕府方の吉見勢が攻略している。吉見氏らの能登勢は、その後砺波郡の井口城、 千代ケ様城、をはじめ、新川郡の松倉城を攻めている。赤祖父川左岸にある井口城は桃井直常 に属した井口氏の拠点であり、後に一向一揆方により修築され、天正9年(1581)に佐々成政 により落城したと考えられる。三条山山頂に築かれた千代ケ様城は、庄城(壇城、壇ノ城)の詰 城とみられる。寺家新屋敷は旅川右岸に位置する居館で、桃井直常家臣田中権左衛門貞行や子 孫の田中太郎兵衛が居住したと伝えられる。

室町時代 南北朝時代末期の康暦2年(1380)、越中守護は斯波氏から畠山氏に替わる。 河内・紀伊・越中の三国の守護を兼帯した畠山氏は、守護代として砺波郡の遊佐氏、射水・婦 負郡の神保氏、新川郡の椎名氏の三氏により統治する支配体制を組んだ。畠山氏支配期の 15 世紀は、中核的な居館が形成される時期であり、砺波郡では平野西部の蓮沼城が知られる。方 形単郭式の居館であり、倶利伽羅峠を越えた越中西口に位置する。冷泉為広の「越後下向日記」 に「遊佐加賀守館」として登場する。

増山城郭群の北に位置する亀山城は、放生津城に本拠を置く神保氏の支城として修築したと 亀 山 城 考えられる。標高は城郭群内でもっとも高く射水・砺波郡内を望み、和田川によって放生津と 結ばれるという軍事的利点も大きい。

応仁元年(1467)に勃発した応仁の乱以降、越中国内も情勢が不安定となる。 文明 13年(1481) には福光城主石黒右近光義が加賀の富樫正親と謀り、瑞泉寺を中心とする一向一揆と交戦する 事態となる(田屋川原の合戦)。この合戦には般若野荘の百姓も参加している。以後、瑞泉寺は 要害化が進み、勝興寺に比肩する勢力を誇るようになる。また、一向一揆の萌芽期には蓮如が 越前吉崎御坊から井波瑞泉寺へ下向、人々に多くの感化を与えている。

長享2年(1488)、加賀の一向一揆が起こる。蜂起した一揆勢力は、加賀守護富樫正親を討 ち、天正8年(1580)織田勢に滅ぼされるまで約百年間加賀国を支配することとなる。永正3 永正の一向-揆 年(1506)には北陸の一向一揆が一斉蜂起する。蓮沼城に本拠を置く守護代遊佐新右衛門慶親 が一向一揆と対決、これを幇助するため進軍した越後守護代長尾能景は、射水・婦負の守護代 神保慶宗の援護を得られず、芹谷の合戦で討死している。合戦は増山城の眼下で行われ、この 芹谷の合戦 ときの軍事的緊張の高まりによって亀山城の整備が行われ、現在の姿に近い形になったと考え られている。

能景への非協力に強い憎悪の念を抱いた子為景は、仇討ちの名分で越中に侵攻、永正 17 年 (1520) の新庄の戦いで神保慶宗を自害に追い込み、自らは翌年新川郡の守護代となっている。 為景死後、天文 12 年(1543)、神保長職は富山城を築城する。このとき富山城を中心に支城 群を展開、増山城は天文年間頃に神保長職によって構築されたと考えられる。

永禄2年(1559)夏以来神保・椎名両氏に反長尾の動きがあり、甲斐武田氏と結ぶ情勢があっ た。これに応じた長尾景虎は翌永禄三年に越中に侵攻し、神保長職の籠る富山城を攻める。敗 走した神保長職は増山城に逃れたが、景虎は「越中国味方衆」を差し向けたが落城せず、景虎 自ら増山に赴き陣を張ったが長職は城を捨て脱出し落ち延びた。その後、長職は神保家中の内

田屋川原の合戦

第2章 地理と歴史

訌に乗じて上杉輝虎(長尾景虎)と結び、永禄 11 年 (1568) に本拠としていた増山城から出兵し、一向門徒を焼き払い、討ち捕らえている。そのことに本願寺 (一向宗) は激怒し、勝興寺 (安養寺) に厳重な対処を求めている。

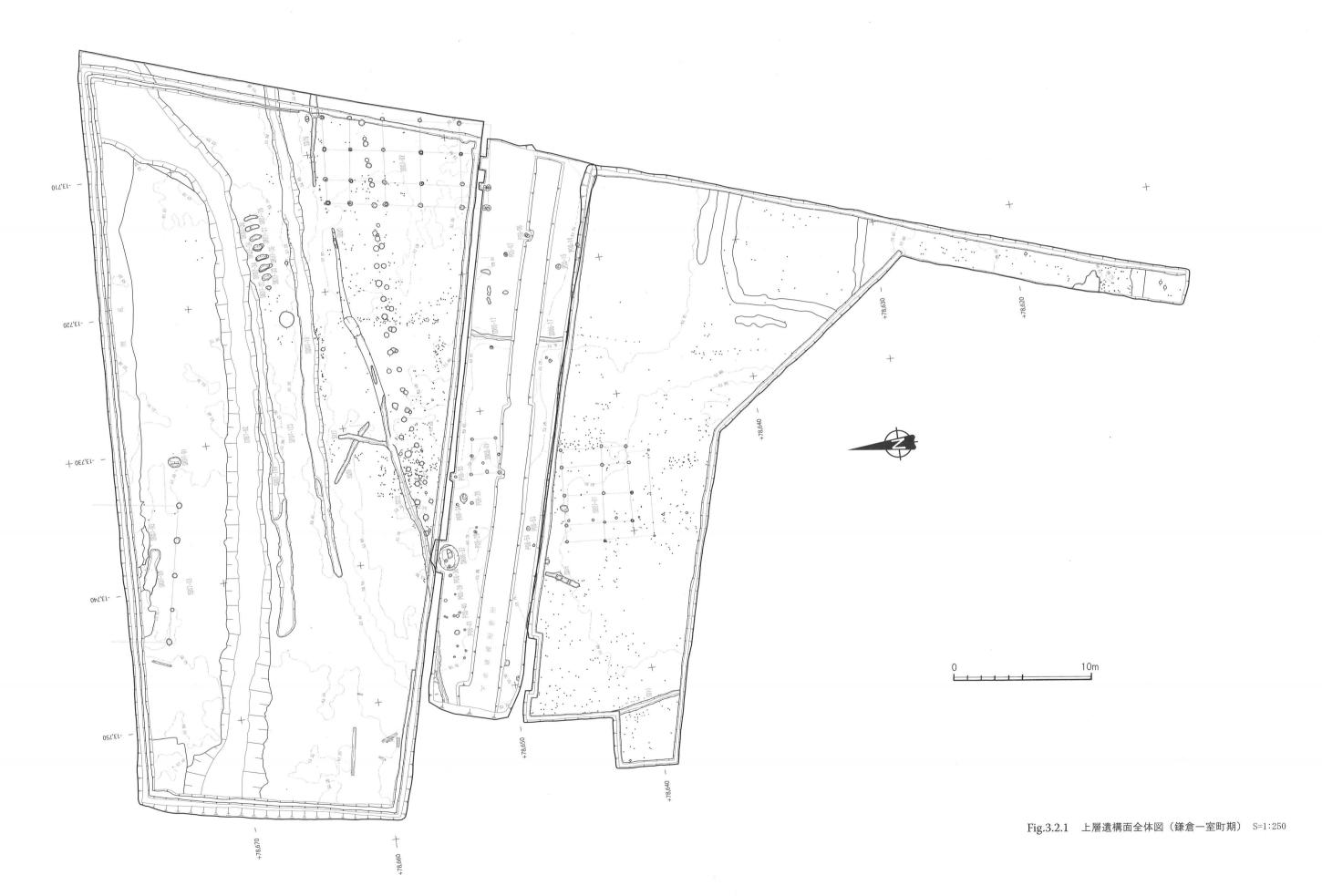
越中中郡を支配してきた神保氏は、元亀2年(1571)頃は放生津城・増山城などを拠点としていたが、 越後上杉氏や一向一揆との関わりの中で権力を失いつつあり、翌年には神保長職は没している。

元亀3年(1572)頃、増山城には一向一揆勢が拠っていたと考えられる。

安土桃山時代・江戸時代 天正 4 年 (1576) に上杉謙信は、越中をほぼ制圧するに至る。増山城に 残る反上杉方の神保勢力が抗戦するも落城、謙信はさらに西に進み湯山城(森寺城)を攻撃、翌年には 七尾城を攻略している。上杉謙信は天正 6 年 (1578) に没している。

足利義昭を奉じて上洛を果たした織田信長は元亀元年(1570)、姉川の戦いで越前朝倉氏、北近江浅井氏を撃破、天下布武を目指し戦国期最大の宗教的武装勢力である石山本願寺を攻撃する。織田勢の北陸侵攻はその後、越前朝倉氏を滅亡させ、越前一向一揆勢を破り、天正8年(1580)には加賀一向一揆郷田勢の攻撃の拠点である金沢御堂を攻めている。織田勢の攻撃は増山城にも及び、天正9年(1581)に焼き払われ、のちに木舟城をも落としている。天正10年(1582)の本能寺の変で織田信長が没した後、翌年に佐々成政が越中を平定している。天正11年(1583)以降、越中統一を果たした佐々成政によって修築された増山城は、この時もっとも城域が広く構造的に完成していたと考えられる。天正13年(1585)、前田利家は佐々成政と交戦状態にあり、今石動城を築城して前田秀継・利秀父子に守らせている。秀継は同年、木舟城に移るが11月の大地震により城が崩壊し圧死した。成政ののち、増山城は前田方の手に申川光重が退を表していたと考えられる。

(野原大輔)



第3章 発掘調査の成果

1 基本層序の解説

2007年度調査区は、全体が現況耕作地であり、2008年度調査は現況道路である。そのため、遺構面上位の土層堆積状況に差異が認められる。そのため、ここではそれぞれの状況を個々に述べ、後に共通する層位について述べることとする。

現況水田耕作地である 2007 年度調査区にあっては、大別して 3 層が確認できる。上層から①層は暗灰黄色~灰色 (2.5Y4/2~10Y4/1) を呈する現水田耕作土、④層は含有物の差によって 2 層に細分されるが、概ね黄灰色 (2.5Y4/1) を呈する。①層は黒褐色 (2.5Y3/1) を呈するシルト質土、⑤層はにぶい黄色~淡黄色 (2.5Y6/3~2.5Y8/3) を呈するシルト質土である。①層は、現況を反映し、調査区全体で確認され、鉄分や砂利を多く含む。④層については、上位の④ — 1 層は鉄分や炭化物を含むが、④ — 2 層では鉄分の含有率は下がり、炭化物の含有は確認できない。①層は炭化物や⑤層の小ブロックを含む、中世遺物包含層である。分布状況には較差があり、2008 年度調査区では確認されていない。また2007 年度調査区南側では、広範囲にわたる堆積が確認されたが、同年度北側調査区では部分的に確認される状況である。⑤層は筋状の鉄分(微細な高師小僧か?)の沈着が確認される、中世遺構検出面である。

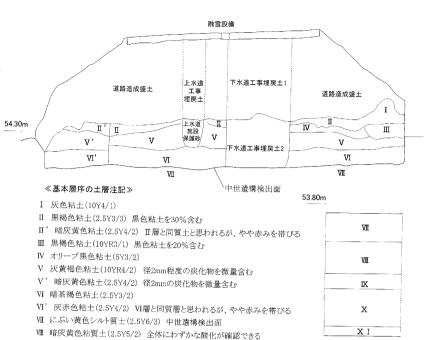
現況道路として利用される 2008 年度調査区は、10 層が確認できる。最上位には道路造成に係る盛土が堆積する。以下、上位から順に、I 層は灰色(10Y4/1)を呈する粘質土である。確認面南端の一部でのみ確認された。水田耕作土の可能性があろう。II 層は黒褐色粘土(2.5Y3/3)である。色調は⑪層に類似するが、確認された標高や堆積状況から別層とみられる。水田耕作土床土であろうか。II 層は確認面北側で確認された。 II 層と同一層とみられ、下位のV´層・Ⅵ´層もそれぞれV層・Ⅵ層と同一層とみられるが、いずれもやや赤色を帯びた色調を呈することから、水性作用による酸化が進んでいるものと思われる。II 層は黒褐色(10YR3/1)を呈する粘土である。 II 層に類似するが、色調がやや明るい。 II 層同様に黒色粘土を含有し、ほぼ同一層であろう。IV 層はオリーブ黒色粘質土(5 Y3/2)である。III・IV層は、確認面の南半部では確認されたが、北半部では確認されなかった。V層からは色調が一変し、灰黄褐色(10YR4/2)を呈する明るい色調の粘土に変化する。径約 2mm 程度の炭化物粒を微量含み、硬く締まった地層である。 VI層もV層同様に硬く締まった地層であるが、色調はやや暗く、暗茶褐色(2.5YR3/2)を呈する粘土である。 VI層はにぶい黄色(2.5Y6/3)を呈するシルト質土層で、上面が中世遺構検出面である。

以下、VIII~XI 層は、調査終了時の下層確認調査によって確認された地層である。

™層は暗灰黄色 (2.5Y5/2) を呈する粘質土である。WI層に類似した質感・色調である。明確は変化点は確認されず、WI層が徐々にWI層に変化するような状況である。IX層は質感・

色調とも大きく異なり、黒色 (N2/)を呈する粘土である。水分を多く含み、粘性が強い割には締まりが悪く、掘削後の自然崩落が確認された。X層はIX層と同一の色調で54.30mあるが、粗砂を基本とする礫層である。そのため、粘性も低く、自然崩落が激しく進行した。X層が上記の状況であったため、掘削作業は短時間に終了する必要性があり、部分的にしか確認できなかったが、X層下位で、褐灰色 (10YR4/1)を呈する砂層、XI層を確認した。

両調査区における基本土層中、 対応する層位についての検討を行



ドig.3.1.1 基本層序模式図 いたい。まず一点明確に判明した点として、2007 年度調査区で確認された中世遺物包含層である⑪層が、2008 年度調査区では確認されていない。この点については後述するが、2008 年度調査区にあっては、近世以降の削平により消失ものと思われる。⑤層の中世遺構検出面は土色・土質の観察結果や検出された標高がほぼ一致する点などから、VII層に対応する。

IX 黒色粘質±(N2/) 砂質を多く含むX 黒色(N2/) 礫を多く含む 粗砂

2007 年度調査区に挟まれた 2008 年度調査区において、遺構面上位の土層堆積状況が大きく異なる点については、周辺部の地勢変遷が大きく関与することが考えられる。国土地理院撮影による航空写真で周辺の地勢変遷を確認すると、1960~70 年代には、不規則な形状の耕作地(水田か?)が広がる様子がわかる。1980 年代の撮影資料がないため、該期の状況は不明だが、1990 年代に入って圃場整備が実施され、現況に近い状況の整然とした水田が広がる。この間 1977 年に撮影された写真では、本調査区西側に近接する民家は写っておらず、1996 年撮影の写真には写っている。合わせて、東側道路から同民家への道路も造られており、2008 年度調査区となった道路は、最も古い場合でも、1978 年以降、30 年前に造成されたものであることがわかる。いずれにしても、旧耕作地を造成して道路にしていることから、2008 年度調査区で水田耕作土が確認されない状況は理解できよう。加えて、遺構面上位で確認された硬くしまた地層(V・VI層)についても、道路造成に係る盛土の可能性がある。あるいはほぼ水平に堆積するVI層に対して、V層中央部がやや隆起する状況は、旧道路地形を反映したものとも思われる。

地勢変遷の影響は 2008 年度調査区だけに止まらず、少なからず 2007 年度調査区にも及ぶことが推定される。先に述べた⑪層の堆積状況(確認状況)に差異がある点などは、その可能性があろう。

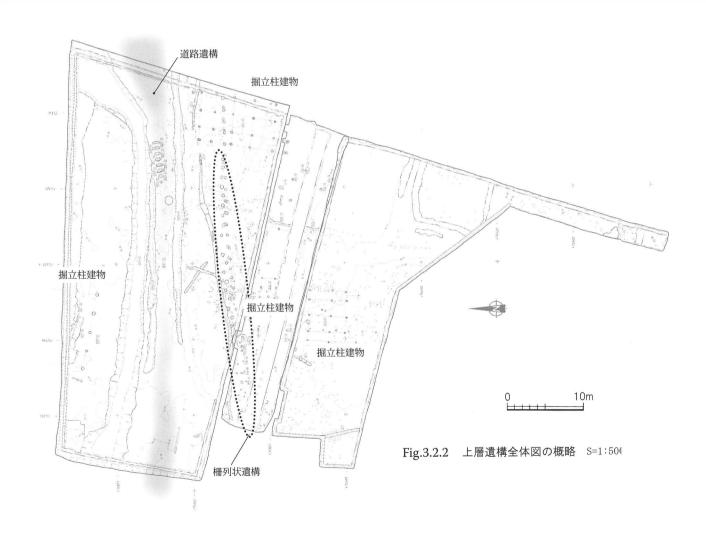
(藤井秀明・野原大輔)

2 検出した遺構

遺構面は、上層と下層の2面を確認した。上層は出土遺物の年代から推定すると、中世期(鎌倉~室町時代)に属する蓋然性が高く、調査区全体で遺構を検出している。対して下層遺構は面的に把握することは難しく、VII層中に包含される遺物を手がかりに検出した遺構面である。不確実性が高いものの、須恵器をはじめとする遺物が出土するため古代期(奈良~平安時代)に属する遺構面と考えられる。上層遺構面から古代遺物が少量出土したが、中世遺物が多い。

上層遺構 全体的に調査区北側に遺構が集中する傾向がある。本遺跡で特徴的なのは、それぞれの遺構が東西もしくは南北のいずれかの方位にのることである。東西方向は道路状遺構 (SR07-01)・溝 (SX07-02)・柵列状ピット群で、それぞれが平行している。南北方向では杭列、そして掘立柱建物 (SB07-01・02・03) は正方位に準じている。あたかもそれら遺構群が、ある方位を指向して造成されたかのようである。遺構面において遺構が切り合い関係にあるものも少ない。

下層 遺構 調査区北西側において、南北方向の溝を検出している。溝の覆土には古代遺物を含むが、遺構外には遺物の広がりは確認されなかった。



I 掘立柱建物 〔Embedded-pillar building; Posthole-type building〕



掘立柱建物(SB07-01)

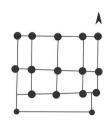
(Fig.3.2.3 · 3.2.4 PL.5)

位 置 調査区南部に位置し、周囲に遺構はない。

重複関係 重複関係にある遺構はない。

規模と構造 平面は東西方向にやや長い長方形を呈する。

建物規模は桁行 4 間の総長約 7 m、梁行 3 間の総長約 6.25m であり、 平面積 43.75 ㎡を測る。東西方向に N-93°-E の傾きを示す長軸を持つ 総柱建物跡である。長軸がほぼ東西方向となる。



柱筋の通りは桁行・梁行ともに良いが、柱間距離に較差がある。梁行方向は、A-B 列間では $2.7\sim 2.9 \mathrm{m}$ 、B-C 列間では $1.75\sim 2.1 \mathrm{m}$ 、C-D 列間では $1.5\sim 1.6 \mathrm{m}$ をそれぞれ測る。同様に桁行方向では、東から 1 列目(E1 以下、同様)と E2 列目間で $1.2\sim 1.25 \mathrm{m}$ 、E2-E3 列間で $2.05\sim 2.2 \mathrm{m}$ 、E3-E4 列間で $2.05\sim 2.15 \mathrm{m}$ 、E4-E5 列間で $1.2\sim 1.35 \mathrm{m}$ をそれぞれ測る。これをみると、E1-E2 列間・E4-E5 列間・C-D 列間が、近似値を示すことがわかる。加えて、前記 3 列の土層断面を見ると、概ね掘削深度がほかに比べて浅いことがわかる。平入・妻入の別は確認できなかった。

柱 穴 柱穴の総数は 16 基である。入念に検出したが周囲に柱穴が見つからなかったので、この 16 基で建物は完結するものと判断した。柱掘り方の平面形態は円形で、いずれの柱穴も直径 $15\sim 20$ cmと小規模である。柱根痕跡は平面では検出できず、断面にて確認した。柱穴底部の断面形状は、平底が多いが P5 は丸底、P14 は打ち込み柱のような尖底である。

SB08-01 との関係 現地調査段階で桁行 4間×梁行 3間と判断した SB07-01 と次年度に調査した SB08-01 との方向性・柱筋の通りに共通性が認められるので触れておく。下水道掘削箇所内に柱穴数基の存在を仮定すると、両遺構が一連の建物跡を構成する可能性をもつ。その場合、北西隅の柱穴が欠落するものの、P08-28・29・53・54 など総柱を補完する位置にピットが確認されており、やや柱筋の通りが悪いものの、一連の建物跡である可能性は捨てきれない。推定復元される建物の規模は、桁行6間の総長 12.9m、梁行5間の総長 7.8m、平面積 100.6 ㎡を測り、南北に N-5°-E の傾きを示す長軸を持つ総柱建物跡となる。

年 代 柱穴埋土から遺物の出土はなく、年代推定の手がかりに乏しい。年代不明。

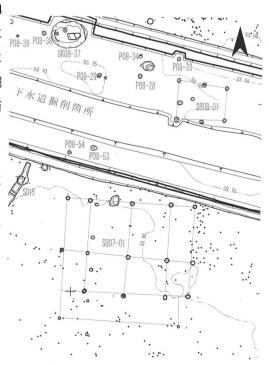
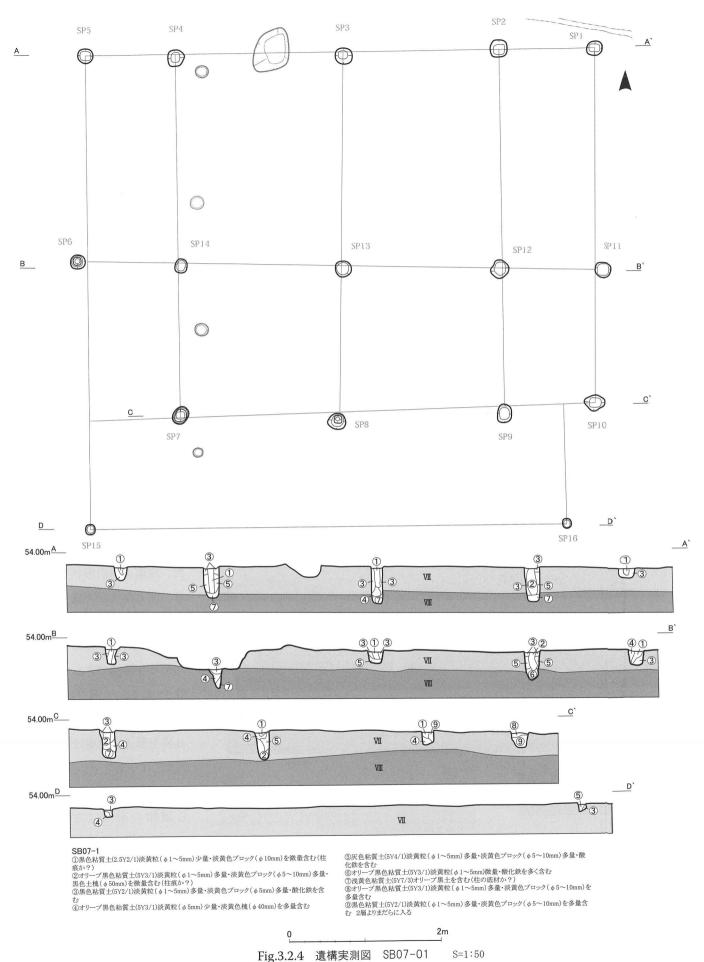


Fig.3.2.3 SB07-01 & SB08-01



掘立柱建物(SB07-02)

[Fig.3.2.5 · 3.2.6 PL.6]

位 置 調査区中央部東側に位置し、建物妻面が道路状遺構や溝に平行する。 重複関係 柵列状ピット群が建物北半部を横断するが、切り合う関係にあるピットがないので新旧の別は判断できない。

規模と構造 調査区でもっとも大きな建物である。平面は長方形を呈し、確認できた建物規模は、桁行 5 間の総長 11.5m、梁行 3 間の総長 6.3m、平面籍 72.45 ㎡を測る。長軸が南北に N-9°-E の傾く総柱建物跡であるが、建物は東側の調査区外に広



がる可能性がある。桁行・梁行ともに柱筋の通りは良いが、柱間距離に較差が認められる。桁行方向では、A-B 列間が $1.5\sim1.65$ m、B-C 列間が $2.4\sim2.64$ m、C-D 列間が $2.52\sim2.7$ m、D-E 列間で $2.82\sim3.0$ m、E-F 列間で $1.8\sim1.98$ m を測る。同様に梁行方向では、E1-E2 列間で $2.28\sim2.4$ m、E2-E3 列間で $2.16\sim2.28$ m、E3-E4 列間で $1.62\sim1.68$ m を測る。建物の北辺 (A-B 列間)、西辺 (E3-E4 列間)、南辺 (E-F 列間)が 他よりも柱間が狭い。建物外周の柱間を狭く設定したとも考えられ、調査区外に東辺が存在する蓋然性が高いように思われる。桁行方向のそれぞれの柱筋は平行だが、梁行のそれはばらつきが認められる。桁行の柱

53.60mA 2 1 3 3 5 3 3 317 VII 1 53.60mB 7 (3) VII 2). @ TO VIII 53.60m^C 7 (3) 7 VII **8** 1 VIII 53.60mD (2) (3) -2 3 12 7 10 VII (5) 6 (7) a VIII 53.60mE 1)(2) 3 1 1 1 VII 6 53.60m^F SB07-02 A~Eライン (5) ①黒色粘質士(5Y2/1)淡黄粒(ϕ 1~3mm)多量・淡黄色ブロック(ϕ 3~10mm)多量・酸化鉄を多く VII ①黒色粘質±(SY2/1)漆黄粒(ϕ 1~3mm)多量・淡黄色ブロック(ϕ 3~10mm)多量・酸化鉄を多く含む一部炭化物を多く含む物のり往痕(20灰色粘質±(SY4/1)淡黄粒(ϕ 1~3mm)多量・淡黄色ブロック(ϕ 3~10mm)を多量含む。②灰色粘質±(SY4/1)淡黄粒(ϕ 1~3mm)多量・淡黄色ブロック(ϕ 3~5mm)を少量含む。②灰色粘質±(SY4/1)淡黄粒(ϕ 1~3mm)多量・淡黄色ブロック(ϕ 3~5mm)を少量含む。②灰色粘度±(ϕ 10~15mm)を多量含む・(社沈下止としてか・?)。の暗灰黄色粘質±(2.5Y2/2)淡黄粒(ϕ 1~3mm)多量・淡黄色ブロック(ϕ 5~10mm)を多量含む。①那好黄色粘質±(2.5Y2/2)淡黄粒(ϕ 1~5mm)を量含。②素色粘質±(2.5Y2/1)淡黄粒(ϕ 1~5mm)を量含。②素色粘質±(2.5Y2/1)淡黄粒(ϕ 1~5mm)を微量含む。③尿色粘質±(2.5Y2/1)淡黄粒(ϕ 1~5mm)を微量含む。④灰黄色粘質±(2.5Y2/1)淡黄粒(ϕ 1~5mm)を微量含む。④灰黄色粘質±(2.5Y2/8)器±が混入する(快沈下止用材か・?) 「ハイン」 ・ 風 巻色粘土(10YR3/1)地山ブロック(φ 5cm) 30%含む ②黒褐色粘土(10YR3/1)地山ブロック(φ 5cm) 80%含む ・ ③黒褐色粘土(10YR3/1)地山ブロック(φ 2cm) 50%含む ・ ①黒褐色粘土(10YR3/1)地山ブロック(φ 5cm) 90%含む ・ ③黒褐色粘土(10YR3/1)地山ブロック(φ 2cm) 50%含む ・ (3層と同じ)

Fig.3.2.5 遺構実測図 SB07-02 (1)

筋を重視して建築し ▲ たことを示唆するも

のかもしれない。

年 代 柱穴埋土から遺物の出土はなく、年代推定の手がかりに乏しい。年代は不明といわざるをえない。

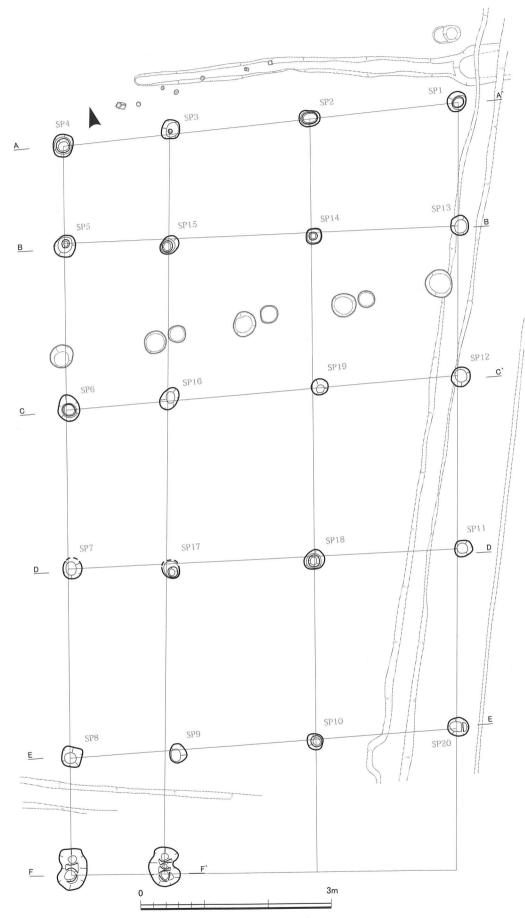


Fig.3.2.6 遺構実測図 SB07-02 (2) S=1:60

掘立柱建物(SBO7-O3) [Fig.3.2.7 PL.7]

位 置 調査区北西側に位置し、周囲に遺構はない。

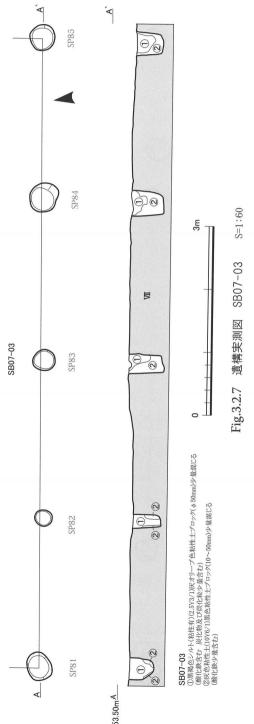
重複関係 重複関係にある遺構はないが、近現代に造成された頼成大排水によって、北側に広がるであろう建物の大部分が掘削されて消失したと考えられる。

良い。桁行・梁行の別はわからないが、いずれか4間の建物であることは間違いない。

SB07-01 と SB07-02 の梁行と桁行の比率が、それぞれ 1: 1.12、1:1.83 であり、5 基の柱列が梁行と仮定した場合、桁行は約 $11.1 \sim 18.1$ m 程度となる。この場合、想定される最小の平面積が約 109.9 ㎡となり、SB07-02 の 1.5 倍の面積となる。5 基の柱列が桁行の場合、梁行は $5.4 \sim 8.84$ m となり、平面積 54.5 ㎡となる。また、他の 2 棟と柱間距離を比較すると異なる点がある。SB07-01 では東西両面及び南面に、SB07-02 では南北両面及び西面に、それぞれ柱間距離の短い柱列が配されているが、SB07-03 では柱間距離が等間隔である。このことから、少なくとも東西両面には同じ柱間距離の柱列が配されていたことが推測できる。

柱 穴 総数5基を検出している。柱掘り方の直径は、43 cm (SP1)、26 cm (SP2)、34 cm (SP3)、46 cm (SP4)、42 cm (SP5)を測り、SB07-01・02と比べると概ね1.5~2倍近くの規模といえる。この柱掘り方の規模の相違から、大型建物を想起させるが、他の2棟と建物の性格や建築年代が異なる可能性があることも考慮しておく必要がある。平面・断面とも良好な柱根痕跡は確認できなかったが、SP2で柱根痕跡を示唆する土層断面がある。底面の断面形状は総じて平底となる。

年 代 柱穴埋土から遺物の出土はないので、年代 を推定する手がかりに乏しい。



掘立柱建物 (SBO8-01) [Fig.3.2.8 PL.8]

位 置 調査区中央部に位置し、SB07-01の 北にあり、平面的には平行関係にある。

重複関係 周辺部の遺構密度は低く、平面内にピットが2基あるが重複する遺構は確認していない。

規模と構造 調査区内で検出された 4 棟の掘立柱 建物のうち、もっとも小規模な建物である。平面は長 方形、やや台形を呈する。建物規模は桁行 2 間の総長 約 2.64m、梁行 1 間の総長約 1.8~2.16m、平面積は 5.22 ㎡を測る。長軸が東西に N-94°-E の傾く側柱建 物である。柱間距離は北辺・南辺とも概ね 1.32m を測 り、梁行の柱間は西 2.16m、東 1.8m を測る。先述のと おり、SB07-01 と SB08-01 の 2 棟は方向性・柱筋の通 りに共通性が認められ、一連の建物となる可能性がある。 その場合、復元される建物の規模は、桁行 6 間の総長 12.9m、梁行 5 間の総長 7.8m、平面積 100.6 ㎡。長軸 が南北に N-5°-E に傾く総柱建物跡となる。

柱 穴 総数6基が確認された。

年 代 柱穴埋土からの遺物がなく、年代不明。

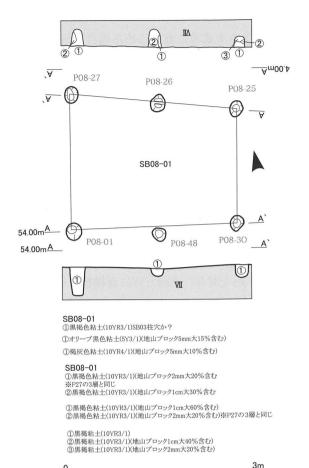


Fig.3.2.8 遺構実測図 SB08-01 S=1:60

(2) 道路遺構 [Road; Street]



道路遺構 (SF07-123) [Fig.3.2.9・3.2.10・3.2.11 PL.4・12]

本遺構は、波板状遺構 (SK07-32~39) と2状の溝 (SD07-19、SD07-119) を総合的に判断し、道路遺構として扱うものである。

位 置 調査区北半を東西に縦断するように本遺構が検出 されたが、溝 (SX07-92) に北接し、4 棟の掘立柱建物や柵列状遺構 (SA01) と平行関係にある。

重 複 関 係 側溝と考えられる SD07-119 が SX07-92 に切られるほかは、切り合い関係にある遺構はない。

規模と構造 詳細を述べる前に、道路遺構の認定方法について触れる必要がある。道(道路)とは、「人や車が往来するための施設」である。中山晋氏は道路遺構を認定する基準として、「平行する二条の溝(側溝)、諸説のある硬化面や波板状凹凸面、轍の痕跡等

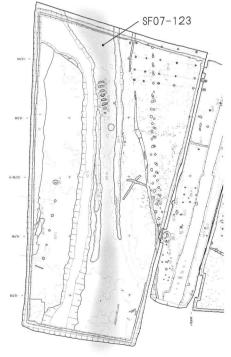


Fig.3.2.9 道路遺構の位置 S=1:800

のいずれか一つ以上が検出された場合」としている。その要件を本遺構に当てはめた場合、側溝は SD07-19 と SD07-119 が東西方向に平行に走っており、その間隔は 2.2~3.8 mを測るが平均すれば幅約3 mほどであろうか。その2本の側溝の間が路面と考えられるが、その路面には楕円形状の土坑が等間隔で連続しており、これがいわゆる"波板状遺構"(波板状凹凸面、波板状圧痕)と考えられる。明確な硬化面や轍は検出できなかったが、側溝と波板状遺構の2つをもって、中山氏のいう道路遺構の要件を満たしている。

道路遺構は、検出された規模で総長約50 m、路面幅2.2~3.8 mを測る。東西方向に直線状に延びているが、東端で幅が広がる。これは実際に道幅が広くなっているとも考えられるが、側溝SD07-119の延長が削平を受けている可能性もある。

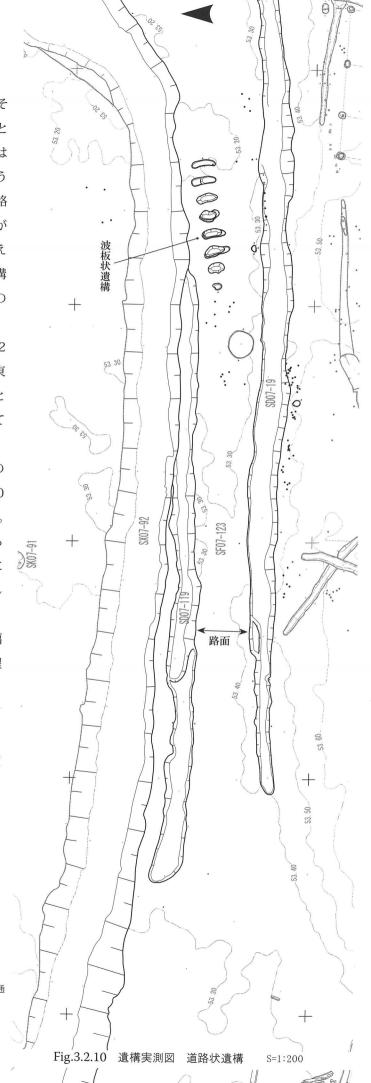
〔側 溝〕 側溝は 2本あり、平行に走る。北側の SD07-119 は約 26 mにわたって検出され、幅 $40 \sim 70$ cmを測るが、検出面からの深さは、 $5 \sim 10$ cm程度と浅い。遺構は西側で途切れ、東側は溝 SX07-92 によって切られている。SD07-19 との平行関係を考えると本来北側に さらに延びていたと推定できる。須恵器が 1 点、出土している。

南側の SD07-19 は約 36 mにわたって検出され、幅 $25 \sim 70$ cmを測る。検出面からの深さは、 $10 \sim 20$ cm程度である。SD07-119 と同様、西側で遺構は途切れるが、東側は調査区外まで延びている。須恵器が 1 点出土している。

両者の溝とも検出面からの深度が浅い。本来ある程度の深さがあったものが遺構検出面までの掘り下げで削平されたか、元から浅い溝だったのかは不明だが溝断面の立ち上がり傾斜が緩やかであることから浅い溝として造成されたのではないだろうか。現在の道路側溝のような排水機能はある程度役割を果たしたのであろうが、道路幅を区画するための溝かもしれない。

〔波板状遺構〕 波板状遺構は、本遺構の東半にあり、 路面のやや北側に寄っている。南北に長い楕円形状の土

i 中山 晋 2000「道路遺構の調査方法」『古代交通研究』第10号 古代交通 研究会



坑が8基で構成され、等間隔で規則的に並んでいる。 各土坑の規模は、Tab.3.2.1に示したとおりである。

波板状遺構の検出事例をみると、硬化面(道路使用 — 面)の下で確認されることが多いようである。2条の溝跡の状況をみると、掘削深度も浅く、調査区西側では確認されていないため、遺構検出面までの掘り下げにより削平されたか、後世の整地による削平を受けている可能性が高く、硬化面も同様の状況で消失したのかもしれない。波板状遺構の覆土は黒色粘性土(5Y2/1)もしくはオリーブ黒色粘性土(5Y3/1)であり、土相は側溝の覆土に近似する。

Tab.3.2.1 波板状遺構の規模

遺構名	長さ (m)	最大幅(m)	深さ (m)
SK32	0.38	0.28	0.11
SK33	0.67	0.45	0.22
SK34	1.11	0.47	0.20
SK35	1.00	0.36	0.16
SK36	0.85	0.50	0.18
SK37	0.90	0.37	0.17
SK38	1.05	0.34	0.12
SK39	1.01	0.27	0.06

※「深さ」は、検出面からの深度である。

年 代 道路遺構の使用年代を特定することは難しいが、2本の側溝から須恵器が1点ずつ出土している。波板状遺構は、古代や中世の道路において検出例がある。中世期と判断する材料が乏しいが、掘立柱建物は総柱建物が多く、概ね中世に属すると考えられることから、それに先行する道路の可能性がある。ただし、側溝覆土に須恵器が混入した可能性も捨てきれないので2点の須恵器出土をもって古代道路と断言できないが、年代の推定要素が他にないため古代に帰属する可能性があるという表現に止めておきたい。

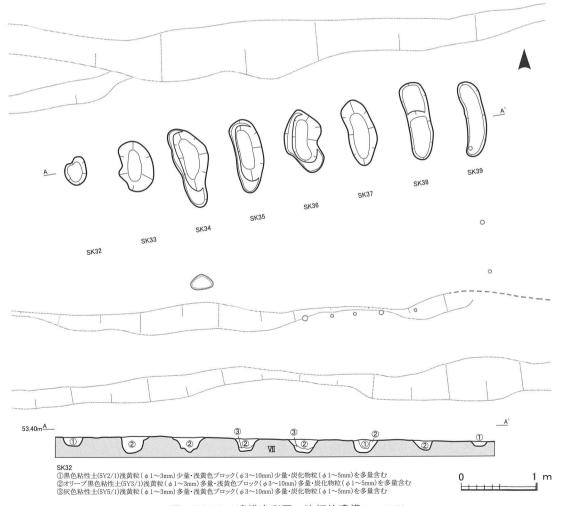


Fig.3.2.11 遺構実測図 波板状遺構 S=1:50

(3) 柵列状遺構

(Palisade; Stockade)



柵列状遺構(SA01) 〔Fig.3.2.12〕

位 置 調査区北半を東西に縦断するように帯状の ピット群を検出した。このピット群を柵列状遺構として扱う。 この柵列状遺構は、同じく東西方向に走る溝 SX07-92 や道 路状遺構 SF07-123 に平行し、SF07-123 の南に位置してい る。

重複関係 掘立柱建物 SB07-02 と切り合い関係にあるが、柱穴とピットが切り合わないので新旧の判別はつかない。SA01 に平行する SD20 とは西半で交わり、SA01 が新しい。SD20 の遺構内覆土は暗黒褐色化しており、SB07-02 の柱穴埋土の土相に近似する。確証は持てないが、SA01 が新しいという蓋然性が高いように思われる。

規模と構造 約70基の土坑で構成される。1基あたりの土坑の規模は、直径15~30㎝幅、深さ15~50㎝を測る。長さ約40m、幅約1~1.5mの範囲に土坑が帯状に連なり、周辺に広がらず、同じ土相の覆土をもつことから、一連の遺構と判断した。遺構内覆土は、他の遺構のそれと比べ若干灰色の埋土が周囲にあって中心部分に柱根痕跡と思われる黒色土が円柱状に堆積していた。柱根痕跡は検出面や断面において明瞭に確認でき、ほぼすべての土坑に存在していた。状況だけから判断すると個々の土坑はすべて柱穴と同じ構造をしており、そういった土坑が建物を構成するわけでもなく、70基も集中している状況は特異にも見える。

遺物の出土はほとんどなく、年代・性格の推定材料がないが、平面が円形で柱穴状の断面を呈し、それらが規則的に配列している状況から柵列状遺構として扱うことにした。規則的に配置しているので、何らかの意図をもって造成されたとも考えられるが、北と南を分断する目的で造られたものか、もしくは北か南のどちらかが自己領域を防御する目的で造ったものの可能性が考えられる。現段階でこの遺構の性格を明らかにすることはできない。

年 代 各ピットからの出土遺物がないので、年 代は推定できない。切り合い関係による新旧の判別結果から、 SD20より新しいというほかない。

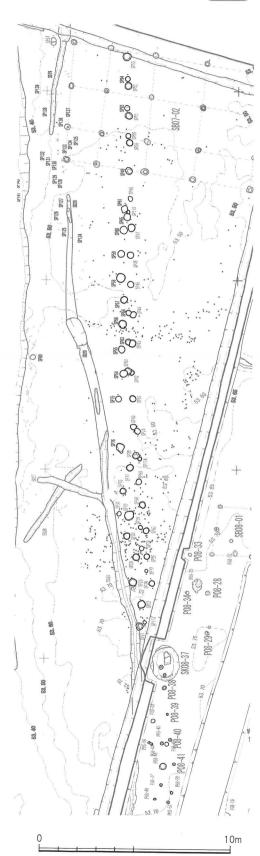
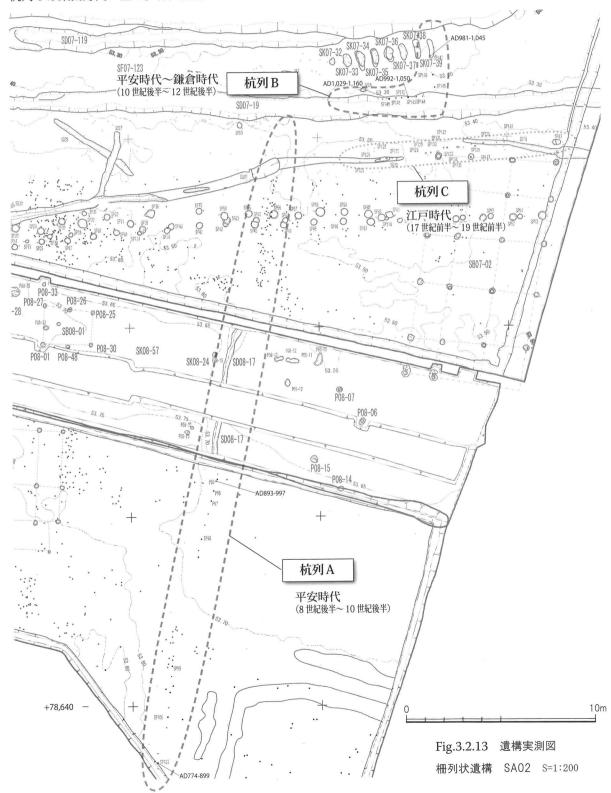


Fig.3.2.12 遺構実測図 柵列状遺構 SA01 S=1:200

柵列状遺構 (SAO2) [Fig.3.2.13]

概要調査区中央部において、木製の杭列を検出した。他の柵列と区別するため、便宜的に杭列A・B・Cと呼び分けることにする。木杭は遺存状態の差が大きく、木質が遺存しないがピット状に痕跡が残るものも杭列のうちに含めて扱った。杭列Aは南北方向、杭列BはL字状に南北方向と直交する東西方向、杭列Cは東西方向に並ぶ。伴出遺物はないため、遺構年代はすべて放射性炭素年代測定結果に拠った。



Tab.3.2.2 杭列の構成

遺構名	方向性	年代観	遺構番号 *木質が残るもの
杭列A	南北 (33 m)	平安時代 (8 世紀後半-10 世紀後半) *SP95(2 σ cal AD893-cal AD997)相対比 0.968 *SP107(2 σ cal AD774-cal AD899)相対比 0.908	SP95*, SP96*, SP97*, SP98*, SP99*, SP106*, SP107*
杭列B	東西+南北 (3+3 m)	平安時代-鎌倉時代 (10世紀後半 – 12世紀後半) *SP140 (2 σ cal AD1,029-cal AD1,160) 相対比 1.000 *SP143 (2 σ cal AD992-cal AD1,050) 相対比 0.670 *SP147 (2 σ cal AD981-cal AD1,045) 相対比 0.923	SP140*, SP141*, SP142, SP143*, SP144, SP145*, SP146*, SP147*
杭列C	東西 (19 m)	江戸時代 (17世紀前半 – 19世紀前半) *SP126 (2 σ cal AD1,642-cal AD1,681) 相対比 0.490 *SP133 (2 σ cal AD1,727-cal AD1,813) 相対比 0.598 *SP138 (2 σ cal AD1,733-cal AD1,807) 相対比 0.580	SP124, SP125, SP126*, SP127, SP128, SP129, SP130, SP131, SP132, SP133*, SP134, SP135, SP136, SP137, SP138*, SP139

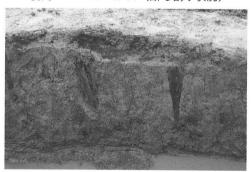
「年代観」の SP 数値は、放射性炭素年代測定結果における暦年較正年代のうち、統計的に真の値が入る確立の高い 2 σ の数値を記している。年代観は、それらの数値から導き出したものである。

重複関係 切り合い関係にある遺構はない。

規模と構造 それぞれの杭列に関する年代情報は、上表 のとおりである。木質が遺存していた杭については、実測図 (Fig.3.3.6)及び遺物観察表(Tab.3.3.7)をそれぞれ参照されたい。 杭列の打設方向は、いずれも南北方向もしくは東西方向を指 向しており、何らかの制約に従って打ち込まれた可能性が考 えられる。杭列の性格については、判断材料が乏しく推測の 域を出ないが、水田畦畔もしくは水路補強の杭、溝等の施設 に付属することが推定される。杭の年代観を得るため、遺存 状態の良い個体について放射性炭素年代測定を行なった。そ の結果、杭列Aは平安時代(8世紀後半~10世紀後半)、杭列 Bは平安時代~鎌倉時代(10世紀後半~12世紀後半)、杭列C は江戸時代(17世紀前半~19世紀前半)という年代を導き出し た。杭列A・杭列Bは東大寺領荘園時代、杭列Cは加賀藩の 時代である。杭列A・杭列Bは比較的遺存状態が悪く、木質 が脆弱であった。杭の上部は遺構検出面と同じレベルで削平 を受けているように見受けられ、遺存部分は打ち込まれた杭 の突端部だけである。削平の時代は不明だが、杭列Cは杭頭 が遺構検出面から飛び出すように検出されているため、〔杭 列A・Bが打ち込まれた後~杭列Cが打ち込まれる前」、つ まり〔12世紀後半以降~17世紀前半以前〕の時期に絞り 込むことが可能である。これら杭列の状況は、この時期に何 らかの整地作業が行われたことを示唆するものである。



杭列A SP96·SP97 (断ち割り状況)



杭列B SP142·SP143 (断ち割り状況)



杭列C SP128~132(断ち割り状況)

柵列状遺構 (SAO4) [Fig.3.2.14]

位 置 調査区中央部東側にある。

重複関係 切り合い関係にある遺構はない。

柵列状遺構 (SAO5) [Fig.3.2.14]

位 置 調査区中央部東側にある。

重複関係 切り合い関係にある遺構はない。

規模と構造 P08-14 と P08-15 の 2 基で構成される。いずれのピットも底面の断面形状 2 基のピットが平底であり、柱のあたり部分が一段深くなっていることから柱穴の可能性がある。柵列状遺構として扱うが、1 間分の柱列とも考えられる。しかし、対応する柱列がなく、建物を構成しない。本遺構は N-35°-W の傾きを示し、SA05 と平行関係にある。 N-35°-W

柵列状遺構 (SAO6) [Fig.3.2.14]

位 置 調査区中央部にある。

重複関係 切り合い関係にある遺構はない。

規模と構造 P08-28とP08-29の2基のピットで構成される。2基の距離は2.1mを測り、2基のピット N-90°-Eの傾きを示す。SB08-01の北側柱列の可能性も考えられたが、約10°のずれがあり、柱筋の通りが悪いことから、別遺構と判断した。しかし遺構全体で考えるとSB07-01と SB08-01が一連の掘立柱建物である可能性が生じた。本遺構との関連については、掘立柱建物物(SB07-01)の項で触れている。 2棟との関連

柱 穴 2基いずれも平面・断面ともに柱痕は確認できない。個々の規模や形状は SBO8-01を構成する柱穴とほぼ同様である。

柵列状遺構(SAO7) [Fig.3.2.14]

位 置 調査区中央部西側にある。

重 複 関 係 SK08-37 埋没後に SA07 が形成されている。

規模と構造 P08-38・39・40・41 の 4 基のピットで構成される。ピット間の距離は 1.3 . 4 基のピット ~ 1.4 mを測り、N-84°-E の傾きを示す。いずれの柱穴からも柱根は出土していない。SAO1 の南西延長線上に位置することから、SAO1 を構成するピット群とも考えられるがこの 4 基だ SAO1 ピット群 け規模が小さく、ピット間距離が一定であることから抽出して報告するものである。

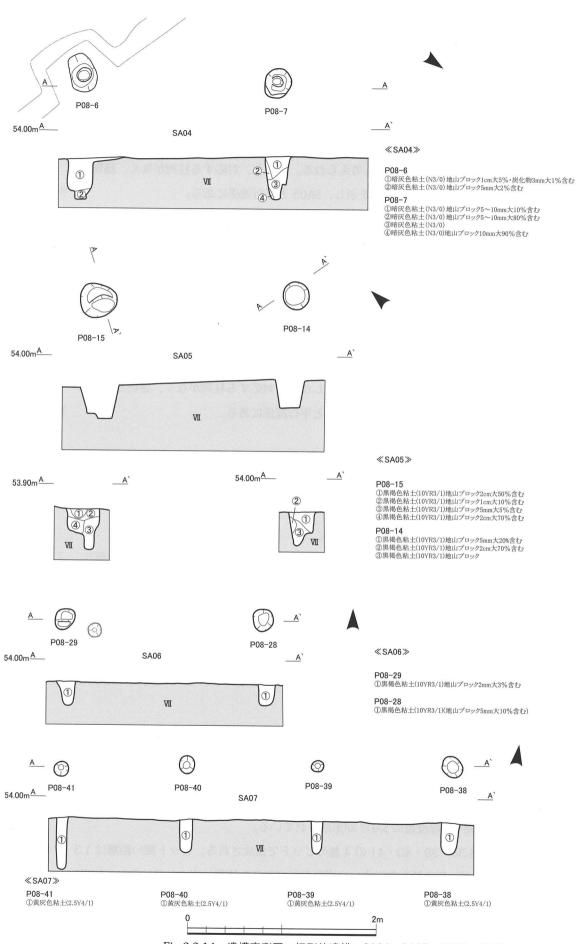


Fig.3.2.14 遺構実測図 柵列状遺構 SAO4·SAO5·SAO6·SAO7 S=1:40

東→西へ流下

(3) 溝 [Ditch: Gutter]



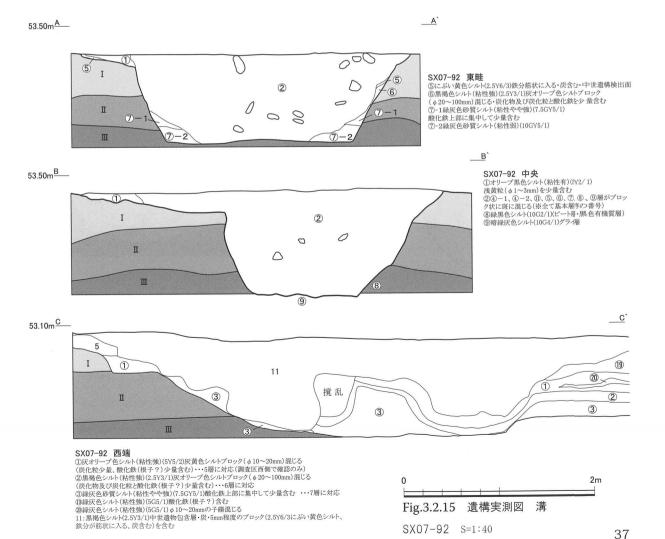
(Fig.3.2.15 PL.11)

調査区北部を東西に横断する。 位

重複関係 SF07-123 を切って造成されている。

調査区西端から N-97°-E の方向性で東側に展開し、東端部から西側約 7m 規模と構造 付近で N-48°-E に方向性を変え、調査区北側に続く。総延長約 60m、幅は西端部で約 5.9m、 総延長約 60m 北端部で約 5.2m、中間部分は約 $2.4\sim3.3$ m を測る。遺構検出面からの掘削深度は約 $0.96\sim$ 深さ約 1 m 1.12m を測る。溝床は平坦で、断面形状は概ね逆台形を呈するが、西側で崩れる。流下方向 は周囲の地形及び現況用水路の状況から、東から西方向と考えられる。SX07-92 については、 方向性が道路状遺構とほぼ一致し、平行する位置関係にある。覆土の堆積は、大部分が単一の単一層覆土 層位による覆土構成であるため、自然堆積というより短期間に人為的に埋められたと推察でき る。出土遺物には近代陶磁器片が含まれるので、少なくとも埋没時期は近代以降である。掘削 時期や開口時期について明確な判断はできない。

物 須恵器・土師器・中世土師器・珠洲・青磁・越中瀬戸・近代陶磁器が出土している。 潰



(4) 土 坑 [Earthen pit]



土坑 (SK08-37)

(Fig.3.2.16 PL.9)

位 置 調査区中央部、やや西側に位置する。

重複関係 切り合い関係のある遺構はない。

規模と構造 平面形状は、東西約 1.92m、南北約 1.48m の不整楕円形を呈する。遺構検 出面からの掘削深度は約 0.6m を測り、断面形状は不整形な逆台形を呈する。土層観察の結果、 レンズ状に堆積する 4 層、そして 1 層の順で堆積したあと、竪穴状に掘削を受けて 3 層と 2 層が堆積したことを確認した。2 層では、砂質分や地山土の混入が見られない。本遺構からは 遺物が出土せず、年代及び性格を推定する手がかりに乏しいが、出土炭化材を放射性炭素年

放射性炭素年代測定

代測定した結果、試料4点

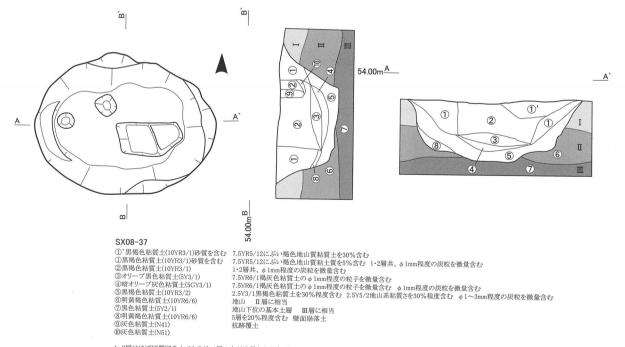
Tab.3.2.3 土坑(SK08-37)出土炭化材の分析結果

において9世紀後半から15世紀初頭の年代が得られた。また、北西部に杭跡を検出したが、おそらく後世のもので本遺構とは、直接関係はないものと判断した。

遺構名 年代観

SKO8-37 **平安時代 - 室町時代 (9世紀後半 - 15世紀初頭)*** 試料番号 3(2 σ cal AD888-cal AD1,014)相対比 1.000
* 同 4(2 σ cal AD1,150-cal AD1,258)相対比 0.853
* 同 5(2 σ cal AD1,022-cal AD1,158)相対比 1.000
* 同 6(2 σ cal AD1,295-cal AD1,404)相対比 1.000

「年代観」の SP 数値は、放射性炭素年代測定結果における暦年較正年代のうち、統計的に真の値が入る確立の高い 2 σ の数値を記している。年代観は、それらの数値から導き出したものである。



1、2層はほぼ同質同色土であるが、1層の方が砂質をやや多く含むが2層にはそれが認められない 地山を含め、全体に植物根によるものと思われる細い筋状(線状)の、酸化物が多く見られるが固体化(タカシコゾウ)は未発達

Fig.3.2.16 遺構実測図 土坑 SKO8-37 S=1:40

2_m

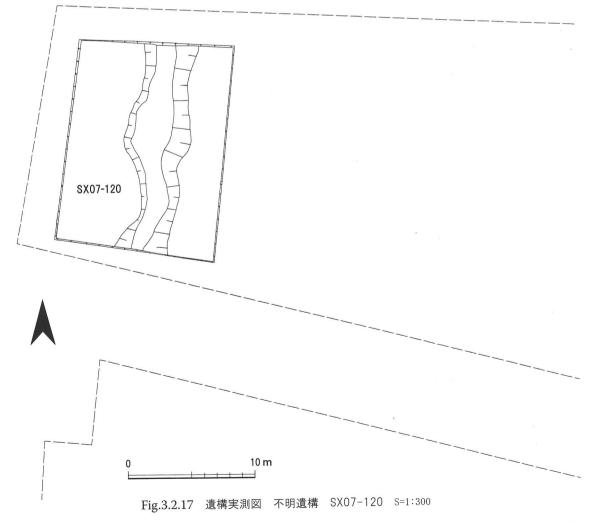
(5) 不明遺構

不明遺構 (S X 0 7 - 1 2 0) [Fig.3.2.17]

置調査区西側に位置する。 位

重複関係 切り合い関係のある遺構はない。

規模と構造 この遺構は、唯一下層遺構面で検出した遺構である。試掘調査時、27T に 下層遺構面 て検出したもので、当初は河道として扱っていた(序章2参照)。上層遺構から掘り下げた段階 で遺構の輪郭を確認することができず、テストピットを縦横に入れたが明瞭な掘り込みライン を検出することができなかった。そこで、テストピットを掘り進む中、須恵器・土師器といっ た古代遺物が出土したことから、それら遺物が含まれる範囲を不明遺構として取り扱っている。 そのため、現段階では溝なのか河道なのか古代の遺物包含層なのかは判然としない。遺物は珠 洲焼が1点含まれるが、総じて8世紀後半段階に位置付けられるため、周囲に当該期の生活 8世紀後半 面が存在することが推定される。遺構覆土は、粘性の高いシルト層であり、青味がかっていた。 遺構の規模は、幅 $3.0 \sim 5.3$ m、深さ $30 \sim 50$ cmとなる。 (藤井秀明・野原大輔)



39

えられる。

3 出土した遺物

(1)遺構内出土遺物

(Fig.3.3.1 PL.13)

SD07-119 1は須恵器杯の口縁部片である。やや生焼けであり、口縁端部を僅かに外反させる。

SD07-19 2は須恵器杯の口縁部片である。内面の口縁部付近が摩耗している。

近世の煙管 SD07-10 3は煙管の吸口である。表面には象嵌などの装飾は施されていない。

SK07-91 4は砥石である。石材は安山岩である。砥面として四面とも使用している。

SK07-89 5は珠洲焼の甕の胴部片である。器厚から大甕と考えられる。

SP07-105 6は須恵器の甕の胴部片である。外面には平行線文、内面には同心円文による叩きを行い、後に掻き目を施している。

SX07-92 7・8は須恵器である。7は無台杯である。底部から体部への立ち上がりは丸
みをおびている。帰属時期は田嶋編年のⅣ期、8世紀後半に比定される。8は有台杯である。
9は土師器の短胴釜の底部である。器面の摩耗が著しく、詳細な調整等は不明である。外面に
中世土師器 被熱痕があることと、器形から短胴釜と判断した。10は中世土師器皿である。非ロクロ成形によるものである。11は珠洲焼の擂鉢口縁部である。残存部分には卸目を確認できない。口
吉 岡 編 年 縁形態は、外傾口縁であり、内端を爪状に仕上げている。吉岡編年のⅡ3期~Ⅲ期(12世紀後 Ⅱ3~Ⅲ期 半~13世紀前半)に帰属すると思われる。12は青磁碗である。外面には鎬文を施す。13・14は越中瀬戸の皿である。13・14ともに削り出し高台である。高台の断面が、13は方形であるのに対し、14は三角形である。いずれも鉄釉が施釉されている。15は磁器の鉢である。見
荒 磯 文 込みには染付によって荒磯文が施されている。帰属時期は明治期以降か。16は陶器の植木鉢広 坂 遺 跡 である。さざ波状の口縁となっており、類似したものが石川県金沢市広坂遺跡から出土している。この他に類似したものを確認できなかったため、植木鉢としたが、他の器種の可能性も考

SX07-120 17~19 は須恵器の杯蓋である。17 は天井部に回転箆切りを行っている。18 は 17・19 と比べ器肉が薄い。20 は無台杯である。生焼けである。21~24 は有台杯である。21 は生焼けであり、器面の摩耗が著しい。22 は、当遺跡より出土した有台杯の中では器高が明 Ⅲ 低い。また、口縁端部には僅かに煤が付着している。灯明皿として使用されたものであろうか。使用頻度が高かったのか、内面の手触りは滑らかである。23 は口縁から体部の破片であり、底部は残存していないが、器高から有台杯であると思われる。口縁端部にやや強めの撫でを施し、僅かに外反させる。24 の口縁端部もやや強めの撫でを施し、窪みをつくる。また体部の中程に 2 条の沈線を施す。25・26 は長胴釜である。25 は口縁部の破片である。口縁端部を上方につまみ上げる。外面には煤が付着し

i 田嶋明人 1988「古代土器編年軸の設定」『北陸古代土器研究の現状と課題』石川県考古学研究会・北陸古代土器研究会

ⅱ 吉岡康暢 1994「第2章 珠洲陶器の編年的研究」『中世須恵器の研究』吉川弘文館

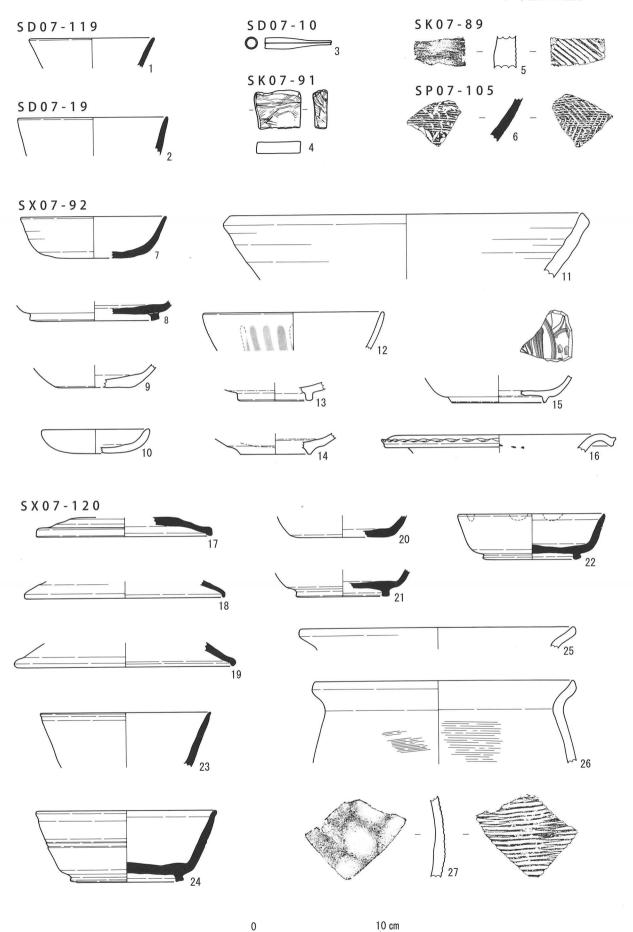


Fig.3.3.1 遺物実測図(1) S=1:3

須恵器

ている。27 は珠洲焼の甕胴部片である。焼きがあまく、器面が硬化しきっていない。当遺構 より出土した遺物は、27の珠洲焼を除き、総体的にIV期、8世紀後半に帰属すると考えられる。

(2)包含層出土遺物 (Fig.3.3.2 • 3.3.3 • 3.3.4 • 3.3.5 • 3.3.6 PL.14 • 15 • 16 • 17)

 $28\sim30$ は杯蓋である。28 は当遺跡から出土した杯蓋のうち唯一つまみが残存 していたものであり、扁平なつまみを貼付する。29・30はつまみ及び口縁端部を欠損してい る。29 の現存している部分の端部内面には、重ね焼きの痕が僅かに残る。31 は杯であり、生 焼けである。32~36は有台杯である。32は体部が緩やかに、外側に立ち上がるため、椀に 近い形状になると考えられる。32を除き、他の有台杯の高台は全て内端接地である。34は底 部から体部立ち上がりの境界で綺麗に揃えて打ち欠いている。また底部外面には僅かに墨痕が 用 硯 あるため、転用硯として用いられた可能性が高い。36 は底部から口縁部付近まで遺存してい る。口縁端部をやや外反させる。高台は他のものと比べ狭く高い。 $37\sim40$ は甕胴部である。 37 は細片であったが、外面の叩き目が格子状であったため図示した。38 の外面の叩き目も同 様に格子状であるが、当て具の掘り込みが浅かったためか、器面の押圧もやや浅く不鮮明であ る。39・40の外面には平行叩きが、内面には同心円文叩きが残る。32がやや新相を示して いると思われるが、その他はIV・V期、8世紀後半~9世紀前半に帰属すると考える。

非ロクロ成形 中世土師器 出土した中世土師皿の大半は非ロクロ成形によるものである。いずれも器面 の摩耗が著しく、調整が明瞭に残っているものは少ない。41 の底部には、摩耗が著しいため 回転糸切り痕が確認できないが、平らに成形されているため、ロクロ成形によるものと考える。 $42\sim60$ は非ロクロ成形によるものである。このうち、56 と 60 に付着している炭化物を放 放射性炭素 射性炭年代測定した。その結果、56 は 15 世紀前半、60 は 13 世紀末から 14 世紀末という 年代測定 ものであった。ただ、56の炭化物及び煤は断面にまで及んでおり、皿として機能が失われて から付着したものである。

珠洲焼 $63\sim71$ は擂鉢である。 $63\sim65$ は口縁部小片であるため、卸目が確認できな い。卸目の確認できるものと比べ、器肉は薄い。口縁端部の形態は方頭であり、外傾口縁であ 12 世紀後半 る。吉岡編年の I 期あるいは II 期、12 世紀後半に帰属すると考える。66 の口縁部は内端に広 14世紀代 く面取りを行っており、三角頭の内傾口縁である。吉岡編年のV期、14世紀代に帰属すると 考える。 67 も 66 同様に口縁部の内端に広く面取りを行っている。 口縁形態は三角頭であるが、 15 世 紀 代 端部はやや円頭に近く、66 に比べやや拡張している。吉岡編年のVI期、15 世紀代に帰属する と考える。 $68\sim70$ までは胴部の破片であり、卸目が確認できる。68 の卸目は 1 単位幅 2.7cm 当たり7目で4条確認できる。69 の卸目は1単位幅 2.6cm 当たり9目で2条確認できる。 13世紀後半 卸目の施入密度は高く、ほぼ内面全体に施入されたと思われる。吉岡編年のIV期、13世紀後 半に帰属すると考える。70の卸目は1単位内の目数は不明である。現存している範囲の中で は、4 目確認できる。71 の口縁部は肥厚した内端に広く面取りを行っており、櫛目波状文帯

14 世 紀 代 をめぐらす。卸目は 1 単位幅 2.6cm 当たり 9 目確認できる。吉岡編年のV期、14 世紀代に帰 R 種 の 壺 属すると考える。 $72\sim75$ は壺である。 $72\cdot73$ はいずれもロクロ成形による R 種の壺の底部

であると思われる。74 は壺の胴部片である。外面の叩き目は、後述する甕に比べ細密であり、 鈍角化した綾杉文である。75 は大型壺の底部である。底部外面には静止糸切り痕があり、残 存している範囲内では叩き目が確認できない。76~83は甕である。78のみ口縁部片であり、 その他は胴部片である。78 の口縁部形態は、方頭くの字口縁である。吉岡編年のIV期、13 世 紀後半に帰属すると考える。叩き目は 76・77 がやや細密であるが、79 ~ 83 は粗めである。 出土した珠洲焼の帰属時期はI期からVI期と幅がある。

84 は皿である。85 は碗である。見込みには釉剥ぎを、底部外面には蛇の目 釉剥ぎをやや粗雑に行っている。86 は碗である。口縁部は輪花状となっており、内面には箆 描き文様が施されている。

87 は皿である。畳付が細かく打ち欠かれている。88・89 は碗である。両方 白 ともに口縁部には大きめの玉縁を有する。12世紀前半に帰属すると考える。

12世紀前半

90 は小杯である。底部外面には回転糸切り痕がある。口縁部にやや強めの撫 越中瀬戸 でを施し、稜をつくる。鉄釉を施釉する。91 ~ 101 は皿である。91・92 の底部外面には回 転糸切り痕がある。いずれも鉄釉を施釉する。93~95は削り出し高台である。いずれも鉄 釉を施釉し、内禿となっている。96 は貼付け高台であり、胎土の色調は灰色である。今回出 土した他の皿とやや趣が異なる。97は削り出し高台である。灰釉を施釉し、内禿である。底 部外面には「□」の墨書がある。98 は口縁部である。口縁部にはやや強めの撫でを施す。鉄 釉を施釉し、内禿である。99 は削り出し高台である。灰釉を施釉し、内禿である。100 は口 縁部であり、灰釉を施釉する。101 は削り出し高台である。鉄釉を施釉し、内禿である。102 は口縁部がさざ波状のひだ皿である。削り出し高台である。鉄釉を施釉し、内禿である。103 ひ だ 皿 ~ 105 は丸碗である。 いずれも鉄釉を施釉する。 106 は碗の底部である。 削り出し高台であり、 鉄釉を施釉する。器肉が厚い。107は瓶の底部である。底部には回転糸切り痕が残る。内面 と外面に鉄釉を施釉するが、外面の底部付近は露胎である。断面には漆継ぎ痕が残る。108 漆 継 ぎ 痕 は擂鉢の口縁部である。口縁外端部下垂させる。109 は擂鉢の底部である。削り出し高台で あり、鉄釉を施釉する。

器面はロクロ撫でによる凹凸が顕著である。内面には箆描きによる記号がある。111 は皿で ある。削り出し高台である。灰釉を施釉し、高台は露胎である。112 は天目茶碗である。口 天 目 茶 碗 縁端部を外反させる。113 は碗である。口縁端部を外反させ、灰釉を施釉する。114 は碗で ある。体部は直線的に立ち上がり、口縁部付近で僅かに内傾する。内外面に灰釉を施釉するが、 外面体部中位以下は露胎である。内面には目跡が2個ある。115 は鉢である。口縁端部を外 側に折り曲げ、玉縁状にする。内外面共に灰釉を施釉するが、口縁端部は露胎である。内面に

110~115は陶器である。110は蓋と思われる。内面には灰釉を施釉する。

は箆描きによる文様を施文する。

瀬戸美濃

器 116・117は近世陶器の碗である。116は削り出し高台である。内外面に鉄 釉を施釉するが、高台は露胎である。117 は肥前系の皿である。削り出し高台である。外面 には灰釉を、内面には銅緑釉を施釉し、内面の見込みには蛇の目釉剥ぎを行う。118 は近世 銅 緑 陶器の鉢である。内面に染付で圏線等も文様を描き、後に灰釉を施釉する。内面には蛇の目釉 剥ぎを行い、畳付は露胎である。

釉

磁 器 119 は近代磁器の皿である。透明釉を施釉する。120 は近代磁器の碗である。 貼付け高台であり、透明釉を施釉する。畳付は露胎であり、砂が付着している。121~126 は近世の磁器である。121 は皿である。割高台であり、透明釉を施釉する。見込みには目跡 が2個あり、断面には漆継ぎが確認できる。122 は碗である。内外面に染付で文様を施し、 透明釉を施釉する。畳付は露胎である。123 は皿である。見込みに染付で文様を描き、透明 釉を施釉する。畳付は露胎であり、高台内には釉剥ぎを行う。125 は鉢である。体部は直線 的に立ち上がり、口縁端部で明瞭に外反させる。内面に箆描きによる沈線を1条描き、透明 釉を施釉する。126 は碗である。内湾気味に立ち上がる体部は口縁部で僅かに外反し、小さ な玉縁を有する。内外面に灰釉を施釉する。127・128 は近代の磁器である。127 は瓶である。 外面には透明釉を施釉し、畳付は露胎である。128 は碗である。内外面に色絵を施す。

石 帯 巡 方 石製品 130 は石帯の未成品と思われる。石材は泥岩であり、3cm 程度の長方形に加工した巡方であるが、半分以上欠損している。裏面が剥離しており、正確な厚みは不明であるが、遺存している状態では 4mm である。表面は丁寧に磨かれているが、側面には擦痕が残っており、製作途中の印象を受ける。また、帯に結び付けるため 4 隅にあける孔はない。131・132 は砥石である。石材はいずれも凝灰岩であり、風化による表面の剥離及び摩滅が著しい。131 は 5 面、132 は 4 面を砥面として使用したと思われる。133 は砥石と思われる。表と裏の 2 面を砥面として使用したと考える。134・135 は磨石である。石材は砂岩であり、薄く平らな形状を呈する。134 は、4 辺の角を使用したためか、角が落ちており、断面は台形を呈する。

木製品 136 は鎌の柄である。柄には刃の装着部分が残っており、2 箇所を釘で留められている。137~150は杭である。全て割り材であり、先端を加工している。上部は欠損している。平成20年度の調査で出土した140・143を除き、出土地点は2つの杭列に分別できる。まず、137~139・142・144~146 は南北方向に列をなす杭列である。いずれも幅4cm程度の多角形に加工されている。やや細身の杭である。141・147~150 はSD19 の北岸に埋設された一連の杭と考える。141を除き、前述した多角形のものとは異なり、幅5~7cm、厚さ3cm程度の板材に加工されている。両方とも杭としては、大きいものではないので、それ程強度を求めない使用目的で用いられたものと考える。 (下濱聡・野原大輔)

《参考文献》

研波市教育委員会 2004『久泉遺跡発掘調査報告書 I』 砺波市教育委員会 2005『久泉遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 砺波市教育委員会 2007『久泉遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 砺波市教育委員会 2005『安川天皇窯跡発掘調査報告』 富山市教育委員会 2006『富山城跡発掘調査報告書』 金沢市 2006『広坂遺跡(1丁目)Ⅲ』

北陸中世土器研究会 1997『中・近世の北陸 ―考古学が語る社会史―』

吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

財団法人 富山県文化振興財団 1996 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告 (遺物編)』

珠洲市教育委員会 2006 『珠洲焼窯跡群 一珠洲古陶関係遺跡発掘調査等事業―』

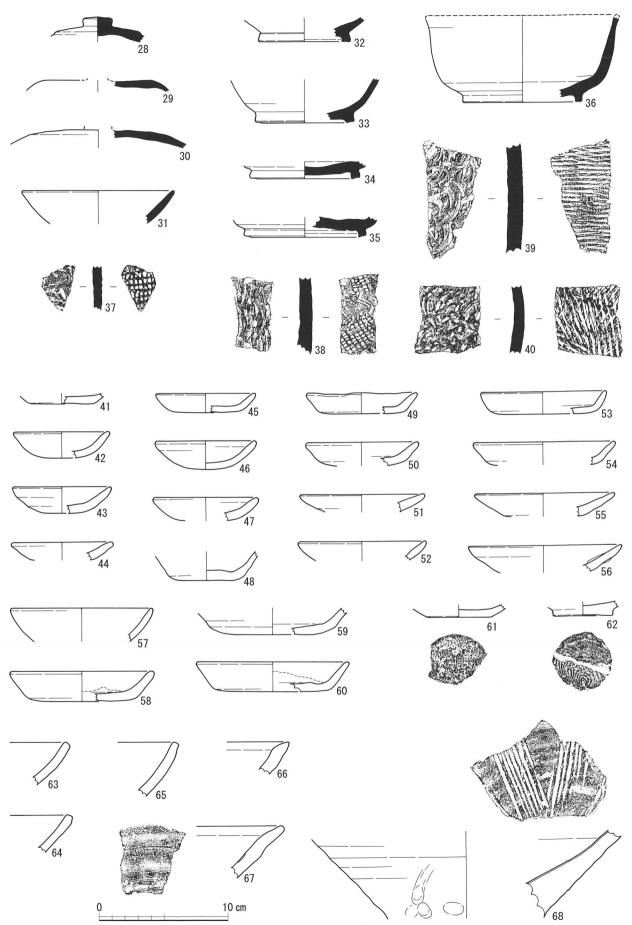
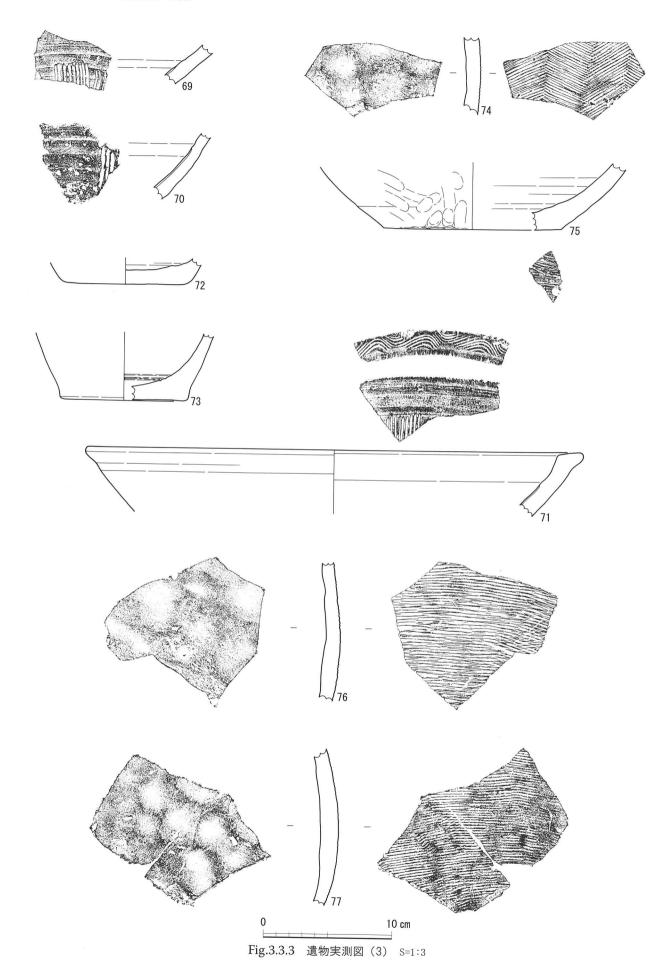
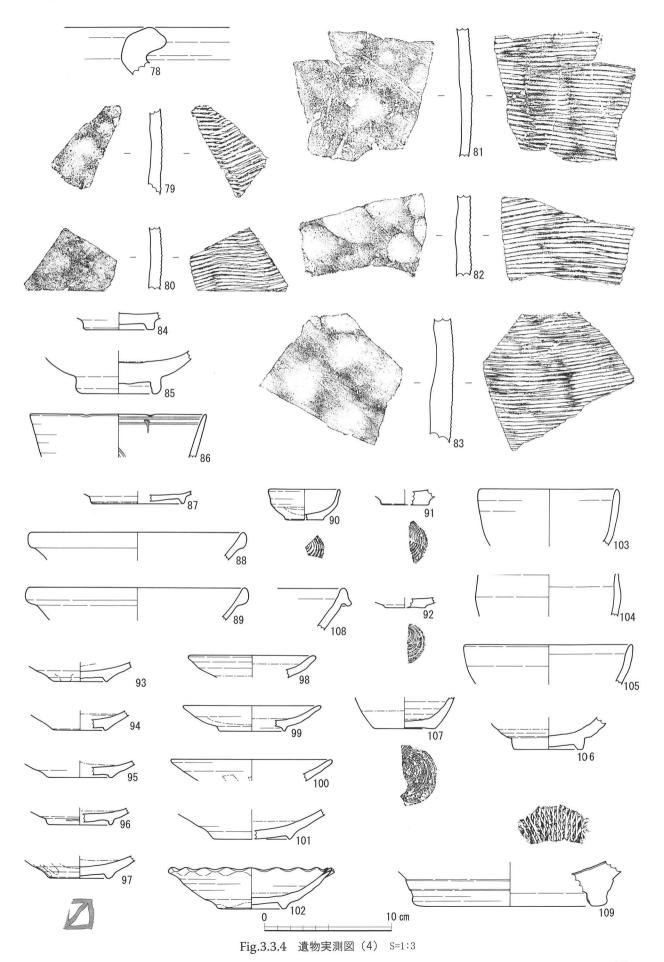
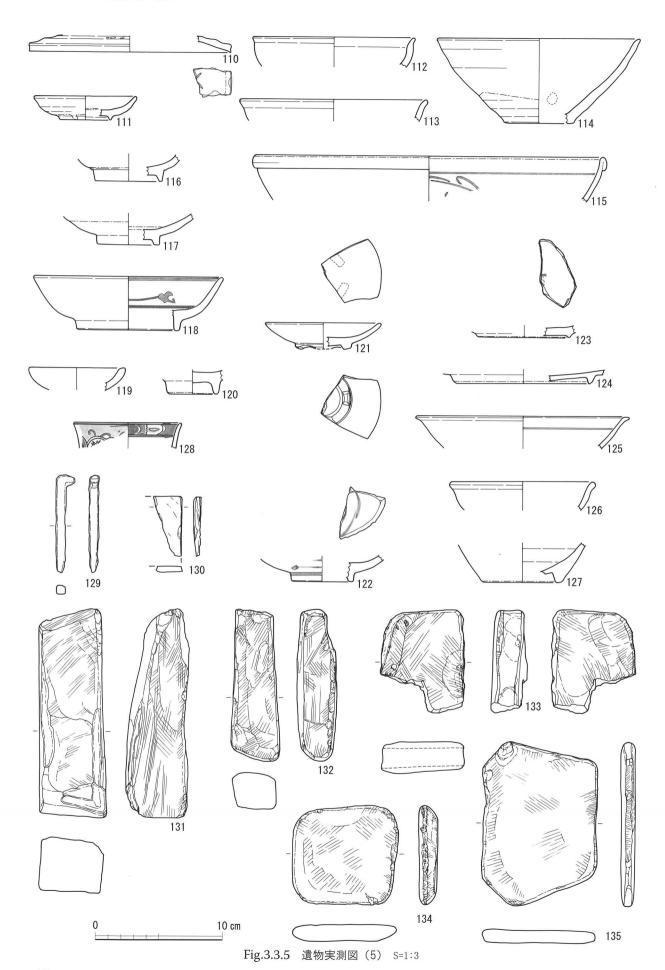


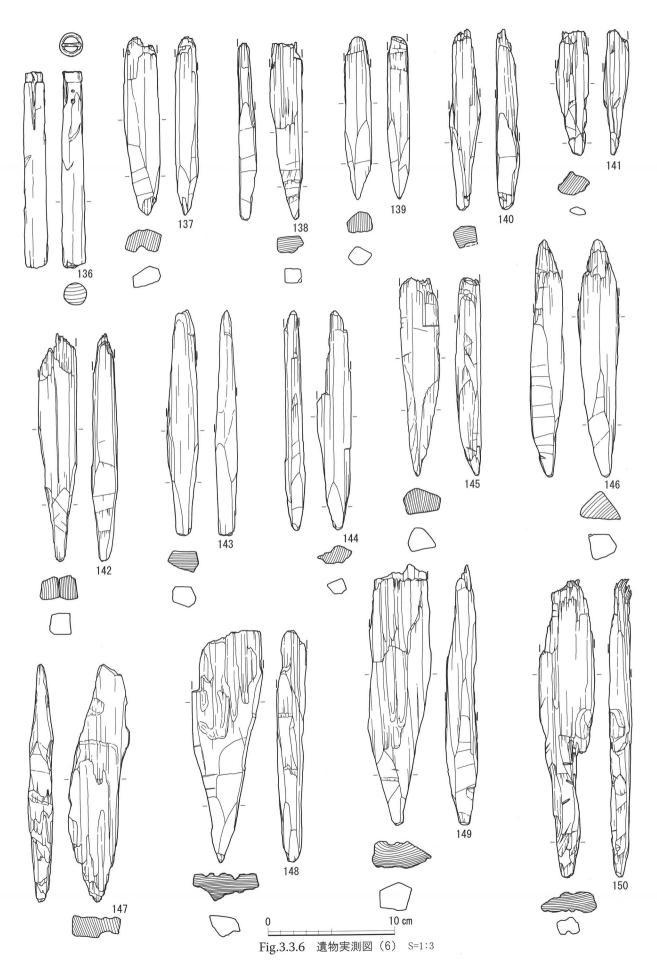
Fig.3.3.2 遺物実測図 (2) S=1:3





47





Tab.3.3.1 遺物観察表 陶磁器類 (1)

図版 番号	番号	3 出土遺構	種類 器種		m)底径 (cm i) (残存率)	,	高径指数	数 調整	焼成	色調	胎士	備考
Fig.3.3.1	1	SD119		9.8	-	-		外回転撫で	普通	外:2.5Y7/1	密	海綿骨針含む。
	,	CD10	杯身 須恵聖	(1/12)	-			内回転撫で		内:2.5Y7/1		
	2	2 SD19	須恵器 杯身	11.8 (1/12)	-	-		外回転撫で	良好	外:N8/0	密	
	F	SK89	珠洲	(1/12)	-			内 回転撫で 外 平行叩き目	±7	内:N8/0	ete	Year Dalan
		, broo	甕	_	_	-		内当て具痕	及好	外 :N5/0 内 :N6/0	密	海綿骨針含む。
	6	SP105		_	_	_		外 平行叩き目・カキ目	白好	外:N6/0 外:N6/0	密	
			甕	-	_			内 同心円文当て具痕・カキ目	IXXI	内:N7/0	111	
	7	SX92	須恵器	11.5	8.7	3.3	28.7	外 回転撫で・底部回転篦切り	良好	外:7.5Y7/1	密	重ね焼き痕。海綿骨針含む。
			無台杯	(1/12)	(2/12)			内 回転撫で		内:7.5Y7/1	122	
	8	3 SX92	須恵器	-	9.0	-		外 回転撫で・底部回転箆切り	良好	外:5Y7/1	密	貼付高台。
			有台杯	-	(2/12)			内 回転撫で		内:5Y7/1		
	9	SX92	土師器	-	6.4	-		外 摩滅により不明	普通	外 :7.5Y7/4	粗	長石、赤酸斑粒、海綿骨針
	10	SX92	短胴釜 中世土師器	0 5	(4/12)	1.0	20.4	内摩滅により不明	2413	内:7.5Y7/4		含む
	10	37.97	中国工即裔	8.5 (1/12)	5.3 (2/12)	1.9	22.4	外横撫で	晋通	外:2.5Y6/2	並	チャート、雲母、海綿骨針含む。
	11	SX92	珠洲	28.0	- (2/12)	_		内 横撫で 外 回転撫で	白松	内 :2.5Y5/1 外 :N5/0	erfor	Me vo.III.A L.A. A. A.
		0.102	擂鉢	(1/12)	_			内回転撫で	及好	内:N5/0	密	海綿骨針含む。
	12	SX92	青磁	14.3	-	-		外轆轤撫で	良好	外:10Y6/2	密	外面に縦線文。
			碗	(1/12)	-			内轆轤撫で	200	内:10Y6/2	ш	/ I LLI C INCARCO
	13	SX92	越中瀬戸	-	6.4	~		外 轆轤撫で・底部削り出し高台	良好	外:10YR6/4	密	海綿骨針含む。
			Ш	-	(4/12)			内 轆轤撫で		内:10YR3/1		
	14	SX92	越中瀬戸	-	5.6	-		外 轆轤撫で・底部削り出し高台	良好	外:7.5YR3/2	密	赤酸斑粒含む。
		G1100	III	-	(1/12)			内轆轤撫で		内:7.5YR3/2		
	15	SX92	近代磁器	-	7.2	-		外轆轤撫で	良好	外 :N8/0	密	内面に染付。蛇の目凹型高台。
	16	SX92	鉢 近代陶器	18.6	(1/12)			内轆轤撫で		内:N8/0		
	10	JAJL	植木鉢	(1/12)	-	-		外 轆轤撫で 内 轆轤撫で	艮好	外:2.5GY7/1	密	内面に鉄絵。さざ波状口縁。
	17	SX120		13.9	-	_		外回転撫で・天井部回転箆切り	良好	内:2.5GY7/1 外:N7/0	शर्रेट	ET 治维基化合物
		_	杯蓋	(2/12)				内回転撫で	TK 2/1	内:N7/0	密	長石、海綿骨針含む。
	18	SX120	須恵器	15.7	-	-		外回転撫で	良好	外:N6/0	密	海綿骨針含む。
			杯蓋	(1/12)	-			内回転撫で		内:N7/0		13111137111 00
	19	SX120	須恵器	17.1	-	-		外 回転撫で	良好	外:N6/0	密	
			杯蓋	(1/12)	-			内 回転撫で		内:N7/0		
	20	SX120		-	8.4	-		外 回転撫で・底部回転箆切り	不良	外:2.5Y8/2	並	海綿骨針含む。
	0.1	CV120	無台杯	-	(3/12)			内回転撫で		内:2.5Y8/2		
	21	SX120	須思器 有台杯	-	7.1	-		外回転撫で・底部回転箆切り	不良	外:2.5Y7/2	並	貼付高台。
	22	SX120		11.6	(3/12) 7.0	3.6	21.0	内回転撫で	÷ 47	内:2.5Y8/1	ela	HILLIAM C. Market Market A
		OMIZO	有台杯	(1/12)	(4/12)	3.0	31.0	外 回転撫で・底部回転箆切り 内 回転撫で	及好	外:N7/0	密	貼付高台。海綿骨針含む。
	23	SX120		13.5		_		外回転撫で	自好	内:N7/0 外:N6/0	密	重ね焼痕。灯明皿として使用か。
			杯身	(2/12)	-			内回転撫で	1531	内:N6/0	ш	
	24	SX120	須恵器	14.3	8.0	5.6	39.2	外 回転撫で・底部回転箆切り	良好	外:N6/0	密	外面沈線 2 条。貼付高台。
			有台杯	(3/12)	(1/12)			内 回転撫で		内:N7/0		海綿骨針含む。
	25	SX120			-	-		外 摩滅により不明	普通	外:7.5Y8/4	並	長石、赤酸斑粒含む。
			長胴釜	(1/12)	-			内 摩滅により不明		内:10YR8/2		
	26	SX120		21.4	-	-		外 回転撫で・カキ目	普通	外:10YR5/2	並	長石、赤酸斑粒含む。
	27	SX120	長胴釜	(1/12)	-			内回転撫で・カキ目	16.100	内:10YR7/3		外面に煤付着。
	21	3/1/20	珠/m 甕	-	-	-		外平行叩き目	晋通	外:N4/0	並	海綿骨針含む。
Fig.3.3.2	28	∐層	須恵器	-	_	_		内当て具痕が見れています。	白权	内:5Y5/1	obr	
			杯蓋	_	_	-		外 回転撫で・天井部回転箆切り 内 回転撫で	及好	外:5Y7/1 内:5Y7/1	密	
	29		須恵器	_	8.4	_		外回転撫で・底部回転箆切り	良好	外:N6/0	密	内面に重ね焼痕。海綿骨針
			杯蓋	-	(4/12)			内回転撫で	12,71	内:N7/0	111	含む。
	30	Ⅱ層	須恵器	-	-	-			良好	外:7.5Y7/1	密	
			杯蓋	-	-			内回転撫で		内:7.5Y7/1		
	31	Ⅱ層	須恵器	11.8	-	-		外 回転撫で	普通	外:5Y8/1	並	赤酸斑粒含む。
			杯身	(2/12)	-			内 回転撫で		内:5Y8/1		
	32		須恵器	=	7.2	-		外回転撫で	良好	外 :N7/0	密	貼付高台。
	00		有台杯	-	(3/12)			内回転撫で		内 :N7/0		
	33		須恵器	-	7.8	-				外:7.5Y4/1	密	貼付高台。海綿骨針含む。
	3/		有台杯 須恵器	-	(3/12)			内回転撫で		内:7.5Y6/1		
	54		L 1. Ir	_	8.7 (7/12)			外回転撫で・底部回転箆切り		外:N7/0	密	底部外面に墨痕有り。転用硯
	35		有口സ 須恵器	_	(<i>1</i> /1 <i>2</i>)			内 回転撫で 外 回転撫で・底部回転箆切り		内:N7/0	ster	8F/+==-
	55		有总码 有台杯	_	(3/12)	-		外 回転撫で・底部回転篦切り 内 回転撫で		外:10Y6/1 内:75V7/1	密	貼付高台。
	36		須恵器	_	9.2					内 :7.5Y7/1 外 :N7/0	密	貼付高台。
			有台杯	-	(1/12)			内回転撫で		内:N7/0	ш	went IPI LIO
	37		須恵器	_						外:7.5Y4/1	並	
			甕	_	_			内 同心円文当て具痕		内:7.5Y4/1		

Tab.3.3.2 遺物観察表 陶磁器類 (2)

図版 番号	番号 出土遺材	種類 器種)底径 (cm) (残存率)	器高 (cm)	高径指数	調整	焼成	色調	胎土	備考
	38 Ⅱ層	須恵器 甕			-		外 格子叩き目・カキ目 内 同心円文当て具痕	良好	外:N6/0 内:10Y6/1	密	
	20 П 🖂		-	-				白亿		গ্ৰহন	長石含む。
	39 Ⅱ層	須恵器	**	-	-		外平行叩き目	及好	外:5Y6/1	密	12日日で。
	10 m 🖼	甕	-	-			内同心円文当て具痕	rts 4-7	内:5Y6/1	de	
	40 Ⅲ層	須恵器	-	-	-		外平行叩き目	及好	外:N6/0	密	
	41 17 52	甕 出出 1.25年8月	-	-			内同心円文当て具痕	か/子	内:N7/0	}/-	チャート、赤酸斑粒含む
	41 Ⅱ層	中世土師器	-	5.1	-		外横撫で	育理	外:2.5Y8/2	並	プマード、 か飲処性百つ
	40 H 🖼	<u></u>	7.0	(3/12)	0.1	20.0	内横撫で	が子	内:2.5Y7/2	**	雲母、赤酸斑粒含む。
	42 Ⅱ層	中世土師器	7.3	4.0	2.1	28.8	外横撫で	音进	外:2.5Y8/2	並	去母、奶玫斑粒白色。
	40 H 😾		(2/12)	(2/12)	0.1	07.0	内横撫で	345.136	内:2.5Y8/2	A.F.	イ、1 土鉄研製会か
	43 Ⅱ層	中世土師器	7.6	2.6	2.1	27.6	外横撫で	首地	外:10YR8/2	並	チャート、赤酸斑粒含む
	44 11 12	<u> </u>	(6/12)	(6/12)			内横撫で	at: \26	内:10YR8/2	44	エレート 去砂斑粉合わ
	44 Ⅱ層	中世土師器	7.8	-	-		外横撫で	普通	外:10YR8/2	並	チャート、赤酸斑粒含む
	45 88	M. Láron	(2/12)	-		.0.5	内横撫で	36134	内:10YR8/2	26	目だ イル 1 委屈 土織
	45 Ⅱ層	中世土師器	7.7	5.0	1.5	19.5	外横撫で	普通	外:10YR8/3	並	長石、チャート、雲母、赤酸 含む。
	40 7 5	<u> </u>	(2/12)	(2/12)	4.0		内横撫で	340 NE	内:10YR8/2	26	
	46 Ⅱ層	中世土師器	7.8	3.2	4.3	55.1	外横撫で	普通	外:10YR8/2	並	チャート、赤酸斑粒含む
	45 5 5		(3/12)	(3/12)			内横撫で	46.73K	内:10YR8/2	24	マ、 1 生験所給会か
	47 Ⅱ層	中世土師器	8.1	-	-		外横撫で	普通	外:10YR8/2	並	チャート、赤酸斑粒含む
		III.	(4/12)	-			内横撫で	24.7 2	内:10YR8/2	16	77.+h 1. 1.4t
	48 Ⅱ層	中世土師器	-	4.2	~		外横撫で	普通	外:2.5Y8/2	並	歪み有り。チャート含む
		<u> </u>	-	(5/12)			内横撫で	7473	内:2.5Y8/2	14	エッナル イ・ 1 余七
	49 Ⅱ層	中世土師器		6.5	1.6	19.0	外横撫で	普通	外:2.5Y8/2	並	歪み有り。チャート含む
		Ш	(1/12)	(2/12)			内横撫で	1617	内:2.5Y8/2	.,	and the property of the Arth 122 A
	50 Ⅱ層	中世土師器	8.5	-	-		外横撫で	普通	外:10YR8/2	並	チャート、赤酸斑粒、海綿骨鉛
		Ш.	(2/12)	-			内横撫で		内:10YR8/2		含む。
	51 Ⅱ層	中世土師器	9.5	-	~		外 横撫で	普通	外:10YR8/2	並	チャート、赤酸斑粒含む
		m	(2/12)	-			内 横撫で		内:10YR8/2		
	52 Ⅱ層	中世土師器	9.8	**	-		外 横撫で	良好	外 :2.5Y4/1	並	チャート含む。
		Ш	(1/12)	-			内 横撫で		内:2.5Y4/1		
	53 Ⅱ層	中世土師器	9.8	6.6	1.8	18.4	外 横撫で	普通	外:10YR8/3	並	長石、チャート、雲母、赤酸斑
		mı	(1/12)	(2/12)			内 横撫で		内:10YR8/3		v
	54 Ⅱ層	中世土師器	11.0	-	-		外 横撫で	普通	外:10YR8/3	並	石英,チャート, 赤酸斑粒含む
		Ш	(1/12)	-			内 横撫で		内:10YR8/3		
	55 II層	中世土師器	10.7	-	-		外 横撫で	普通	外:10YR8/3	並	チャート含む。
		m	(1/12)	-			内 横撫で		内:10YR8/3		
	56 Ⅱ層	中世土師器	11.9	-	-		外 横撫で	普通	外:10YR7/2	並	内外面に煤の付着顕著(一
		Ш	(1/12)	-			内 横撫で		内:10YR8/2		厚く付着)。チャート、雲母き
ig.3.3.2	57 Ⅱ層	中世土師器	11.0	-	-		外 横撫で	普通	外:10YR8/3	並	チャート、赤酸斑粒含む
		Ш	(2/12)	-			内 横撫で		内:10YR8/3		
	58 Ⅱ層	中世土師器	11.0	8.4	2.4		外 横撫で	普通	外:10YR8/3	並	内面に油痕有り。長石、チ
		Ш	(1/12)	(2/12)			内 横撫で		内:10YR8/3		ト、赤酸斑粒、海綿骨針含
	59 Ⅱ層	中世土師器	_	6.2	_		外 横撫で	普通	外:10YR8/2	並	チャート、赤酸斑粒含む
		Ш	-	(2/12)			内 横撫で		内:10YR8/2		
	60 Ⅱ層	中世土師器	11.8	9.2	2.4		外横撫で	普通	外:10YR8/3	並	内面に油痕有り。長
							, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,				チャート
		Ш	(1/12)	(3/12)			内横撫で		内:10YR8/3		赤酸斑粒、海綿骨針含む
	61 Ⅱ層	中世土師器	-	5.2	-		外 回転撫で・底部回転糸切り	普通	外:5YR5/6	並	チャート含む。
			-	(4/12)			内回転撫で		内:5YR6/6		
	62 Ⅱ層	中世土師器	-	4.5	-		外 回転撫で・底部回転糸切り	普通	外:2.5Y8/2	並	チャート、雲母、赤酸斑粒含
		Ш	-	(12/12)			内 回転撫で		内 :2.5Y8/2		
	63 Ⅱ層	珠洲	-	·	-		外回転撫で	良好	外:5Y4/1	密	
		擂鉢	-	-			内 回転撫で		内:5Y4/1		
	64 Ⅱ層	珠洲	-	-	-		外 回転撫で	良好	外:N6/0	密	海綿骨針含む。
		擂鉢	-	-			内 回転撫で		内 :N6/0		
	65 Ⅱ層	珠洲	-	-	-		外 回転撫で	良好	外:N6/0	密	海綿骨針含む。
		擂鉢	-	-			内 回転撫で		内 :N6/0		
	66 Ⅱ層	珠洲	-	-	-		外 回転撫で	良好	外:10Y6/1	密	
		擂鉢	-	-			内 回転撫で		内:10Y6/1		
	67 Ⅱ層	珠洲	-	-	_		外回転撫で	良好	外:10Y6/1	並	海綿骨針含む。
		擂鉢	-	-			内回転撫で		内:N6/0		
	68 Ⅱ層	珠洲	-	-	-		外回転撫で・指頭痕	良好	外:5Y7/1	並	海綿骨針含む。
	- J 41/H	擂鉢	_	to.			内回転撫で		内:5Y7/1		***
ig.3.3.3	69 Ⅱ層	珠洲	_	-	_		外回転撫で	良好	外:N7/0	密	海綿骨針含む。
₋₆ .∪.∪.∪	ひひ 五層	擂鉢	_	_			内回転撫で	TXXI	内:N7/0	ш	
		珠洲	-	-				白亿	外:10Y6/1	並	
		基本(21)	-	-	-		外 回転撫で	这好	71/0101.45	MК	
	70 Ⅱ層						efo tratación es		rft 10VC/1		
	70 Ⅱ層	擂鉢珠洲	-	-			内 回転撫で 外 回転撫で	±>	内:10Y6/1 外:7.5Y6/1	密	口縁部に波状文。毎編骨針含

Tab.3.3.3 遺物観察表 陶磁器類 (3)

図版 番号	番号	出土遺権	種類 器種		m)底径 (cm)) (残存率)	器高 (cm)	高径指数調整	焼成	色調	胎士	備考
Fig.3.3.3	72	Ⅱ層	珠洲	-	9.2 (5/12)	-	外回転撫で・撫で	良好	外:2.5Y5/1	密	海綿骨針含む。
	73	Ⅱ層	珠洲	_	10.1		内 回転撫で 外 回転撫で	± 47	内:10YR5/2	cstar	油炉用り 会 を
		м/ш	壺	_	(1/12)	-	内 回転撫で	良好	外:5Y7/1	密	海綿骨針含む。
	74	Ⅱ層	珠洲	_	- (1/12)	_	外 平行叩き目	良好	内 :5Y7/1 外 :N5/0	rakar	周3000米口級A553000 2560日の
			壺	_			内当て具痕	及好	内:N6/0	密	外面叩き目縦位に羽状。海綿骨針 含む。
	75	Ⅱ層	珠洲	_	14.0	_	外 回転撫で・底部静止糸切り	良好	外:N6/0	密	海綿骨針含む。
			壺	-	(1/12)		内回転撫で	1723	内:N6/0	T.Li	WANDER CIOO
	76	Ⅱ層	珠洲	-	- ,	_	外 平行叩き目	良好	外:N6/0	密	海綿骨針含む。
			甕	=	-		内当て具痕	200	内:N6/0	ш	MANUAL CI O
	77	Ⅱ層	珠洲	-	-	-	外 平行叩き目	良好	外:5Y7/1	密	
			甕	-	-		内 当て具痕		内:5Y7/1		
ig.3.3.4	78	Ⅱ層	珠洲	-	-	-	外回転撫で	良好	外:N7/0	密	海綿骨針含む。
		_ =====================================	甕	-	-		内 回転撫で		内:N7/0		
	79	Ⅱ層	珠洲	-	-	-	外 平行叩き目	良好	外:N6/0	密	海綿骨針含む。
	0.0	n 🖂	甕	-	-		内 当て具痕		内:N6/0		
	80	Ⅱ層	珠洲	-	-	-	外 平行叩き目	良好	外:N6/0	密	海綿骨針含む。
	0.1	π Б₩	甕	-	-		内当て具痕		内 :N5/0		
	81	Ⅱ層	珠洲	-	-	-	外 平行叩き目	良好	外 :N6/0	密	海綿骨針含む。
	00	ग किस	甕	-	-		内当て具痕		内 :N5/0		
	82	II層	珠洲	-	-	-	外 平行叩き目	良好	外:N6/0	密	
	0.0	пы	甕	-	-		内当て具痕		内 :N6/0		
	83	Ⅱ層	珠洲	-	-	-	外平行叩き目	良好	外:N6/0	密	外面に煤付着。
	0.1	Ⅱ層	甕 志 <i>田</i>	-	- -		内当て具痕		内 :N5/0		
	04	山僧	青磁 皿	-	5.6	-	外轆轤撫で	良好	外:2.5GY6/1	密	
	85	Ⅱ層	青磁	-	(4/12)		内轆轤撫で	-t- (内:2.5GY6/1		
	05	11./@	碗	-	5.7 (5/12)	-	外轆轤撫で	良好	外:5GY7/1	密	見込み釉剥ぎ。高台内蛇の 目釉剥ぎ。
	86	Ⅱ層	青磁	13.8	(3/12)		内轆轤撫で	D 47	内:5GY7/1	erber	
	00	11/15	碗	(1/12)	-	-	外 轆轤撫で 内 轆轤撫で	良好	外:5GY7/1	密	内面に篦描き文様。口縁部 輪花。
	87	Ⅱ層	白磁	- (1/12)	7.1	_	外轆轤撫で	良好	内:5GY7/1 外:10Y8/1	061	
			Ш	_	(1/12)		内轆轤撫で	及好	内:1018/1 内:10Y8/1	密	
	88	Ⅱ層	白磁	16.6	-	_	外轆轤撫で	良好	外:N8/0	密	
			玉縁碗	(2/12)	_		内轆轤撫で	1531	内:N8/0	114	
	89	Ⅱ層	白磁	17.0		_	外轆轤撫で	良好	外:N8/0	密	
			玉縁碗	(1/12)	-		内轆轤撫で	1231	内:N8/0	ш	
	90	Ⅱ層	越中瀬戸	5.5	3.0	2.4	外 轆轤撫で・底部回転糸切り	良好		密	
			小杯	(1/12)	(2/12)		内轆轤撫で	200	内:10YR5/4	LG	
	91	Ⅱ層	越中瀬戸	-	3.3	-	外 轆轤撫で・底部回転糸切り	良好		並	雲母含む。
			m	-	(4/12)		内 轆轤撫で		内:7.5YR6/6		
	92	Ⅱ層	越中瀬戸	-	3.2	-	外 轆轤撫で・底部回転糸切り	普通		並	
			Ш	-	(4/12)		内 轆轤撫で		内:7.5YR3/1		
	93	Ⅱ層	越中瀬戸	-	4.6	-	外 轆轤撫で・底部削り出し高台	良好	外:7.5YR5/4	並	被熱。
			Ш	-	(7/12)		内 轆轤撫で		内:7.5YR5/4		
	94	Ⅱ層	越中瀬戸	-	4.4	-	外 轆轤撫で・底部削り出し高台	良好	外:10YR7/6	並	海綿骨針含む。
				-	(2/12)		内 轆轤撫で		内:10YR3/3		
	95	Ⅱ層	越中瀬戸	-	5.1	-	外 轆轤撫で・底部削り出し高台	良好	外:7.5YR7/8	並	長石含む。
	0.0	п Б		-	(1/12)		内 轆轤撫で		内:7.5YR5/3		
	96	Ⅱ層	越中瀬戸	-	5.0	-	外 轆轤撫で・底部貼付高台	良好		密	雲母含む。焼き台の痕跡有り。
	07	пы	III	-	(3/12)		内 轆轤撫で		内:N7/0		
	97	Ⅱ層	越中瀬戸	=	5.0	-	外 轆轤撫で・底部削り出し高台	良好		密	長石含む。高台内墨書。
	0.0	пБЗ	III	-	(7/12)		内轆轤撫で		内:2.5Y7/2		
	90	Ⅱ層	越中瀬戸	9.6	-	-	外轆轤撫で			密	
	00	т Бай	introduction in the control of the c	(1/12)	-	0.0	内轆轤撫で		内:5YR6/6		
	99	Ⅱ層	越中瀬戸	10.7		2.0	外 轆轤撫で・底部削り出し高台			密	内外面共に口縁部付近剥離
	100	пБ	皿 越中瀬戸	(2/12)	(3/12)		内轆轤撫で		内:7.5Y6/3		著しい。
	100	山 /西	四	12.5	-	-	外轆轤撫で			並	
	101	пБ	越中瀬戸	(1/12)	5.9		内轆轤撫で		内:2.5GY8/1		
	101	11/15	□ □			-	外 轆轤撫で・底部削り出し高台			並	長石、赤酸斑粒含む。
1	102	川屋	越中瀬戸	13.1	(3/12) 5.4	3.2	内轆轤撫で		内:10YR4/3		ET +*hate*! ^
,	. 02	/⊟	図中個月 ひだ皿	(1/12)	(4/12)	3.2	外 轆轤撫で・底部削り出し高台				長石、赤酸斑粒含む。さざ波
1	103	Ⅱ層	越中瀬戸	10.7	(4/12)	_	内轆轤撫で		内:7.5YR6/3		状口縁。
	.00	/ <u>=</u>	丸碗	(1/12)	-	-	外轆轤撫で			密	赤酸斑粒含む。
1	104	Ⅱ層	越中瀬戸	11.8			内轆轤撫で		内:10YR2/2	See	+ ##### A *-
,	- 5 1	/EI	丸碗	(1/12)	-		外 轆轤撫で			空	赤酸斑粒含む。
1	105	Ⅱ層	越中瀬戸	13.0	_		内 轆轤撫で 外 轆轤撫で		内:7.5Y4/3 M:10VP2/1	rbet	
,		→ 71 [©] I	丸碗	(1/12)	-		ケト			密	
1	106	Ⅱ層	越中瀬戸	-	5.5 -		外 轆轤撫で・底部削り出し高台		内:10YR3/1 51:7:5VP6/4 :	\/;	去砂斑粉今き。
	-		碗		(5/12)		内 轆轤撫で	段灯	クト :7.5YR6/4 - 3 内 :7.5YR3/2	龙	赤酸斑粒含む。

Tab.3.3.4 遺物観察表 陶磁器類 (4)

図版 番号	番号出土遺構	種類 器種	口径 (cm) (残存率)		器高 (cm)	高径指数 調整	焼成	色調	胎土	備考
	107 Ⅱ層	越中瀬戸	-	4.8	-	外 轆轤撫で・底部回転糸切り	良好	外:2.5YR7/6	並	漆継ぎ。
		瓶	-	(6/12)		内轆轤撫で		内:2.5YR3/2	17.	ロエムナ
	108 Ⅱ層	越中瀬戸	**	-	-	外 轆轤撫で	晋通	外:2.5Y5/1	並	長石含む。
		擂鉢	-	-		内轆轤撫で	-t- 1 -t	内:2.5Y5/1	24	#P 生粉質料会和
	109 Ⅱ層	越中瀬戸	-	15.2	-	外 轆轤撫で・底部削り出し高台	艮好	外:5YR4/1	並	雲母、赤酸斑粒含む。
		擂鉢	-	(1/12)		内轆轤撫で(卸目)	-t-1-	内:5YR4/1	ester	- カエン修士を17日
Fig.3.3.5	110 Ⅱ層	近世陶器	16.0	-	-	外 轆轤撫で	艮好	外:7.5Y8/1	密	内面に箆描き記号
		蓋	(1/12)	-		内轆轤撫で	-6-6-9	内:7.5Y7/1	ete	
	111 Ⅱ層	近世陶器	7.9	3.9	1.9	外 轆轤撫で・底部削り出し高台	艮好	外:7.5Y5/3	密	
		Ш	(1/12)	(3/12)		内 轆轤撫で		内:7.5Y5/3	-	cras rowell
	112 Ⅱ層	近世陶器	12.6	-	-	外轆轤撫で	艮好	外:10YR2/1	密	長石含む。天目茶碗か?
		碗	(1/12)	-		内 轆轤撫で		内:10YR2/1	-6-	
	113 Ⅱ層	近世陶器	14.6	-	-	外 轆轤撫で	良好	外:7.5Y7/2	密	
		碗	(1/12)	-		内 轆轤撫で		内:7.5Y7/2	-4	THE RESERVE OF THE
	114 Ⅱ層	近世陶器	15.8	5.5	6.7	外 轆轤撫で	良好	外:N8/0	密	見込みに目跡2個。
		碗	(1/12)	(3/12)		内 轆轤撫で		内:7.5Y6/3		town and the training of the 199
	115 Ⅱ層	近世陶器	27.3	-	-	外 轆轤撫で	良好	外:7.5Y7/1	密	内面に箆描きによる文様。
		鉢	(1/12)	-		内 轆轤撫で		内 :7.5Y7/1		
	116 ∐層	近世陶器	-	5.3	-	外 轆轤撫で・底部削り出し高台	良好		密	
		碗	-	(3/12)		内 轆轤撫で		内:7.5YR3/3		
	117 Ⅱ層	近世陶器	-	4.9	-	外 轆轤撫で・底部削り出し高台	良好	外:2.5Y8/1	密	見込み蛇の目釉剥ぎ。
		碗	-	(2/12)		内 轆轤撫で		内 :5Y6/2		
	118 Ⅱ層	近世陶器	14.8	8.2	4.2	外 轆轤撫で・底部削り出し高台	良好	外:10Y7/1	密	雲母含む。内面に染付。見込み
		鉢	(1/12)	(1/12)		内 轆轤撫で		内:10Y7/1		釉剥ぎ。
	119 Ⅱ層	近代磁器	7.6	-	-	外 轆轤撫で	良好	外:N8/0	密	
		m	(1/12)	-		内 轆轤撫で		内 :N8/0		
	120 Ⅱ層	近代磁器	-	3.7	-	外 轆轤撫で・貼付け高台	良好	外:N8/0	密	高台に砂付着。
		碗	-	(5/12)		内 轆轤撫で		内 :N8/0		
	121 Ⅱ層	近世磁器	8.9	4.2	2.1	外 轆轤撫で・割高台	良好	外 :7.5Y8/1	密	漆継ぎ。 見込みに 目跡 2 個
		ш	(2/12)	(4/12)		内 轆轤撫で		内:7.5Y8/1		
	122 Ⅱ層	近世磁器	-	4.9	-	外 轆轤撫で	良好	外:5GY8/1	密	内外面に染付。
		碗	-	(2/12)		内 轆轤撫で		内 :5GY8/1		
	123 Ⅱ層	近世磁器	-	7.1	_	外 轆轤撫で	良好	外:10Y7/1	密	見込みに染付。
		Ш	-	(3/12)		内 轆轤撫で		内:10Y7/1		
	124 Ⅱ層	近世磁器		10.4	-	外 轆轤撫で	良好	外:N8/0	密	
	101 0,11	Ш.	-	(2/12)		内 轆轤撫で		内 :N8/0		
	125 Ⅱ層	近世磁器	10.6	-	_	外 轆轤撫で	良好	外:N8/0	密	内面に箆描き沈線1条。
	120 2,0	鉢	(1/12)	_		内 轆轤撫で		内 :N8/0		
	126 Ⅱ層	近世磁器	11.1	_	_	外轆轤撫で	良好	外:2.5GY7/1	密	
	100 H/m	碗	(1/12)	-		内轆轤撫で		内:2.5GY7/1		
	127 Ⅱ層	近代磁器	-	5.8	-	外轆轤撫で	良好	外:N8/0	密	高台に砂付着。
	161 11/11	瓶	_	(2/12)		内轆轤撫で		内:N8/0		
	128 Ⅱ層	近代磁器	8.5	-		外轆轤撫で	良好	外:N8/0	密	内外面に色絵。
	170 日/園	碗	(2/12)	_		内轆轤撫で	•	内 :N8/0		

Tab.3.3.5 遺物観察表 石製品

図版 番号	出土遺構	種類	全長(残存長) (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	使用痕觀察所見備考
Fig.3.3.1 4	SK91	砥石	(3.0)	3.7	1.2	17.3	安山岩	4 面使用。
Fig.3.3.5 130	Ⅱ層	石帯	(3.1)	1.5	0.4	2.1	泥岩	裏面は剥離。隅に孔がなく、未成品と思われる。
131	II 層	砥石	16.7	5.2	5.0	521.9	凝灰岩	5 面使用。風化が著しい。
132	Ⅱ層	砥石	(12.0)	3.8	3.1	168.0	凝灰岩	4面?使用。風化が著しい。
133	Ⅱ層	砥石?	(8.2)	6.7	2.8	166.6	凝灰岩?	2面使用。断面が3層になっている。
134	Ⅱ層	磨石	7.9	8.4	1.5	124.9	砂岩	表裏面使用。側面に敲打痕有り。
135	II層	磨石	13.0	9.1	1.2	185.2	砂岩	表裏面使用。

Tab.3.3.6 遺物観察表 金属製品

図版 番号	番号	出土遺構	種類	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質	備考
Fig.3.3.6	3	SD10	煙管吸口	5.3	吸口径 0.35	接合部径 0.85	2.8	銅	
	129	Ⅱ層	釘	(7.7)	1.45	0.8	18.1	鉄	

Tab.3.3.7 遺物観察表 木製品

				1419.0.0.7	起物歌:	元400 小	
図版 番号	番号	出土遺構	種類	全長 (残存長) (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備考 * C14 年代測定結果
Fig.3.3.6	136	不明	鎌の柄	(20.9)	(2.5)	(2.5)	先端に刃の一部残る。二箇所に釘有り。
	137	SP95	杭	(18.9)	3.8	2.4	* 下端部に工具痕有り。6角にカット。
	138	SP97	杭	(18.7)	3.5	1.8	* cal AD893-cal AD997(相対比 0.968) 下端部に工具痕有り。 4 角にカット。
	139	SP98	杭	(17.2)	2.8	2.3	* 下端部に工具痕有り。 4 角にカット。上端部に工具痕 有り。
	140	I16	杭	(19.2)	3.4	2.5	* 下端部に工具痕有り。5角にカット。
	141	SP145	杭	(13.2)	3.5	2.6	* 下端部に工具痕有り。 ・
	142	SP106	杭	(24.0)	4.0	2.3	* 下端部に工具痕有り。4角にカット。
	143	I 9	杭	(23.9)	3.3	2.4	* 下端部に工具痕有り。5角にカット。 ・
	144	SP96	杭	(23.3)	3.6	2.1	* 下端部に工具痕有り。4角にカット。
	145	SP99	杭	(21.1)	4.1	2.7	* 下端部の工具痕不明瞭。所々に工具痕有り。 *
	146	SP107	杭	(25.2)	4.3	3.5	* 下端部に工具痕有り。5角にカット。上端部に工具痕 有り。
	147	SP141	杭	(22.2)	5.3	2.6	* cal AD810-cal AD889(相対比 0.910) 上端部は工具によって斜めに削ってあるが、工具痕不 明。
	148	SP143	杭	(24.6)	7.2	3.1	* 下端部に工具痕有り。4角にカット。
	149	SP140	杭	(27.2)	6.3	3.4	* ca AD1,015-cal AD1,043(相対比 0.766) 下端部に工具痕有り。 5 角にカット。上端部に工具痕 有り。
	150	SP146	杭	(31.6)	5.9	2.4	* cal AD1,029-cal AD1,160(相対比 1.000) 下端部に工具痕有り。粗雑に 4 角にカット。上端部に 工具痕有り。
							*

第4章 理化学的分析の成果

1 木製品の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社*

はじめに

本節では、発掘調査成果から課題とされた、包含層や遺構内より出土した木製品の年代観を検討するため、自然科学分析調査を実施する。

1. 試料

試料は、遺物包含層 (II層) および掘立柱建物跡との帰属 関係等検討中の柱穴などから出土した板材や杭材、柱材と みられる木製品である。各試料について、木材利用に関わ る所見の一つとなる木取りの観察を行った後、木製品の残 存する部位より樹種同定および放射性炭素年代測定に適し た箇所からそれぞれ試料の採取を行っている。試料の詳細 は、結果とともに表に示す。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

根等の目的物と異なる年代を持つと思われるものが付着、あるいは、混入している場合は、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後、HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅 (II) と銀箔 (硫化物を除去するため) を加えて、管内を真空にして封じきり、 500° (30 分) 850° (2 時間) で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650° で10 時間以上加熱し、グラファイ

トを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1 mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3 MV 小型タンデム加速器をベースとした 14 C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX-II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13 C/12 C の測定も行うため、2 C の測定も行うため、2 C の測定も行うため、2 C と

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い (14C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位での表記が通例とされるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正時の再計算、再検討に対応するため、本報告では 1 年単位で表記している。暦年較正結果は、測定誤差 σ 、2 σ 双方の値を示す。 σ は統計的に真の値が 68%の確率で存在する範囲、2 σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、 σ 、2 σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

^{* 〒103-0023} 東京都中央区日本橋本町 1-10-5

(2) 樹種同定

1) 木材

木製品の遺存状況や木取りの観察を行った後、剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール,アラビアゴム粉末,グリセリン,蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

同定根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東 (1982)、Wheeler 他 (1998)、Richter 他 (2006)を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林 (1991)、伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表 1 に示す。各試料の同位体効果による補正を行った測定結果 (補正年代) は、木 1 (II層) は 130 ± 30BP、木 2 (II層) は 110 ± 30BP、木 6 (SP69) は Modern、木 8 (SP95) は 1,090 ± 30BP、木 14 (SP107) は 1,180 ± 30BP、木 15 (SP108) は 100 ± 30BP、木 20 (SP113) は 180 ± 30BP、木 23 (II層) は 230 ± 30BP、木 26 (II層) は 110 ± 20BP、木 29 (II層) は 180 ± 30BP、木 31 (II層) は 200 ± 30BP、木 45 (II層) は 130 ± 30BP、木 52 (II層) は 200 ± 30BP、木 53 (II層) は 160 ± 20BP、木 61 (SP126) は 230 ± 30BP、木 68 (SP133) は 180 ± 20BP、木 73 (SP138) は 190 ± 30、木 75 (SP140) は 930 ± 30BP、木 78 (SP143) は 990 ± 30、木 82 (SP147) は 1,010 ± 30BP である。

この年代値を基にした暦年較正結果 (測定誤差 σ) は、 木 1(II 層) は calAD1,682-1,952、 木 2(II 層) は calAD1,692-1,920、 木 8(SP95) は calAD898-988、木 14(SP107) は calAD782-889、 木 15(SP108) は calAD1,694-1,918、 木 20(SP113) は calAD1,667-1,951、木 23(II 層) は calAD1,648-1,950、 木 26(II 層) は calAD1,693-1,919、 木 29(II 層) は calAD1,666-1,951、

木 31(II 層)は calAD1,660-1,951、木 45(II 層)は calAD1,683-1,929、木 52(II 層)は calAD1,660-1,951、木 53(II 層)は calAD1,670-1,942、木 61(SP126)は calAD1,649-1,950、木 68(SP133)は calAD1,688-1,948、木 73(SP138)は calAD1,663-1,951、木 75(SP140)は calAD1,040-1,154、木 78(SP143)は calAD1,015-1,146、木 82(SP147)は calAD995-1,029を示す。

(2) 樹種同定

結果を表2に示す。分析対象とした杭材および木製品は、 針葉樹5分類群(マツ属複維管東亜属・トウヒ属・スギ・ヒノキ・ アスナロ)と広葉樹3分類群(コナラ属コナラ亜属コナラ節・ク リ・エゴノキ属)に同定された。以下に、各種類の解剖学的 特徴等を記す。

・マツ属複維管東亜属(Pinus subgen. Diploxylon)マツ科 軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の 早材部から晩材部への移行は急~やや緩やかで、晩材部の 幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、 仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成さ れる。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状 の突起が認められる。放射組織は単列、1-10 細胞高。

・トウヒ属 (Picea) マツ科

軸方向組織は、仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。穂者組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。放射柔組織の細胞壁は厚く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。放射仮道管の有縁壁孔のフチは主としてトウヒ型となる。分野壁孔はトウヒ型で、1分野に3-6個。放射組織は単列、1-20細胞高。

- ・スギ (Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don) スギ科スギ属 軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的 広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に 2-4 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。
- ・ヒノキ(Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.)Endlcher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早

Tab.4.1.1 樹種同定結果

番号	遺物番号	地区	遺構	層位	種類	木取	樹種
木 1		H7 X10 Y6		Ⅱ層	板材	板目	スギ
木 2		G6 X10 Y6		Ⅱ層	板材	板目	ヒノキ
木6			SP69		柱(杭?)		草本類
木8	137		SP95		杭	分割材	スギ
木 14	148		SP107		杭	分割材	スギ
木 15	140		SP108		杭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節
木 20			SP113		杭	芯持丸木	エゴノキ属
木 23		E4 X1 Y10	01 110	Ⅱ層	板材	板目	スギ
		E5 X1 Y3		Ⅱ層	板材	分割材	トウヒ属
木 26		E5 X1 Y3		II 層	板材	柾目	スギ
木 29				Ⅱ層	板材	柾目	スギ
木 31		E5 X2 Y9					スギ
木 45		H3 X5 Y5		Ⅱ層	板材	柾目	ヘ イ クリ
木 52		H3 X4 Y3		Ⅱ層	板材	板目	
木 53		H2 X3 Y5		Ⅱ層	柱材?	板目	マツ属複維管束亜属
木 61			SP126		杭	芯持丸木	ヒノキ
木 68			SP133		杭	芯持角材	マツ属複維管束亜属
木 73			SP138		杭	芯持丸木	アスナロ
木 75	149		SP140		杭	分割材	クリ
木 78	148		SP143		杭	分割材	クリ
木 82			SP147		杭	分割材	クリ

材部から晩材部への移行は緩やか〜やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型〜トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・アスナロ (Thujopsis dolabrata Sieb. et Zucc.) ヒノキ科アスナロ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。 樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。 分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節

(Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus) ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1-2 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、多数が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ(Castanea crenata Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属 環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じ たのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を 有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、 1-15 細胞高。

・エゴノキ属 (Styrax) エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または 2-4 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3 細胞幅、1-20 細胞高。

4. 考察

杭、板材、柱材?等の木製品の暦年較正年代(σ)では、 古代~古代末頃の年代を示す試料と概ね近世およびそれ以 降の年代を示す試料が認められた。

古代~古代末頃の年代を示した試料は、SP95(木8)・SP107(木14)・SP140(木75)・SP143(木78)・SP147(木82)であり、すべて分割材を用いた杭であった。これらの杭の樹種は、針葉樹のスギと落葉広葉樹のクリの2種類が認められた。一方、近世およびそれ以降を示した試料は、板材に針葉樹のトウヒ属、スギ、ヒノキ、落葉広葉樹のクリ、杭には針葉樹の複維管束亜属、ヒノキ、アスナロ、広葉樹のコナラ節、エゴノキ属、柱材?には複維管東亜属がそれぞれ認められた。これらの結果をみると、古代~古代末の試料で検出された分類群は比較的単純な種類構成であるのに対して、近世および近世以降の試料では8分類群が認められた。また、全体的に針葉樹が多く利用

されること、板材ではスギが多く利用されるのに対して、 杭は雑多な種類構成を示すことなどが指摘される。

引用文献

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.

伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東 隆夫,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所,66-176.

伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006, 針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘 (日本語 版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙·伊東 隆夫,1982, 図説木材組織. 地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998, 広葉樹材の識別 I AWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩 (日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

Tab 4.1.2 放射性炭素年代測定結果(1)

				Tab.4	1.1.2	. 方	区 射	性灰刻	存牛	七測	正治:	果 (
試料		補正年代 * ¹ (BP)	δ 13C(‰)	補正年代 *² (曆年較正用)					暦年	較正	年代((cal)	*3			相対	t Code No.	測定機関 Code
木 1	II 層	130 ± 30	-24.94 ± 0.64	132 ± 25	σ			1,682							250		9 C1276701-1	IAAA-72420
								1,703							- 245	0.01		
								1,720							- 212	0.12		
								1,756							- 189	0.03		
								1,803							- 131 - 70	0.12		
								1,833 1,915							- 13	0.37		
								1,951							2	0.00		
					2 a			1,676							- 182	0.37		
					20			1,771							- 162 - 173	0.01		
								1.799							- 173 - 58	0.44		
								1.907							- 9	0.15		
								1,950							3	0.00		
₹2	II 層	110 ± 30	-25.17 ± 0.67	113 ± 25	O			1,692							241		7 C1276701-2	IAAA-72421
	AA / mm	110 = 00	20.17 = 0.07	110 = 20	Ü			1,717							- 222	0.09		
								1,811							- 122	0.14		
								1,831							- 60	0.51		
								1,910							- 30	0.08		
					2 a			1,682							- 213	0.28		
					20			1,757							- 189	0.00		
														147		0.70		
								1,951							4	0.00		
6	SP69	Modern		Modern		out	- 12/	_,501	cui	. 11/	1,001			-		0.00	C1276701-3	IAAA-72422
k 8	SP95		-23.12 ± 0.74	1,091 ± 26	0	cal	AD	898	- cal	ΑD	919	cal	BP	1.052	- 1.03	1 0.35	1 C1276701-4	
,	0100	1,000 ± 00	20.12 - 0.14	1,001 11 20	U				- cai - cal					1,003		0.64		, 2 120
					2 п				- cal					1,057		0.96		
					20									946		0.03		
14	SP107	1.180 ± 30	-28.43 ± 0.69	1,177 ± 28	σ	cal			- cal								0 C1276701-5	IAAA-72424
	51 101	1,100 = 00	20.10 ± 0.00	1,177 = 20					- cal					1,140				
					2 σ				- AD					1,176				
					20		AD				953			1,032		0.08		
											960			991		0.00		
₹ 15	SP108	100 ± 30	-26.24 ± 0.92	104 ± 29	0			1,694							- 223		9 C1276701-6	IAAA-72425
1, 10	51 100	100 ± 50	20.24 2 0.32	101 1 25	0			1,813							- 96	0.33		M 1 D 1 D 0
								1,858							- 88	0.04		
								1,866							- 57	0.22		
								1,906							- 32	0.10		
					2 0			1,682							- 213	0.28		
					20			1.758							- 189	0.00		
								1,804							- 14	0.70		
								1,951							4	0.00		
木 20	SP113	180 ± 30	-35.17 ± 0.96	176 ± 28	σ			1,667							- 267		8 C1276701-7	IAAA-72426
1 20	51 115	100 ± 50	33.17 ± 0.30	170 ± 20	0			1,735							- 168	0.53		
								1,797							- 145	0.09		
								1,932							- 143 1	0.18		
					2 0									293		0.19		
					20			1,726							- 136	0.56		
								1,837							- 106	0.00		
								1,851							- 100 - 81	0.02		
															- 74	0.00		
								1,872 1,917							2	0.20		
± 23	II 🔯	230 + 30	- 25 45 ± 0.72	228 ± 26	σ.			1,648							<u>-</u> - 282		2 9 C1276701-8	IAAA-72427
₹23	II層	230 ± 30	-25.45 ± 0.72	CCO T CO	σ													man / 444/
								1,782							- 153			
					2 -			1,949 1,641							- 0 - 269	0.01		
					20													
								1,739							- 205	0.01		
								1,747							- 199	0.00		
								1,762							- 148			
- 20	TT EST	110 00	0475 1 050	110 04				1,937							1	0.08		1447 72420
K 26	II 層	110 ± 20	-24.75 ± 0.59	110 ± 24	σ			1,693							- 240		0 C1276701-9	IAAA-72428
								1,717							- 223	0.09		
								1,812							- 60	0.67		
					_			1,909							- 31	0.08		
					2 0									267		0.28		
								1,805							- 18	0.70		
r -								1,951							4	0.00		0 74.1. = 0.15.
₹ 29	II 層	180 ± 30	-24.24 ± 0.81	182 ± 26	O			1,666							- 268			O IAAA-72429
														213				
								1,761							- 167	0.28		
								1,796							- 147	0.09		
						cal	AD	1,936	- ca	AD	1,951	cal	BP	14	1	0.19	2	
					2 σ	cal	AD	1,654	- ca	AD	1,693	cal	BP	296	- 257	0.21	0	
																	_	
						cal	ΑD	1,727	- ca	AD	1,812	cal	BP	223	- 138	0.59	2	

^{*1} 同位体効果による補正を行った年代を示す。

*2 暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正時に再検討できるよう、丸める前の年代値を併記している。

*3 RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用

*4 統計的に真の値が入る確立は σ は 68%、2 σ は 95% である。相対比は、σ・2 σ をそれぞれ 1 とした場合、確立的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

Tab.4.1.3 放射性炭素年代測定結果(2)

į	試料	補正年代 *1	δ 13C(‰)	補正年代*						年較	正年代	(ral)	*3				相対と	Ł Code No.	測定機関
木 31	II 層	(BP) 200 ± 30	-22.99 ± 0.75	(暦年較正用 202 ± 25	σ	cal	AD	1.660			1,678			200		272		Code No.	Code IAAA-72430
				202 - 20	Ü						1,773					177	0.293		IAAA-12430
											1,800				-	150	0.419		
											1,951				-	-1	0.182	2	
					2 σ						1,683				-	267	0.276	3	
											1,805					145	0.557		
木 45	II 層	130 ± 30	-24.01 ± 0.74	126 + 25							1,951					-1	0.167		
N 10	11 /	130 ± 30	24.01 ± 0.74	126 ± 25	0						1,707					243		C1276701-12	IAAA-72431
											1,734 1,825					216	0.118		
											1,884					125 66	0.128 0.440		
											1,929					21	0.133		
					2 σ						1,764					186	0.347		
											1,776					174	0.003		
											1,894				-	56	0.490)	*
											1,939				-	11	0.156	,	
+ 52	TT local	200 20	0400 1 0.75	004 05							1,953					-3	0.003		
₹ 52	II層	200 ± 30	-24.93 ± 0.75	201 ± 25	σ						1,679					271		C1276701-13	IAAA-72432
											1,800					150	0.524		
					2 a						1,951					-1	0.184		
					20						1,683 1,805					267	0.268		
											1,951			19		145 -1	0.559 0.173		
₹53	II 層	160 ± 20	-21.45 ± 0.66	157 ± 24	σ						1,689			280		261		C1276701-14	IAAA.72433
											1,779					171	0.526		MM-12400
											1,809			151		141	0.113		
						cal	AD	1,926	- cal	ΑD	1,942	cal	BP	24	-	8	0.180		
					2 σ	cal	AD	1,666	- cal	AD	1,699	cal	BP	284	-	251	0.169		
											1,784				-	166	0.407		
											1,818				-	132	0.110		
											1,880					70	0.112		
61	SP126	230 ± 30	-24.08 ± 0.74	226 ± 25							1,953			35		-3	0.202		
. 01	DITEO	250 ± 50	24.00 ± 0.74	220 I 25	U						1,668 1,797			301		282		C1276701-15	IAAA-72434
											1,757				_	153	0.436		
					2 σ						1,681					269	0.490		
											1,744					206	0.008		
											1,802					148	0.418		
											1,951					-1	0.083		
× 68	SP133	180 ± 20	-24.26 ± 0.58	175 ± 24	σ	cal	AD	1,668	- cal	AD	1,682	cal	BP	282	-	268	0.198	C1276701-16	IAAA-72435
											1,781				-	169	0.561		
											1,804				-	146	0.088		
					0						1,948				-		0.153		
					20						1,694					256	0.194		
											1,813						0.598		
											1,841 1,857					93	0.001		
											1,866					93 84	0.004		
											1,952				_		0.201		
73	SP138	190 ± 30	-22.34 ± 0.59	193 ± 24							1,680					270		C1276701-17	IAAA-72436
											1,742					208	0.021		
											1,801				-	149	0.534		
											1,951				-	- 1	0.193		
											1,684				-	266	0.233		
											1,807				-	143	0.580		
75	SD1.40	020 ± 20	22.00 ± 0.77	000 1 00							1,952				-		0.187		
. 13	31 140	930 ± 30	-23.68 ± 0.77	932 ± 26							1,055					895		C1276701-18	IAAA-72437
											1,110					840 706	0.389		
											1,154 1,160					796 700	0.447		
78	SP143	990 ± 30	-25.91 ± 0.55	989 ± 24							1,043					790 907	0.766	C1276701 10	IAAA 70400
		_ 00									1,118					907 832	0.766	C1276701-19	1AAA-1∠438
											1,146					002 804	0.203		
											1,050					900	0.670		
											1,125						0.257		
											1,151					799	0.237		
82	SP147	$1,010 \pm 30$	-21.41 ± 0.80	$1,010 \pm 26$		cal A					1,029			0.5.5		921		C1276701-20	IAAA-72439
					2 σ	cal A	AD 9				1,045					905	0.923		2.22.00
											1,120					830	0.063		

^{*1} 同位体効果による補正を行った年代を示す。
*2 暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正時に再検討できるよう、丸める前の年代値を併記している。
*3 RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用
*4 統計的に真の値が入る確立は σ は 68%、2 σ は 95% である。相対比は、 σ ・2 σ をそれぞれ 1 とした場合、確立的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

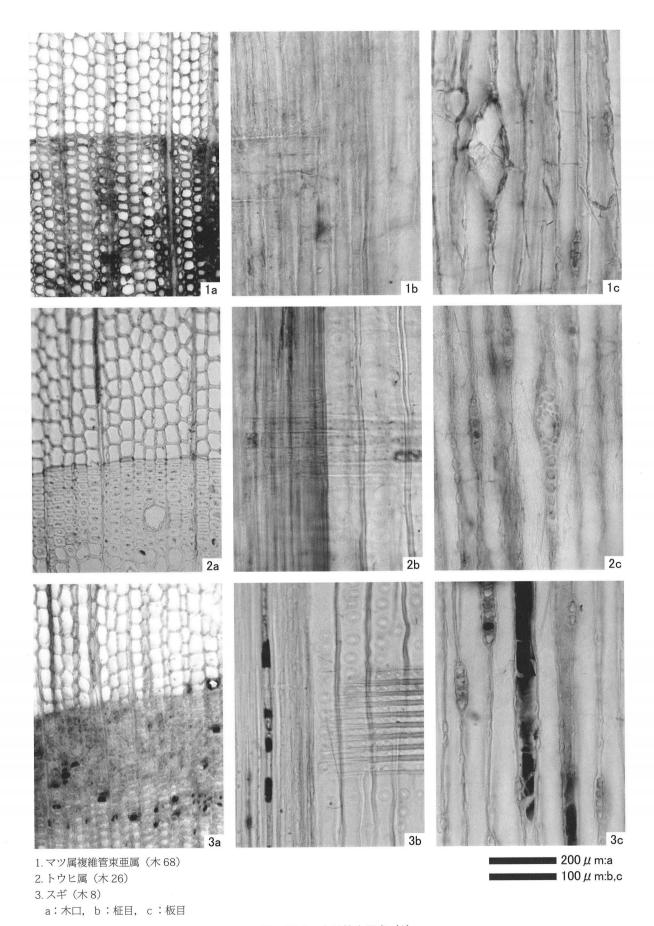


Fig.4.1.1 木材拡大写真(1)

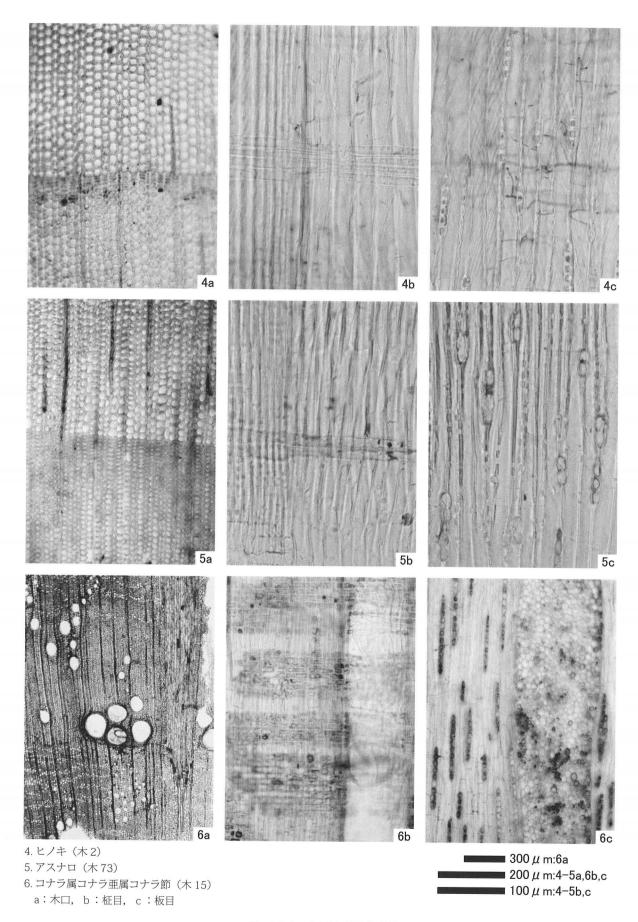


Fig.4.1.2 木材拡大写真(2)

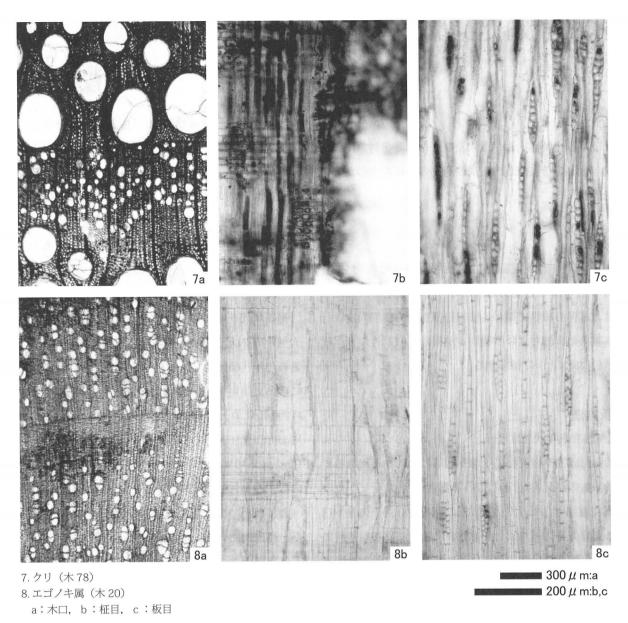


Fig.4.1.3 木材拡大写真(3)

2 放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社*

はじめに

本節では、土師器内面付着物及び炭化材等を対象に放射 性炭素年代測定を実施し、遺構や遺物の時期推定のための 資料を作成した。

1. 試料

放射性炭素年代測定試料は、土師器内面付着物 2 点、炭化材 4 点の計 6 点である。このうち、炭化材試料については、試料の履歴に関わる情報を得るため樹種同定を行う。各試料の詳細および樹種同定結果は、放射性炭素年代測定結果(Tab.4.2.1)に併記する。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土師器付着物や炭化材に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが混入・付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)

から提供されるシュウ酸 (HOX-II) とバックグラウンド試料 の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて δ 13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。放射性炭素年代は、 δ 13C の値を用いて同位体効果の補正を行った値 (補正値) と、補正前の値を併記する。

補正年代を用いて、暦年較正を実施する。暦年較正とは、 大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出 された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動 による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い(14C の半減期 5730 \pm 40 年)を較正することである。暦年較正は、 RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用いる。そ の際、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正結果は、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表記する。また、測定誤差 σ 、2 σ (σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2 σ は真の値が95%の確率で存在する範囲)を示す。表中の相対比(確立分布)とは、 σ 、2 σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

分析試料とされた炭化材を観察し、観察範囲内の外側年 輪部分を放射性炭素年代測定試料として分割し、残る試料 を樹種同定試料とする。これらの試料は、自然乾燥させた 後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3 断面の割断面を作製する。実体顕微鏡および走査型電子顕 微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を 現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材 識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材

^{* 〒103-0023} 東京都中央区日本橋本町 1-10-5

組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982) や Wheeler 他 (1998) を参考に、日本産木材の組織配列については、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果(補正年代)は、

土師器内面付着物 (試料番号 1) は 500 ± 30 yrBP、土師器内面付着物 (試料番号 2) は 660 ± 30 yrBP、SK37 5 層 炭化材 (試料番号 3) は $1,100 \pm 30$ yrBP、SK37 1 層 炭化材 (試料番号 4) は 860 ± 30 yrBP、SK37 2 層 炭化材 (試料番号 5) は 950 ± 30 yrBP、G6-16 包含層下 No.4 炭化材 (試料番号 6) は 610 ± 30 yrBP を示す。

暦年較正結果(σ)は、土師器内面付着物(試料番

Tab.4.2.1 放射性炭素年代測定結果

	試米	4		補正年代	δ 13 C	測定年代	Code No.	
番号	遺構(地点)名/層名/取上No		性状(樹種)	(yrBP)	(‰)	(yrBP)	Code No.	
1	TTR-19 F4(X=3,Y=3)	II 層	土師器内面付着物	500 ± 30	-23.16 ± 0.49	470 ± 30	IAAA-82436	
2	TTR-19 $F4(X=1,Y=1)$	II 層	土師器内面付着物	660 ± 30	-27.24 ± 0.47	700 ± 30	IAAA-82437	
3	TTR-20 SK37	5層	炭化材 (トチノキ)	$1,100 \pm 30$	-28.54 ± 0.78	$1,160 \pm 30$	IAAA-82438	
4	TTR-20 SK37	1層	炭化材 (カエデ属)	860 ± 30	-27.44 ± 0.48	900 ± 30	IAAA-82439	
5	TTR-20 SK37	2層	炭化材 (クリ)	950 ± 30	-27.02 ± 0.69	980 ± 30	IAAA-82440	
6	TTR-20 G6-16 包含層下	No. 4	炭化材 (クリ)	610 ± 30	-23.06 ± 0.57	580 ± 30	IAAA-82441	

¹⁾ 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。

Tab.4.2.2 暦年較正結果

140.5.2.2													
試料名	補正年代 (yrBP)	暦年較正年代 (cal)							相対比	Code No.			
試料番号 1	502 ± 29	σ	cal AD	1,414 -	cal AD	1,436	cal	BP	536	-	514	1.000	IAAA-82436
TTR-19 F4(X=3,Y=3)		2 σ	cal AD	1,334 -	cal AD	1,336	cal	BP	616	-	614	0.004	
II 層 土師器内面付着物			cal AD	1,398 -	cal AD	1,447	cal	BP	552	-	503	0.996	
試料番号 2	660 ± 33	σ	cal AD	1,284 -	cal AD	1,308	cal	BP	666	-	642	0.497	IAAA-82437
TTR-19 F4(X=1,Y=1)			cal AD	1,361 -	cal AD	1,386	cal	ΒP	589	-	564	0.503	
II層		2 σ	cal AD	1,276 -	cal AD	1,325	cal	BP	674	-	625	0.497	
土師器内面付着物			cal AD	1,344 -	cal AD	1,394	cal	BP	606	-	556	0.503	
試料番号3	$1,099 \pm 32$	σ	cal AD	897 -	cal AD	922	cal	BP	1,053	-	1,028	0.378	IAAA-82438
TTR-20 SK37 5 層			cal AD	942 -	cal AD	985	cal	ΒP	1,008	-	965	0.622	
炭化材 (トチノキ)		2 σ	cal AD	888 -	cal AD	1,014	cal	BP	1,062	-	936	1.000	
試料番号 4	860 ± 31	O	cal AD	1,158 -	cal AD	1,219	cal	BP	792	-	731	1.000	IAAA-82439
TTR-20 SK37 1 層		2 σ	cal AD	1,048 -	cal AD	1,086	cal	BP	902	-	864	0.116	
炭化材 (カエデ属)			cal AD	1,123 -	cal AD	1,138	cal	ВP	827	-	812	0.032	
			cal AD	1,150 -	cal AD	1,258	cal	BP	800	-	692	0.853	
試料番号 5	950 ± 32	O	cal AD	1,028 -	cal AD	1,051	cal	ΒP	922	-	899	0.276	IAAA-82440
TTR-20 SK37 2 層			cal AD	1,082 -	cal AD	1,126	cal	ΒP	868	-	824	0.535	
炭化材(クリ)			cal AD	1,135 -	cal AD	1,152	cal	ΒP	815	-	798	0.189	
		2 σ	cal AD	1,022 -	cal AD	1,158	cal	BP	928	-	792	1.000	
試料番号 6	610 ± 31	σ	cal AD	1,302 -	cal AD	1,328	cal	ΒP	648	-	622	0.410	IAAA-82441
TTR-20 G6-16			cal AD	1,341 -	cal AD	1,367	cal	BP	609	-	583	0.396	
包含層下 No. 4			cal AD	1,382 -	cal AD	1,395	cal	ΒP	568	-	555	0.194	
炭化材 (クリ)		2 σ	cal AD	1,295 -	cal AD	1,404	cal	BP	655	-	546	1.000	

¹⁾RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用

²⁾BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

³⁾ 付記した誤差は、測定誤差σ (測定値の 68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

²⁾ 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

³⁾ 暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。

⁴⁾ 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である

⁵⁾ 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

号 1) は calAD1,414-1,436、土師器内面付着物 (試料番号 2) は calAD1,284-1,386、SK37 5 層 炭化材 (試料番号 3) は calAD897-985、SK37 1 層 炭化材 (試料番号 4) は calAD1,158-1,219、SK37 2 層 炭化材 (試料番号 5) は calAD1,028-1,152、G6-16 包含層下 No. 4 炭化材 (試料番号 6) は calAD1,302-1,395 である。

(2) 樹種同定

放射性炭素年代測定試料とした炭化材 4 点は、広葉樹 3 分類群 (クリ・カエデ属・トチノキ) に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15 細胞高。

・カエデ属 (Acer) カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2~3個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列~交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~5細胞幅、1~40細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・トチノキ(Aesculus turbinata Blume) トチノキ科トチノキ属 散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単 独または 2~3個が複合して散在し、年輪界に向かって 径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配 列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、 単列、1~15細胞高で階層状に配列する。

4. 考察

土師器内面付着物および炭化材からは、古代~中世頃の暦年代が得られた。このうち、土師器内面付着物(試料番号 1.2)や包含層下 No. 4 炭化材(試料番号 6)からは、中世(13~15世紀)頃の暦年代が得られた。徳万頼成遺跡で実施された木製品や炭化物等を対象とした放射性炭素年代測定結果によれば、奈良・平安時代頃、古代~古代末(中世初頭)、近世および近世以降の暦年代に集約される傾向が認められており、一部の試料で13世紀頃の暦年代が確認されたの

みであった (未公表資料)。本分析結果は、中世頃の本遺跡 の様相を示す資料と考えられる。

一方、SK57 $1 \cdot 2 \cdot 5$ 層の炭化材は、それぞれ異なる暦年代を示した。5 層 炭化材が最も古く $9 \sim 10$ 世紀、2 層炭化材は $11 \sim 12$ 世紀、1 層は $12 \sim 13$ 世紀と、上層に向かって年代が下るという特徴を示すことから、SK37 の埋積過程を示している可能性がある。

また、炭化材からは、クリやカエデ属、トチノキなどの 広葉樹が確認された。このうち、クリとカエデ属は比較的 重硬で強度が高い材質を有し、トチノキはそれよりは軽 く、保存性が悪い。いずれも、河畔林や渓谷林を構成する 種類であることから、遺跡周辺の河川沿い等に生育してい た樹木を利用したと考えられる。なお、上記した放射性炭 素年代測定試料とした木片や炭化物、炭化材の樹種同定結 果では、遺構確認面とされた堆積物(灰褐色粘土)に認めら れた炭化物集中や、古代~古代末(中世初頭)頃の暦年代を 示した杭材や柱穴覆土より抽出された木片や炭化材にクリ が比較的多く認められている。本分析結果においても、ク リが確認されていることから、比較的多く利用される種類 であった可能性がある。

引用文献

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所. 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載 I.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載IV. 木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

島地 謙·伊東隆夫,1982, 図説木材組織. 地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第5章 総 括

本遺跡の本発掘調査によって得られた情報を簡単に整理し、まとめとしたい。歴史的環境の項でも触れているが、本遺跡の立地する砺波市般若地区は、古代の東大寺領荘園である伊加流伎(伊加留岐村)・井山村の比定地であり、中世には徳大寺家領般若野荘の荘域となることを念頭に置き、記述を進めたい。

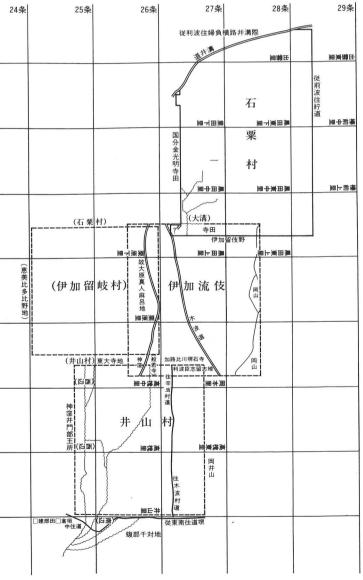
(1) 道路遺構について

上層遺構面で検出された道路遺構は、2条の並行する溝(SD07-19・07-119)の間を路面とし、8基の土坑が連続する波板状遺構(凹凸面)を有し、路面幅は $2.2 \sim 3.8 \,\mathrm{m}$ (平均約 $3 \,\mathrm{m}$)、検出延長約 $50 \,\mathrm{m}$ を測る。東西に直線的に造成されており、削平の可能性があるものの硬化面は認められなかった。遺構年代は溝から $8 \sim 9$ 世紀代の須恵器が出土しており、古代に帰属する可能性がある。

富山県内では道路遺構の検出例が近年増加しつつあるが、波板状遺構を伴うものは管見では梅原落戸遺跡

(南砺市)と打出遺跡(富山市)の2例だ けであり、いずれも中世に属する。梅 原落戸遺跡の道路遺構は、延長約 17 m、 路面幅 2.1 m、両側に幅 20~30 cmの 側溝が付設し、土坑約15基からなる波 板状遺構が検出された。特徴は、路面に 厚さ15cmの砂を盛っていることである。 時期は14~15世紀代と報告されてい る。打出遺跡では、総延長 100 m、路 面幅 0.8~1.5 mで約 20 基の土坑から なる波板状遺構がみられる。15世紀末 頃まで遺跡が継続するという。 2 例とも 波板状遺構の土坑の長軸=路面幅とな るが、徳万頼成遺跡の場合、削平も考え られようが土坑の長軸が路面幅の半分 にも満たない。

本遺跡の道路遺構が古代の場合、想起されるのが東大寺開田地図にある道の表記であるⁱⁱ(右図参照)。砺波平野東部には荘園が3ヶ所あり、それぞれについて天平宝字3年(759)越中国砺波郡石粟村官施入田地図、同年越中国伊加流伎開田地図、神護景雲元年(767)越中国砺波郡伊加留岐村墾田地図、同年越中国



砺波郡井山村墾田地図が伝存している Fig.5.1.1 石粟村・伊加流伎(伊加留岐村)・井山村各図の位置関係 (金田章裕 1998 より転載)

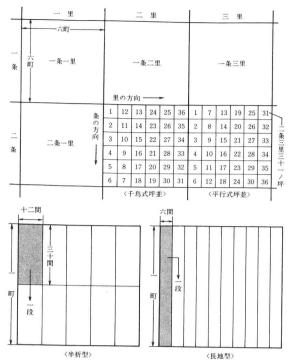


Fig.5.1.2 条里坪付と坪地割呼称図 (落合重信 2003 より転載)

"。この地図には何本かの道が描かれており、石栗村には「従利波往婦負横路并溝際・道并溝」がある。東西方向に描かれる道はこれだけだが、図上ではやや湾曲している。また、般若野荘時代の地図は存在しないので比較検討する材料がない。道路とは往来用の施設であり、地形上の制約がなければ最短ルートを設定するはずだが、道路遺構 SF07-123 は東西方向に直線的に延びるため、あたかも条里地割を反映しているように見える。

(2) 掘立柱建物群について

掘立柱建物は計4棟検出しているが、柱配置が凡 そ把握できるのはSB07-01とSB07-02の2棟だけで あり、いずれも総柱建物である。県内の掘立柱建物 1250棟を分析したところ、中世前期には総柱の比率 が80%に達するが、中世中期には50%と低下し、中 世後期には20%台に減じるという¹。本遺跡の掘立柱

建物は、総じて柱穴規模が小さいので中世に属すると判断されるが、柱配置などから詳細年代を与えることはできない。注目すべきは建物の方位であり、いずれの建物も桁行・梁行が東西南北に沿っている。これは方位を意識して建設されたか、そのような地勢に影響を受けたとも読み取ることができる。中世は般若野荘時代であるが、本遺跡は荘域において当該期の建物がまとまって検出された初例となる。

(3) 遺構の形成と条里制地割の存在

本遺跡が立地する土地は、古代から中世にかけて東大寺や徳大寺家といった有力寺社・氏族が占有した 荘園の比定地である。荘園の存在を示す直接証拠となる遺物は残念ながら出土しなかったが、柵列状遺構 SAO2 において平安時代(8世紀後半~10世紀後半)の杭列 A は南北方向、平安時代~鎌倉時代(10世紀後半~12世紀後半)の杭列 B が東西南北の方向に沿って検出された。杭列は水田遺構や土地区画、溝遺構などに伴うもので、荘園の田地と直接関わる遺構の可能性がある。また、古代期の可能性をもつ道路や中世期の掘立柱建物の建物配置や方位などを含め、今回検出された遺構の多くは東西南北の方位に準拠、もしくは意識して造成されたと思われる。それら遺構形成に大きな影響を与えたのは、古代の土地制度である条里制地割の存在が最有力であると考えられる。東大寺開田地図には方格地割が描かれており、条里制開拓が行なわれたのは明らかであり、SAO2 の杭列 A はまさに荘園成立段階の 8 世紀後半の開拓を裏付ける可能性がある。また、掘立柱建物群の存在は、その条里制地割が中世段階まで残存していたことの傍証とも考えられる。

(野原大輔)

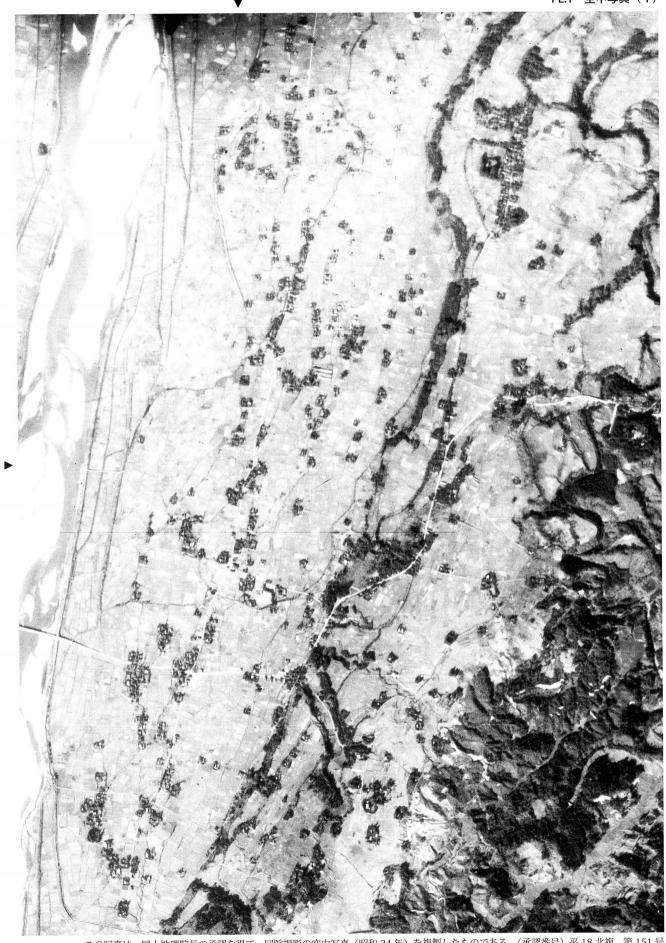
i 酒井重洋・古川知明 2008「越中国の様相第 21 回北陸中世考古学研究会資料集『北陸中世のみち』

ii 金田章裕·田島公 1996「越中国砺波郡東大寺領荘園図」『日本古代荘園図』東京大学出版会

iii 金田章裕 1998「越中国砺波郡東大寺領荘園」『古代荘園図と景観』東京大学出版会

iv 高梨清志 2004「越中(富山県)の様相」第 17 回北陸中世考古学研究会資料集『掘立柱建物から礎石建物へ』

v 落合重信 2003「条里制」『日本荘園史大辞典』吉川弘文館



この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真(昭和 24 年)を複製したものである。(承認番号)平 18 北複、第 151 号



この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真(平成 14 年)を複製したものである。(承認番号)平 18 北複、第 151 号



垂直写真 (中世遺構面)

